

目 次

【1】概説	1
【1】古代.....	1
【2】中世.....	7
【3】近世.....	18
【4】近代.....	27
【2】重要事項のまとめ	40
【1】重要年表のまとめ.....	40
【2】文化史のまとめ.....	47
【3】既出重要事項のまとめ.....	53
【3】重要問題演習	107
【1】重要問題（1）	107
【2】重要問題（2）	110
【3】重要問題（3）	113
【4】重要問題（1）の解答・解説.....	116
【5】重要問題（2）の解答・解説.....	121
【6】重要問題（3）の解答・解説.....	125
【4】既出問題の解説	129
【1】2009 年度	129
【2】2008 年度	144
【5】写真資料	159

【 1 】 概説

【 1 】 古代

【 1 】 飛鳥時代

(1) 推古朝の政治（聖徳太子の新政）

推古天皇の摂政になった聖徳太子は有力豪族をおさえ、氏姓制度の弊害を除いて天皇中心の中央集権国家を確立しようとした。まず、603年には冠位十二階を制定し、門閥世襲を打破し、人材登用をしようとした。604年には官吏としての道德・心構えを説く為に憲法十七条を制定した。外交では607年に小野妹子を隋に派遣して隋との国交を開始した。また、後に大化改新で活躍する高向玄理・僧旻も留学生・留学僧として隋に渡った。

(2) 飛鳥文化

飛鳥文化は日本最初の仏教文化といえる。聖徳太子の法隆寺、四天王寺などの寺院建築、太子による經典注釈書三経義疏などはその表れである。建築では法隆寺金堂・五重塔が有名である。彫刻では、鞍作鳥作といわれる法隆寺金堂釈迦三尊像、長身の美しい法隆寺百済観音像、半跏思惟像である広隆寺彌勒菩薩像、中宮寺彌勒菩薩像、法隆寺夢殿救世観音像などが有名である。工芸では金工である法隆寺玉虫厨子がある。また橘大郎女が、夫である聖徳太子を偲んで作った中宮寺の天寿国繡帳は有名である。

(3) 大化改新

高向玄理、僧旻、南淵請安が唐から帰国し、その新知識が原動力になり、645年、中大兄皇子、中臣鎌足が蘇我蝦夷・入鹿父子を滅ぼした。年号を初めてたてて大化とし、都は難波に移された。646年に改新の詔が出され、戸籍・計帳を作り、各人に口分田が配給された。これを班田収授法という。中大兄皇子は後に天智天皇となり、663年、百済復興への要請に応じて出兵したが、白村江で唐・新羅の連合軍に大敗した。

(4) 天武・持統天皇の政治

672年、皇太子大友皇子と皇太弟大海人皇子との皇位継承争いが起こり、後者が勝利した。これを壬申の乱という。大海人皇子は飛鳥浄御原宮で即位し天武天皇となり、皇親政治を行った。天武天皇は、天智天皇の時に復活した部曲を廃止し、飛鳥浄御原令22巻の編纂を開始し、後、持統天皇の時に施行された。また、684年「八色の姓」を制定し、身分秩序の再編成を行った。更に天武天

皇の^{きさき}后であった^{じとう}持統天皇は唐の^{とじょう}都城にならい、藤原京を営んだ。

(5) 白鳳文化

白鳳文化は、大化改新後の天武・持統・文武を中心とした7世紀後半から8世紀初頭の文化である。^{りつりょう}律令国家の形成期にふさわしい清新の気に満ちた、^{はつ}澹^{らつ}澹とした貴族文化、仏教文化と言える。この時代には、^{やくし}薬師寺など官立の大寺院が^{こんりゅう}建立され、僧侶・寺は国の統制をうけた。建築としては、^{やくし}薬師寺^{とう}東塔、彫刻としては、^{やくし}薬師寺金堂^{しやうかんのんぞう}薬師三尊像、^{こうふく}興福寺^{ぶつとう}仏頭などがある。絵画としては、^{たかまつづか}法隆寺金堂壁画、^{たかまつづか}高松塚古墳壁画が有名である。

(6) 律令の制定

日本で最初の法令集としては、天智天皇の時代に中臣鎌足が編纂した^{おうみ}近江令があるが、現存はしていない。次に天武天皇の時代に飛鳥浄御原令が編纂されたが、施行されたのは持統天皇の時代であった。次に^{もんむ}文武天皇の時代701年に^{おさかべ}刑部親王、^{ふじわらのふ}藤原不比等らによって^{たいほう}大宝律令が制定されたが現存はしていない。更に、^{げんしやう}元正天皇の時代に藤原不比等らによって^{やうろう}養老律令が編纂され、757年藤原^{なかまろ}仲麻呂が施行した。

(7) 税制

7世紀後半から8世紀頃にかけての税制は、^{そやうちやう}租庸調が有名である。租とは、口分田1段につき稲2束2把を納めるもので、これは収穫の約3%にあたった。庸とは^{せいてい}正丁（21歳～60歳の男子）が1年に10日間服する^{さいえき}歳役の代わりに布2丈6尺を納めさせるものであった。^{じてい}次丁（61歳～65歳の男子）は正丁の2分の1を納めた。調とは、絹・糸・綿などの特産物の負担のことであった。その他、^{ぞうやう}雑徭とは^{こくし}国司の命令によって土木工事に従事するものであり、正丁で60日以上と定められた。

[2] 奈良時代

(1) 奈良時代の政治の推移

710年、^{げんめい}元明天皇は唐の都^{ちやうあん}長安を模した^{へいじやうきやう}平城京に遷都した。奈良時代は藤原氏と皇族や他の貴族との勢力争いが展開された時代である。^{ながやあう}長屋王は口分田が足りなくなってきたので、723年、^{さんぜいっしん}三世一身法を施行した。その後、長屋王を倒した藤原4子が妹の^{こうみやうし}光明子を^{しやうむ}聖武天皇の皇后にたてて、権勢を誇った。その後、^{たちばなのもろえ}橘諸兄が政権を握ったが、諸兄のブレーンである^{きびのまき}吉備真備、^{げんぼう}僧玄昉を排除

しようと藤原^{ひろつぐ}広嗣の乱が起こった。この乱は失敗に終わったが、恐れを抱いた聖武^{しやうむ}天皇は、恭仁・難波・紫香楽と都を次々に移した。鎮護^{ちんご}国家思想のなかで聖武天皇は紫香楽宮で743年大仏建立の詔を出し、752年、孝謙^{こうけん}天皇の時に大仏開眼供養^{かいげんくよう}が行われた。

時の権力者は藤原仲麻呂^{なかまろ}であった。743年には墾田^{こんでん}永年私財^{えいねんしざい}法が施行された。藤原仲麻呂の時に橘諸兄の子、橘奈良麻呂^{ならまろ}が反逆したが失敗に終わった。藤原仲麻呂は自らを恵美押勝^{えみのおしかつ}と呼び権勢を誇ったが、孝謙上皇・道鏡^{どうきやう}二人による政権と対立し、764年に恵美押勝の乱を起こしたが敗死した。その後道鏡は太政大臣^{たいじやうだいじん}禪師、更には法王^{ほうおう}になり、権勢をふるった。称徳^{しょうとく}天皇は彼を皇位につけようとしたが、和気清麻呂^{わけのきよまろ}らによって阻まれるという宇佐神宮神託事件が起こった。称徳天皇が没すると道鏡は追放された。その後藤原百川^{ももかわ}らが天智系の光仁^{こうにん}天皇を擁立して奈良時代は終わることになる。

(2) 天平文化

天平文化^{てんぴやう}は、盛唐文化の影響を受け、貴族的仏教文化を展開し、国際的性格を持つ。修史事業としては、712年、稗田阿礼^{ひえだのあれ}が覚えていたものを太安万侶^{おののやすまろ}が筆録し、古事記^{こじき}が完成した。また、720年には、舎人親王^{とねり}らが日本書紀を完成した。また、聖武天皇の仏教保護のもと、国分寺^{こくぶん}や国分尼寺^にが建立された。建築としては、東大寺法華堂^{さんがつ}（三月堂）や唐招提寺金堂^{とうしやうだい}、正倉院宝庫^{しょうそういん}などが建てられた。正倉院宝庫の建築様式は校倉造^{あぜくらづくり}といわれる。絵画では正倉院鳥立女屏風^{ちやうもうりゅうじよびやうぶ}、薬師寺吉祥天像^{きしやうてん}が有名である。天平文化の主な彫刻としては、乾漆像では、唐招提寺鑑真和上像^{がんじんわじやう}、興福寺阿修羅像^{こうふく あしゅら}、東大寺法華堂不空絹索観音像^{ぼっけ ふくくせんじやく}、塑像^{そぞう}では、東大寺法華堂執金剛神像^{ぼっけ しつこんごう}、東大寺戒壇院四天王像^{かいだんいん}を挙げることができる。

[3] 平安時代

(1) 平安京

光仁天皇のあと即位した桓武^{かんむ}天皇は、784年に山背国^{やましる}（のち山城国）に長岡京^{ながおか}を造営し、更に794年平安京^{へいあん}に遷都した。810年、嵯峨^{さが}天皇の代に藤原^{ふじわら}薬子^{くすこ}が平城上皇の復位を企てた、いわゆる薬子の変が起こった。これを機会に天皇の側近にあつて機密文書や訴訟を取り扱う蔵人所^{くらうど}が設置され、その初代長官には藤原冬嗣^{ふゆつぐ}が任命された。また、嵯峨天皇の時代には三代格式^{さんだいききやくしき}の最初のものとして『弘仁格式^{こうにん}』の編纂が行われた。

(2) 弘仁・貞観文化

8世紀末から9世紀末ごろの平安時代前期の文化を弘仁・貞観文化という。唐文化を消化した貴族文化であり、密教の影響の強い仏教文化である。この時代には、仏の呪力により国家を鎮護し、加持祈祷により人々に現世利益をもたらすという密教がさかんになった。比叡山延暦寺を総本山とする最澄の天台密教と高野山金剛峯寺を総本山とする空海の真言密教とがある。この時代の建築物としては、奈良県室生寺の金堂、五重塔がある。この時代の彫像は木彫りが多く、一木造、翻波式が特徴であり、室生寺金堂釈迦如来像、観心寺如意輪観音像、薬師寺僧形八幡神像が有名である。絵画では神護寺の両界曼荼羅や園城寺の黄不動が有名である。また、書道では、空海・嵯峨天皇・橘逸勢が出て三筆と呼ばれた。また、空海は綜芸種智院という私学校を開設した。

(3) 摂関政治

藤原冬嗣が嵯峨天皇の信任によって初代蔵人頭に任じられたことが、藤原北家興隆の一因となった。平安時代中期には藤原氏による他氏排斥が行われた。842年、冬嗣の子藤原良房が伴健岑、橘逸勢らを謀反の疑いで失脚させた。これを承和の変という。良房は858年に孫の清和天皇の実質的な摂政になった。また、良房は866年に源信と大納言の伴善男との対立を利用し、放火事件を契機に伴善男を失脚させた。これを応天門の変という。また、887年の阿衡の紛議の際には橘広相が失脚した。その間、884年に藤原基経が光孝天皇の実質上の関白になった。また、901年には左大臣藤原時平の讒言により、右大臣菅原道真が大宰府に左遷された。これを昌泰の変という。そして、969年の安和の変で、左大臣源高明が陰謀により大宰府に左遷され、藤原北家の他氏排斥は終わることになる。

ところが、その藤原氏の台頭の頃に、一時期摂関政治が中断した時がある。ひとつは醍醐天皇の時代で、これを延喜の治という。また、村上天皇も摂関・関白を設置しなかったが、この政治を天暦の治という。

(4) 国風文化

遣唐使廃止以降の10～11世紀末の日本的な貴族文化を国風文化という。また、藤原氏の摂関政治が花開いた時であるので藤原文化ともいう。この頃は仮名文字が普及し、和歌・国文学が発達した。和歌では905年に勅撰の『古今和歌集』が撰上された。また、日記文学では、紀貫之の『土佐日記』が有名である。

かな物語では紫式部の『源氏物語』が生まれ、随筆としては清少納言の『枕草子』が出た。主な国風美術としては、建築では平等院鳳凰堂^{びやうどう ほうおう ほうかい}、法界寺阿弥陀堂^{あみだ}、彫刻では定朝作^{じやうちやう}の平等院鳳凰堂阿弥陀如来像^{よせぎづくり}がある。この彫像の手法は寄木造である。絵画では「高野山聖衆来迎図^{しょうじゅうらいごう}」がある。

また、末法^{まつぽう}思想が普及した影響で浄土教も発達し、空也^{くうや いちのひじり}（市聖）が念仏を庶民に広めた。源信^{げんしん えしんそうず}（恵心僧都）は『往生要集^{おうじやう}』を著わして浄土教を確立した。

(5) 荘園公領制

10世紀半ば、国司^{こくし}が開発領主の勢力範囲に応じて国内の行政区画を再編成し、開発領主を郡司^{ぐんし}、郷司^{ごうし}、保司^{ほし}に任じて管理と徴税を委任した。これを国衙領^{こくが}という。しかし、その後国司から圧迫をうけた開発領主が郷・保などの所領を中央の貴族や寺社に寄進した。これを寄進地系荘園^{かんしんじけい}という。また、官省符荘^{くわんしやうふしやう}・国免荘^{こくめんしやう}などの不輸^{ふゆ}の権を持つ荘園や国衙^{けんでんし}の検田使の立ち入りを拒否できる特権である不入^{ふにゅう}の権といった特権を持つ荘園が増加した。寄進地系荘園においては、開発領主は自らは荘官となり現地の治安維持や年貢などの徴収にあたり、その荘官から寄進を受けた貴族・寺社を領家^{りやうけ}といった。更にまた、領家から寄進を受けた上級の貴族のことを本家^{ほんけ}（本所^{ほんじよ}）といった。

(6) 院政期の社会

1086年、白河上皇^{しらかわ}が院政を開始したが、12世紀前半、鳥羽院政期^{とば}に有力貴族や大寺院への荘園の寄進が激増した。また、不輸^{ふゆ}・不入^{ふにゅう}の権をもつ荘園も一般化した。延暦寺や興福寺などの大寺院は、数多くの荘園から徴発した農民たちと下級の僧侶を僧兵として組織し、朝廷に対して強訴^{きやうそ}を行い、自らの主張を通そうとした。その横暴は激しかったため、白河上皇は院の警護のために北面^{ほくめん}の武士を置いた。この頃には国衙領の私領化が行われ、上皇や貴族、大寺社などに、国司の人選をまかせ、国衙領からの収益を得させる知行国の制度が広まり、荘園公領制が崩れていった。

こうした中で中央政界に進出したのが平氏^{へいし}である。まず、平正盛^{たいらのまさもり}、平忠盛^{ただもり}父子が西国の海賊を討ち、南都^{なんと}（興福寺）・北嶺^{ほくれい}（延暦寺）の僧兵を防ぎ、また院の北面の武士として台頭した。また、1156年、崇徳上皇^{すんとく}と後白河天皇が対立した時に、天皇に味方した平清盛^{きよもり}が源義朝^{みなもとのよしとも}とともに上皇側を破った。これを保元^{ほうげん}の乱という。更に、1159年、平清盛は源義朝を破って、平氏が実権を握り、平氏政権が成立した。

(7) 院政期の文化

院政期には、中央の文化が地方に^{でんば}伝播し、浄土芸術など庶民文化が発生した。歴史物語としては、『栄華物語』、『大鏡』^{おおかがみ}などが書かれた。また、絵画では絵巻物が隆盛し、『源氏物語絵巻』^{こうざん}や高山寺の「鳥獸戯画」^{ちようじゅうぎが}などが有名である。更にまた、藤原^{きよひら}清衡の平泉^{ひらいづみ}中尊寺金色堂などの阿弥陀堂が地方に建立された。

(8) 源平の争乱

平清盛は1179年に後白河法皇を幽閉した。しかしこれはかえって反対勢力の結集を促し、以仁王^{もちひとおう}の平氏追討の^{りようじ}令旨が諸国の源氏に伝えられると、源平合戦が始まった。1180年、源頼政が宇治に挙兵・敗死したが、伊豆に源頼朝、木曾に源義仲^{よしなか}が挙兵した。また、頼朝は鎌倉に本拠をおき、^{さむらいどころ}侍所を設置した。1181年に平清盛が病死すると、形勢は源氏有利に転じ、平氏は^{あんたく}安徳天皇を奉じて都落ちし、義仲が入京した。その年に頼朝が朝廷より東国の行政権をゆだねられた。更に、1184年には一の谷^{いち たに}の合戦で平氏は源氏に敗れたが、頼朝は^{くもんじょ}公文所（のちに^{まんどころ}政所）と^{もんちゅうじょ}問注所を設置した。そして、1185年には^{やしま}屋島の戦いを経て^{だん うら}壇の浦の戦いで平氏は滅亡した。そして、この年、諸国に^{しゅこ}守護が、公領・莊園に^{じとう}地頭が設置された。その後、源氏は奥州の藤原氏を倒し、全国を統一し、1192年、頼朝は^{せいいたい}征夷大將軍に就任し鎌倉幕府を開いた。

【2】中世

〔1〕鎌倉時代

（1）鎌倉幕府の成立

平氏滅亡後、源頼朝は東国での基盤を固め、奥州藤原氏を滅ぼした後 1192 年、征夷大將軍に任命され、ここに鎌倉幕府が成立した。政治面では鎌倉に中央機関として御家人を統制するため侍所を置き、さらに一般の政府機関として公文所を置いた。これは後に政所と改称された。また裁判に関する職務を設け問注所と称した。経済面では頼朝が朝廷から与えられた知行国である関東御分国や、旧平氏の莊園を中心とする関東御領などが幕府の所領であり、これらが鎌倉幕府の経済的な基盤となっていた。

（2）鎌倉幕府と御家人

鎌倉幕府を支えていたのは、土地をなかだちに鎌倉殿（將軍）と主従関係を結んだ御家人であった。御家人は、武士の中の一部で全国には御家人以外の武士も多数いた。頼朝は不仲であった弟の義経の逮捕を名目に、1185 年に守護・地頭を任命する権利を得た。守護は各国に一名ずつで、幕府開設に功績のあった有力御家人の中から任命され、その最も重要な任務は大犯三箇条と呼ばれる、謀叛人・殺害人の逮捕と大番役催促であった。地頭も御家人の中から任命され、各地の莊園・国衙領を単位として各々配置され、租税の徴収・治安の維持を任務とした。地頭は守護とは違い国内に何人も存在した。

（3）執権政治と承久の乱

頼朝の死後、頼家・実朝と將軍が続いたが、有力御家人の勢力争いが相次ぐ過程で、頼朝の妻・政子の父である北条時政が執権として政治の実権を握った。執権の地位は以後代々北条氏に引き継がれ、執権政治が行われるようになった。執権政治は 5 代執権時頼（泰時の孫）の時代に強化され、北条氏独裁の性格を帯びていった。3 代將軍実朝が 2 代將軍頼家の子・公暁に暗殺されたのをきっかけに、従来からの朝廷による政治の復活を目指す後鳥羽上皇は、1221 年北条義時追討の兵を挙げた。これを承久の乱という。これに対し義時の子・泰時らが鎌倉から大軍を率いて上京し上皇側を破った。この乱後、後鳥羽上皇は隠岐に配流され京都には六波羅探題が置かれ、朝廷・西国の監視にあたった。上皇側の貴族・武士の領地は取り上げられ、勲功のあった御家人が新たに地頭に

任命された（新補地頭）。結果、従来設置されていなかった所にも地頭が置かれ幕府の勢力は西国にも大きく伸びた。

義時の後を継いだ執権北条泰時は、北条氏独裁の批判をかわし御家人の要望に応えるために合議制による政治を進め、1224年、執権の補佐として連署を北条氏の中から選び、翌1225年、有力御家人など11人を選び評定衆として幕府の最高政務や裁判にあたらせた。5代執権時頼は、評定衆のもとに引付衆を任命し下調べをさせ公正で迅速な裁判に努めた。

（4）御成敗式目

地頭の権限拡大にともない訴訟も増えてきた。北条泰時は公正な裁判の基準として、訴訟に不慣れな御家人にも理解できるように1232年、御成敗式目を定め51カ条を制定した。条文は平易で分かりやすく、武家社会の慣行（先例・道理）をもとにつくられていた。武士による初めての法律の制定は大きな意味をもち、後世に与えた影響も大きかった。

（5）武士の生活

鎌倉時代の武士は農村に館を構え、直営地を下人や農民を使って農業を営んでいた。武士の館は武家造りと呼ばれる簡素なもので周囲を堀や土塁で囲み、中では馬が飼われ、武芸の訓練も行われていた。武士は常に武芸を身につける訓練を重ね、その日常生活から生まれた「兵の道」「弓馬の道」と呼ばれる道徳は武士道の起源となった。武士は一族の強い血縁的統制で結ばれ、その中心人物を惣領、他を庶子と呼んだ。惣領は戦いがあれば一族を率いて、「いざ鎌倉」と出陣した。地位や財産の主要部分は惣領が相続し、残りは分割相続が行われ女子の相続権も認められていた。

（6）武士の土地支配

有力な武士は、地頭として荘園や公領で、職務に応じて直営地で一定の収入を得る権利をもっていた。しだいに支配権を拡大しようとする武士と荘園領主との間には所領をめぐる紛争が増えていった。争いは幕府の法廷で裁かれたが、現地に根をおろす地頭の力は強く、領主たちは地頭に荘園の管理を全て任せ年貢の納入だけを請け負わせる地頭請を結んだり、現地を地頭と折半して土地や住民をそれぞれ分割して支配する下地中分の取り決めを行ったりした。こうして、荘園などの支配権はしだいに地頭の手に移っていき、その力は強くなっていった。

(7) 元の襲来（元寇）

蒙古（モンゴル）を統一し大帝国を築いたチンギス＝ハンの孫、フビライ＝ハン^{だいと}は都を大都に移し1271年、国号を中国風に^{げん}元と改めた。フビライは朝鮮^{こうらい}の高麗を服属させ、日本に朝貢を求めてきたが当時の8代執権北条時宗^{ときむね}はこれを拒否した。1274年、元・高麗軍約3万の軍勢が襲来し対馬・壱岐^{い き}を占領、博多湾に上陸した。集団戦法と火薬「てつほう」の使用に幕府軍は苦戦したが、おりからの暴風雨で元軍は多くの艦船を失い退却した（文永の役^{ぶんえいのえき}）。役後、幕府は博多湾沿岸に石塁^{せきるい}（石築地^{いしつじ}）を構築し、九州に所領をもつ御家人に異国警固番役^{こばんやく}を課し元軍の再度の襲来に備えた。1281年、元は南宋を滅ぼした後、今度は二手に分かれ約14万の大軍で再び北九州に攻め寄せた。幕府軍は2ヶ月にわたり奮戦し上陸を阻止すると、元軍は、またしても「神風^{かみかぜ}」と人々が呼んだ暴風雨に襲われ壊滅的打撃を受け、退却した（弘安の役^{こうあんのえき}）。

この文永・弘安年間の蒙古襲来を元寇という。元寇後、再襲来に備えて幕府は長門探題^{ながとんだい}に加えて九州に鎮西探題^{ちんせい}を設置し、警備体制を強化した。幕府の支配力が西日本一帯に及ぶ一方、重い軍事負担に苦しんだ御家人は恩賞の土地をもらえず、幕府への信頼度は低下し不満が高まった。さらに貨幣経済の浸透と生活^{しやし}の奢侈化、分割相続による所領の細分化が相まって御家人の経済は窮乏し ていった。

(8) 幕府の衰退と滅亡

元軍との戦いで幕府の財政は苦しくなる中、北条得宗^{とくそう}（嫡流^{ちやくりゅう}の当主）家の勢力の強大化は進み、得宗の私的な家来である御内人^{みうちびと}と北条氏以外の御家人である外様御家人^{とぎさま}との対立が深まっていった。1285年、霜月騒動^{しもつきそうどう}が起こり、内管領^{うちかんれい}（得宗の家政を司る御内人の長^{みうちびと おき}）の平頼綱^{よりつな}が、対立する鎌倉御家人の有力者、安達泰盛^{あだちやすもり}一族を滅ぼした。以後8年間平頼綱による恐怖政治が続く。1293年、9代執権北条貞時^{さだとき}は頼綱を討ち、得宗専制体制を確立した。

貞時は、御家人の土地喪失を救済するため1297年、永仁の徳政令^{えいにん とくせいれい}を発令した。効果は一時的でしかなく、かえって御家人の反発を招く結果となったため翌年撤回した。御家人社会の動揺のさなか専制政治を強化する北条氏得宗への御家人の不満はさらにつのっていき、幕府は苦境に陥ることになった。しだいに鎌倉幕府の支配は危機を深めていった。

この頃朝廷では、後嵯峨^{ごさか}上皇の死後以来、後深草^{ごふかくさ}上皇の系統の持明院統と、

亀山天皇の系統の大覚寺統が、皇位・荘園の相続をめぐり争っていた。これを幕府が調停し、両統迭立の方式が定められた。このような中、大覚寺統から即位した後醍醐天皇は討幕計画を進めたが、1324年の正中の変と1331年の元弘の変との二度にわたり失敗し、隠岐に流され、持明院統の光厳天皇が即位した。元弘の変後、後醍醐天皇の皇子護良親王や河内の楠木正成らが挙兵し、反北条勢力も続々と天皇に味方した。1333年、足利高氏（後の尊氏）が六波羅探題を攻め落とした。新田義貞は鎌倉を攻めて、14代執権北条高時以下の北条一族を滅ぼし、鎌倉幕府は滅亡した。

(9) 鎌倉時代の文化

鎌倉時代は、公家が文化のにない手となって伝統文化を受け継ぎながらも、貴族が政治的に後退し、武士が政治・社会的に台頭するにつれて、独自の教養や学問が求められるようになった。そして武士が美術や宗教とかかわる機会が増えるにつれて、その素朴で質実な好みが反映された新しい文化が生み出され、それがしだいに成長していった。鎌倉文化には、大陸から伝わった禅宗などの宋・元文化の影響が深く関係している。鎌倉中期になると鎌倉武士も内外の文化や学問への関心が高まり、執権義時の孫・北条実時は現在の横浜市に金沢文庫を創設し学問に励んだ。教育機関として仏書が多いこの私設図書館は、子孫により受け継がれ充実されていった。

(10) 新仏教

平安時代以来、興福寺や延暦寺など旧仏教の大寺院では、貴族階級のための祈祷や一般の人には難解な教義を中心に行っていた。これに対し、武士や農民を地盤に、個人の救済に重点を置く新しい仏教が生まれ民衆の間に広まっていった。

新仏教の先駆けとなった法然は、「南無阿弥陀仏」とだけ念仏を唱えれば誰でも極楽往生をとげられる簡単な修行方法（専修念仏）や他力本願の教えを説いて浄土宗を開いた。その弟子の親鸞は師の教えをさらに深め、信心が深ければ念仏は一回で充分だと説き浄土真宗（一向宗）を開いた。悪人正機説は親鸞の教えであり、彼の思想は弟子の唯円が書いた『歎異抄』によく表されている。同じ浄土宗から分かれたものに、一遍の時宗がある。一遍はすべての人は念仏で救われると説き、全国を渡り歩いて救われた喜びを踊念仏で表現した。

宋から伝えられた禅宗は座禅を主な修行の方法とし、自力で悟りを開こうと

する自力本願の宗派である。臨済宗を開いた栄西は中国大陆に渡り、禅宗を日本にもたらした。彼は座禅による公案の解決を説き、公家や幕府からの保護を受け、京都と鎌倉を中心に上流武士の間に信仰を得た。幕府は臨済宗を重んじ、栄西の死後、宋から蘭溪道隆や無学祖元ら高僧を招き、建長寺、円覚寺を建立した。同じく禅宗を学んで帰国し曹洞宗を伝えた道元は、名利を嫌って貴族にも幕府にも近づかず、越前の永平寺にこもって厳しい修行を行い、門下の養成に努めた。道元は座禅そのものを重視し（只管打坐）、座禅に徹したその気風は地方武士に受け入れられ、道元の死後、曹洞宗は地方の下級武士などの間に広まった。

日蓮宗（法華宗）を開いた日蓮は、法華経こそが仏の最高の教えと確信し、南無妙法蓮華経と題目を唱えれば成仏できると説いた。彼は蒙古襲来の際鎌倉で他の宗派を激しく攻撃しながら布教し、幕府の政治も批判したため、たびたび迫害を受けたが屈せず多くの信者を得た。

新仏教では、念仏・座禅・題目などの簡単な方法の一つ実行するだけで救われると説き、武士や一般庶民にも信仰が広がっていった。各開祖の主な著書は、『選択本願念仏集』（法然）、『教行信証』（親鸞）、『立正安国論』（日蓮）、『興禅護国論』（栄西）、『正法眼蔵』（道元）である。

新仏教が盛んになると、旧仏教は、戒律・修行を尊重し、念仏排撃で新仏教に対抗した。戒律を重んじ教団の墮落を改革しようと、高弁は京都高山寺に移って華嚴宗を再興し、法然を批判した。貞慶は、莊園領主である豊かな興福寺を出て笠置寺に移り、法相宗を復興して念仏門徒の破戒を攻撃した。律宗の戒律の尊重を唱えた叡尊は西大寺を復興し慈善・救済や土木事業など社会への寄与に努めた。その弟子の忍性は病人の救済施設として奈良に北山十八間戸を建設するなど社会事業に力を尽くした。叡尊は鎌倉幕府に迎え入れられ、忍性は極楽寺を開いた。神道も仏教の隆盛に刺激され伊勢外宮の神官、度会家行が伊勢神道を確立した。

(11) 鎌倉時代の文学・美術工芸

文学の世界でも新しい動きが始まった。もと北面の武士の西行は、出家して歌集『山家集』を残し、八代集最後の歌集である『新古今和歌集』は後鳥羽上皇の命で藤原定家らが撰修した。和歌集には、万葉調の歌が特徴である源実朝の『金槐和歌集』がある。随筆では鴨長明の『方丈記』、吉田兼好の『徒然草』

が名作として名高い。

この時代の文学で、最も特色があったのは軍記物語で、保元の乱が題材の『保元物語』、平治の乱の『平治物語』があるが、最高傑作は治承・寿永の乱を描いた『平家物語』であり、琵琶法師によって平曲として語られ全国に広まった。歴史書では、『水鏡』や、鎌倉幕府が日記体で記録した史書『吾妻鏡』がある。承久の乱の前に書かれた、慈円（天台座主）の『愚管抄』の中に道理による歴史解釈と末法思想を観てとることができる。

朝廷や公家の儀式作法を研究する有職故実の学も盛んになり、順徳天皇が『禁秘抄』を著した。説話集では、『今昔物語』の続編である『宇治拾遺物語』や儒教的な説話集『十訓抄』、そして無住の書いた仏教説話集『沙石集』がある。

美術工芸においては、大陸的な雄大さや豪放な力強さが特色の大仏（天竺）様、整然として簡素な禪宗（唐）様などの建築様式が流行した。東大寺南大門、円覚寺舍利殿が各々の代表的遺構である。これら宋の建築様式を従来の和様に一部取り入れた折衷様もまた盛んとなった。彫刻でも力強い写実的な作風が好まれ、運慶・快慶・湛慶ら慶派が活躍し、『東大寺南大門金剛力士像』は運慶・快慶の合作として有名である。運慶の子の、康弁作『天灯鬼・竜灯鬼像』・康勝作『空也上人像』も高く評価されている。

絵画においても実際の人物をリアルに描写する似絵に藤原隆信・信実父子の名手が出た。禅僧を描く頂相の風習も始まった。前代から続く絵巻物は全盛期を迎え、合戦物の絵巻物に『蒙古襲来絵詞』がある。書道では尊円法親王により青蓮院流が創始され書道の主流となった。

甲冑や刀剣類の分野でも名工があらわれた。甲冑では明珍、刀では京都の粟田口吉光、鎌倉の岡崎正宗が名刀鍛冶の双壁といわれ、備前の長船長光は備前物の名声を高めた。

各地の陶器の生産が発展をとげるなか、尾張の瀬戸焼の発達がめざましく、以来瀬戸は我が国第一の製陶地となった。

【2】室町時代

（1）建武の新政

1333年の鎌倉幕府の滅亡後、京都へ還幸した後醍醐天皇は光厳天皇を廃し、1334年、建武の新政と呼ばれる天皇親政を再現した。建武の新政は醍醐・村上天皇による10世紀の延喜・天暦の治を理想とし、公家を重視し、武家を軽

視する政策を行ったために、次第に政府内部では、公家と武家が対立し、政務が滞り、混乱した状態になっていった。

1335 年、こうした混乱に乗じて北条高時の子時行は鎌倉幕府再興をもくろみ、^{なかせんだい}中先代の乱を起こしたが、鎌倉に下った^{あしかがなかうじ}足利尊氏により滅ぼされた。その後、武家の不満に後押しされた尊氏は、^{にったよしきだ}新田義貞討伐を名目に新政府に反旗をひるがえした。尊氏はいったんは九州に敗走したが、態勢をたてなおし、1336 年、^{みなとがわ}湊川の戦いで楠木正成を破り入京し、持明院統の^{こうみょう}光明天皇を擁立した。一方、後醍醐天皇は吉野に逃れ、ここに建武の新政は崩壊し、以後、約 60 年間、南北朝の時代が続くことになる。

(2) 南北朝の動乱

1338 年、足利尊氏は正式に征夷大將軍になり、幕府を開き、中央での勢力を伸ばしていった。南朝では新田義貞と^{きたばたけあきいよ}北畠顕家が相次いで戦死し、1339 年、後醍醐天皇が死去した後の南朝では^{ちかふさ}北畠親房が中心となり、地方を拠点に抗戦を続けた。1350 年、尊氏とその執事の^{こうのもろなお}高師直と、尊氏の弟で政務を分担していた^{ただよし}足利直義が対立する^{かんのう}観応の^{じゅうらん}擾乱がおこり、幕府は分裂した。この乱は直義派が師直一族を殺し、さらに、1352 年、尊氏が直義を毒殺することで終結した。乱後も、幕府、直義の残党、南朝の三つの勢力が争いを続け、南北朝の動乱は長期化した。尊氏の孫、3 代將軍^{よしみつ}足利義満の時代になると、ようやく幕府が安定し、1392 年、南朝の^{ごかめやま}後龜山天皇が北朝の^{ごこまつ}後小松天皇に神器を譲り南北朝が合一した。

(3) 南北朝期の文化

14 世紀中期の南北朝の動乱期は、激しい戦乱と転換期の時代を背景に、歴史書や軍記物語が生み出された。歴史書には、源平争乱以後の歴史を公家の立場から書いた^{ますかがみ}『増鏡』や、南朝の正統性を主張した^{じんのおうしやうとうき}北畠親房の『神皇正統記』がある。軍記物語には、南朝の立場から描かれた『太平記』や、北朝の立場から鎌倉時代から足利政権成立までの過程を比較的史実に忠実に描いた^{ばいしやうろん}『梅松論』がある。その他にも、二条良基によって連歌集としてまとめられた^{つぐくば}『菟玖波集』などの連歌や、何種類かの茶を飲み比べてその産地を当てることでかけ物を争う^{くわ}闘茶が流行した。

(4) 室町幕府の確立

1336年に政治方針として建武式目^{けんむしきもく}を制定し、1338年に室町幕府を開いたのは初代将軍足利尊氏^{あしかが たかうじ}だったが、その基盤を確立したのは3代将軍足利義満^{あしかが よし満}である。義満は南北朝合一を成功させ、明德^{めいとく}の乱で山名氏^{やまな}を討伐したように、有力守護大名を抑えて全国支配を確立した。さらに義満は京都の室町^{むろまち}に「花の御所」と呼ばれる壮麗な邸宅をつくり、ここで政治を行ったので、この幕府は室町幕府と呼ばれた。室町幕府の支配機構は、ほぼ鎌倉幕府の組織を踏襲していた。ただ、将軍の補佐役には執権^{しやくけん}の代わりに管領^{かんれい}が置かれ、関東地方を治めるために鎌倉府が置かれた。室町幕府は幕府の経済・軍事基盤が弱く、足利氏と有力守護大名の連合政権的性格が強かった。幕府の財政の中で大きな割合を占めていたのが日明貿易^{にちみん}である。

(5) 日明貿易

14世紀後半に中国で建国された明は、伝統的な中国を中心とする国際秩序の回復をめざし、明との通交を近隣の諸国に呼びかけていた。日本にも、中国沿岸や朝鮮半島で活動している倭寇^{わこう}の取り締まりと、通交を求めてきた。3代将軍足利義満^{あしかが よし満}はこれに応じ、明との国交を開き、日本が臣下の礼をとるという朝貢形式の日明貿易^{にちみん}を始めた。この貿易は、幕府の使者と倭寇を区別するために勘合符^{かんごうふ}を用いたので、別名、勘合貿易ともいう。朝貢形式の貿易では、滞在費・運搬費などすべて明側が負担したので、日本側の利益は莫大で、幕府の財政を大いに助けた。義満の死後、この朝貢形式を屈辱的として一時中断した時期もあった。

(6) 北山文化

室町時代前半の文化は、14世紀後半から15世紀初頭の文化で、室町時代の全盛期を築いた3代将軍足利義満^{あしかが よし満}が、京都北山に建立した伝統的な寝殿造^{しんでんづくり}と禅宗様を折衷した金閣寺^{きんかくじ}（鹿苑寺^{ろくおんじ}）の建築様式に象徴される北山文化である。北山文化では文化の融合が進み、禅宗を通しての中国文化の影響が強く見られ、庶民文化が台頭した。禅宗では特に臨済宗^{りんぜいしゅう}が足利将軍家の帰依^{きえ}を受けて繁栄し、幕府は臨済宗を統制するために京都と鎌倉に五山^{ござん}の制を確立し、さらにその下に十刹^{じっさつ}の制をおいた。この五山の禅僧達の中には、中国からの渡来僧や留学僧が多く、彼らは水墨画や建築様式などを広く伝えた。また彼らの間では、五山文学という宋学の研究や漢詩文の創作などの文学活動が行われ、それらが五山

版として出版された。平安時代から民間の娯楽として親しまれた猿楽・田楽は、義満の保護を受けた観阿弥・世阿弥の父子によって能楽として大成した。特に、世阿弥が能の真髓を述べた『風姿花伝』（花伝書）は有名である。また猿楽の笑いを主眼とする部分が独立して、能の幕間に演じられる寸劇である狂言となった。

(7) 惣の形成と土一揆

鎌倉時代の後期から室町時代にかけて、農業が発達して農民が台頭してくると、領主の不当な要求への対抗と自衛のために、名主や地侍という有力な農民を中心に、自治的組織の村落である惣（惣村）が各地に形成された。さらに農民が力をつけてくると、幾つかの惣が目的を同じくして団結し、徳政令の発布や年貢の減税などを求め、土一揆（徳政一揆）という武力行使に及んだ。こうした一揆は各地で発生し、特に馬借が中心となって京都周辺の酒屋・土倉を襲撃し、徳政令を実施させた1428年の正長の徳政一揆や、6代将軍足利義教が暗殺された空白時に発生し、京都が封鎖された1441年の嘉吉の徳政一揆が有名である。

(8) 応仁の乱とその前後の混乱

6代将軍に就任した足利義教は将軍の権威強化に努め、将軍に服従しないものを力で抑えようとした。1438年の永享の乱で長らく敵対していた鎌倉公方の足利持氏を滅ぼし、専制政治を強行した。そんな義教に危機感を抱いた播磨の守護赤松満祐は、1441年の嘉吉の乱で義教を暗殺したが、幕府軍に討たれた。この結果、将軍の権威は失墜し、幕府の実権は有力な守護大名へと移った。8代将軍足利義政の時、義政の弟義視と、義政の妻日野富子が推す、子義尚との間の将軍後嗣問題と、斯波・畠山の両管領家の間の家督相続をめぐり、当時、幕府の実権を争っていた細川勝元と山名持豊（宗全）が対立し、1467年、応仁の乱が始まった。

応仁の乱は京都を主戦場に、全国の守護大名が東軍（細川方）と西軍（山名方）に分かれて11年間戦い、全国に波及した。そして、細川・山名氏が相次いで病没し、義尚が9代将軍に就任し、諸将が領国へ引き上げることで終結した。この結果、幕府の権威はますます失墜し、守護代・国人が勢力を伸ばし、身分の下の者が実力で上の者をしのぐ下剋上の風潮が広まった。1485年、南山城地方では戦火に巻き込まれるのを避けるため、国人達を中心に、両派に別れて

争っていた畠山氏の軍を国外に退去させ、以後8年間、守護大名の政治的介入を拒否し、国人と農民だけの自治を行なった山城の国一揆のような国人一揆も、下剋上の例として有名である。また本願寺の蓮如^{れんによ}の布教によって、近畿・東海・北陸に広まった浄土真宗本願寺派^{ほんがん}の勢力を背景に起こった一向一揆^{いっこういつぎ}も、下剋上の代表的な例である。特に、1488年、加賀^{かが}の門徒が国人と手を結んで守護富樫政親^{がしまさちか}を倒し、約1世紀の自治を行なった加賀の一向一揆が有名である。

(9) 東山文化

室町時代の後半の文化は、15世紀中期から16世紀中期の文化で、8代将軍足利義政が、京都東山に建立した銀閣寺^{ぎんかくじ}（慈照寺^{じしやうじ}）の東求堂同仁斎^{とうくどうどうじんさい}の書院造に象徴される東山文化である。東山文化では禅宗の強い影響のもと、幽玄^{ゆうげん}・わびを基調とし、民衆文化を中心に、宗教・学問・美術・工芸などが発展した。

この文化の代表的造園様式は、禅宗の世界観のもと、水を用いずに石と砂利で風景を表現した枯山水^{かれさんすい}で、その代表的なものに竜安寺^{りやうあんじ}・大徳寺大仙院^{だいとくじだいせんいん}などの庭園がある。禅宗の影響を受けた日本の代表的伝統文化である茶道^{ちやうだう}・花道^{かだう}も、この時期に基礎がつくられた。茶道では村田珠光^{むらたじゆこう}が侘茶^{わびちや}を創出し、花道では池坊専慶^{いけのぼうせんけい}が立花様式^{たちばな}を定めた。

民衆の間では、庶民の生活や意識を反映した御伽草子^{おとぎそうし}が流行した。また南北朝ごろから流行し始めた連歌は、『新撰菟玖波集^{しんせんつくぼしゅう}』を撰集した宗祇^{そうぎ}が正風連歌^{しょうふうれんが}を確立することで、芸術の域まで高められた。さらに『犬筑波集^{いぬつくぼしゅう}』を編集した山崎宗鑑^{そうかん}は、より自由で庶民的な俳諧連歌^{はいかい}を確立した。民衆歌謡の小歌^{こた}も流行し、歌集『閑吟集^{かんぎんしゅう}』がつくられた。祭礼時に着飾った人々が踊る風流^{ふうりゅう}と、空也^{くうだ}・一遍^{ひえん}の時に始まった念仏踊り^{ねんぶつおど}が結びついた盆踊り^{ぼんおど}も定着した。

京都で財力を貯えた商工業者の間では、日親^{にっしん}が広めた攻撃的な日蓮宗^{にちれん}が受け入れられ、彼らは自衛のために法華一揆^{ほっけ}を結んだ。農民の間では、本願寺の蓮如^{れんによ}が平易な文章で説いた浄土真宗（一向宗）の教えが広まり、一向一揆と結びついた。

古典を神道の立場から研究する風潮を背景に、京都吉田神社の神主吉田兼俱^{かねぐし}は、神道を中心に儒教・仏教の統合を説いた唯一神道^{ゆいいつしんどう}を完成させた。また政治的な実権を失った公家の間では、有職故実の学問や古典の研究が盛んになり、中でも、一条兼良^{かねよし}の『公事根源^{くじこんげん}』は有名である。和歌の研究では、東常縁^{とうのつねより}が『古今和歌集』の解釈を特定の人にしか伝えない古今伝授を始めた。

絵画では、水墨画で雪舟が日本的な水墨画を完成させ、大和絵では応仁の乱後に土佐光信が土佐派を、狩野正信・元信父子が狩野派を、それぞれ興した。工芸では後藤祐乗が金属工芸に優れた作品を残した。また、鎌倉時代に始まった蒔絵の技術もこの時期に完成した。

[3] 戦国時代

応仁の乱以後、幕府の力は弱まり、その支配は京都とその周辺に限定された。各地では下剋上の風潮の中、守護大名が没落し、代わって守護代、有力国人が戦国大名として台頭し、戦国時代に突入した。

主な戦国大名には越後の上杉氏、中国地方を統一した毛利氏、相模の北条氏、甲斐の武田氏等がいる。戦国大名は自分の領国(分国)を自力で支配するために、独自の法(分国法)をつくり、寄親・寄子制と質高制で軍事制度を整え、検地によって農民を直接支配した。また戦乱の世の中を勝ち抜くために、富国強兵を実施し、治水事業による農業生産力の増大、鉱山開発、関所の撤廃等を行った。さらに交通の要所に城を築き、城下に家臣団や商工業者を定住させる城下町をつくった。城下町は分国の政治・経済の中心となった。

戦国時代を大きく変えたものに、ヨーロッパ人が伝えた鉄砲とキリスト教がある。鉄砲は、1543年、種子島に漂着したポルトガル人により領主種子島時義禰に伝えられ、たちまち普及し、築城法や戦術に変化を及ぼした。キリスト教は、1549年、イエズス会の宣教師フランシスコ＝ザビエルにより伝えられ、南蛮貿易の利益を期待した戦国大名に受け入れられた。戦国大名の中には、1582年に、天正遣欧使節を派遣した大友義鎮(宗麟)・有馬晴信・大村純忠のように本当に信者になったキリシタン大名もいた。

【3】近世

〔1〕安土・桃山時代

（1）信長の統一事業

有力戦国大名の中からは、次第に全国を統一しようとする者が現れ、その中から一歩抜け出したのが織田^{のぶな}信長^{なが}だった。信長は1560年の桶狭間^{おけはざま}の戦いで駿河^{するが}の今川義元^{よしもと}を破って東海の覇者となり、三河の徳川家康と同盟を結んで背後を固め、1568年、將軍足利義昭^{よしあき}を奉じて入京し、全国統一に着手した。

信長は、1570年の浅井・朝倉連合軍との姉川^{あねがわ}の戦いや、1571年の比叡山の延暦寺の焼き打ち等で、反対勢力を打ち破った。1573年には信長と対立した將軍義昭を追放して室町幕府を滅ぼした。1575年の長篠^{ながしの}の戦いでは、鉄砲隊を活用して武田勝頼^{かつより}に大勝した。翌年には天下統一の拠点とするために安土城^{あづち}を築城した。1580年には、一向一揆の本拠地石山本願寺を屈服させることで1570年から続いていた石山戦争を終結させた。1582年には天目山^{てんもくざん}の戦いで武田氏を滅ぼした。同年、毛利氏を討ちに中国征伐の加勢に向かう途中で京都の本能寺^{ほんのうじ}に泊まったが、ここで家臣明智光秀^{あけちみつひで}に討たれた（本能寺の変）。

信長は政策面でも様々な改革を行った。土地政策としては、入京以来、指出検地を実施した。経済面でも、安土等の城下町での楽市・楽座^{らくいち・らくざ}の実施、関所の廃止、撰銭令^{えりぜに}の発布を行い、主要鉱山・堺等の重要都市を直轄にした。宗教面では、統一に抵抗する仏教勢力を武力で弾圧する反面、貿易の利にも注目してキリスト教を保護し、安土のセミナリオ、京都の南蛮寺建設を許可した。

（2）秀吉の天下統一

信長の統一事業を引き継いだのは、信長の家臣で尾張^{おわり}の農民出身の豊臣秀吉^{とよとみひでよし}だった。秀吉は本能寺の変を知ると直ちに毛利氏と和睦して中国征伐を終結し、軍を返して山崎の戦いで光秀を破った。1583年に信長の重臣柴田勝家^{かついえ}を賤ヶ岳^{しずがたけ}の戦いで破り、信長の後継者の地位を確立し、天下統一の拠点として大坂城築城に着手した。翌年の小牧・長久手の戦い^{こまき・ながくて}で織田信雄^{のぶお}と徳川家康を、1585年には四国の長宗我部元親^{ちようそかべもとちか}を、1587年には九州の島津義久^{よしひさ}を、それぞれ従わせ、1590年の小田原攻めで北条氏を滅ぼし、伊達政宗^{だてまさむね}らの奥州の諸大名を服属させ、天下統一を成し遂げた。

天下統一を進めている間、秀吉は1585年に関白に、翌年には太政大臣に任

ぜられ、豊臣の姓を賜り、全国の戦国大名に対して忽無事令（私戦禁止令）を発し、即時停戦を命令。自らの権威づけに努めた。政治面で秀吉は腹心の家臣を五奉行に任じて一般政務にあたらせ、有力大名から五大老を選んで重要政務を合議させる政治制度をつくったが、これが実際に機能し始めたのは秀吉の晩年だった。

経済面では、200万石の蔵入地・重要都市・鉱山等の直轄地からの収入を財源にあてた。また天正大判・小判の鑄造と一里塚の設置で、貨幣・交通制度を整え、楽市・楽座の設置や、関所の廃止等の信長の政策を徹底化することで経済発展の基盤をつくった。農民に対しては、租税の基礎を定めるために検地を実施した（太閤検地）。検地では面積の単位を統一し、枧の容量も京枧に統一し、耕地を調べて石盛をして石高制を確立し、検地帳に実際の耕作者を登録して一地一作人の原則を確立した。1588年、一揆防止のために刀狩を実施した結果、兵農分離が進んだ。1591年には身分統制令を出して、身分制度の基礎を固めた。

（3）秀吉の对外政策

秀吉は海外貿易の利に着目し、倭寇を禁止し、長崎・京都・堺などの商人に朱印状を与え、貿易を保護・奨励した。キリスト教に対しては最初は布教を認めていたが、キリシタン大名が長崎をイエズス会に寄進したり、キリシタンが神社や仏閣を破壊しているのを知って、1587年バテレン追放令を発し、宣教師の国外退去を命じた。外交面では強硬外交をとり、インド・ルソン・台湾などに入貢を強要した。朝鮮に対しては、朝貢と明への先導を要求したが、拒否され、1592年の文禄の役と、1597年の慶長の役の2度にわたり出兵したが、朝鮮水軍・朝鮮義勇軍の活躍や明の援軍で苦戦し、1598年の秀吉の死により撤退した。

（4）桃山文化

信長・秀吉の時代をその居城にちなんで安土・桃山時代といい、その文化を桃山文化という。桃山文化は、新興大名や豪商の経済力を背景に豪華・壮大で、南蛮文化の影響が強い文化である。

建築では安土城・大坂城・伏見城・姫路城等の城郭建築が発達し、その内部には書院造の部屋があった。絵画では障壁画が発達し、金碧濃彩の濃絵の手法が用いられた。狩野永徳の「唐獅子図屏風」や狩野山楽の「松鷹図」（水墨画）等の作品がある。海北友松・長谷川等伯らは水墨画と濃絵の両方を描いた。風俗画では、「洛中洛外図屏風」（狩野永徳）や狩野派の絵師が多く描いた南蛮屏

風がある。

陶芸では朝鮮から陶工が連れ帰られ、薩摩・萩・有田焼等が発達した。茶の湯は千利休により侘茶方式が完成し、数寄屋造による茶室建築も発達した。

[2] 江戸時代

(1) 幕府の成立と幕藩体制の確立

秀吉の死後は五大老の筆頭徳川家康が台頭し、五奉行の石田三成らと対立した。1600年、家康らの東軍が三成らの西軍を関ヶ原の戦いで破った。1603年には家康は征夷大将軍に任ぜられ、江戸に幕府を開き、1605年に子の秀忠に将軍職を譲り、大御所となった。1614～15年、徳川氏に服従しない豊臣秀頼に方広寺鐘銘事件を機に戦をしかけ、大坂の役（冬の陣、夏の陣）で滅ぼした。

江戸幕府の支配体制は、幕府と幕府に臣従する藩によって土地と人民を支配する幕藩体制で、経済的には農業生産力に基礎を置き、3代将軍家光の頃に確立された。その他幕府は天領と旗本領、直轄都市、主要鉱山、主要街道、貨幣鑄造権、貿易の利を握り、経済面でも他の大名を圧倒していた。幕府の統治は主に、老中、若年寄、大目付、目付、各種奉行、京都所司代等の役職から成り、重要事項は評定所で合議により裁決された。

将軍に臣従し、石高1万石以上の領地（藩）を保有するものを大名といい、親藩・譜代・外様に分けられた。幕府は大名の配置に気をつけ、1615年の一国一城令、武家諸法度、1635年の参勤交代、軍役等によって大名を統治した。朝廷に対しては1615年に禁中並公家諸法度を、寺院に対しては1665年に諸宗寺院法度を、それぞれ定めて統制した。

(2) 身分制度

江戸幕府は士農工商の厳しい身分制度を定め、身分と職業は世襲とした。支配階級の武士は苗字・帯刀を許され、天皇家や公家、僧侶・神職も支配身分に属した。幕藩体制の経済基盤は農業だったので、農民への統制は厳しかった。農民には本百姓、水呑百姓、名子・被官・家抱がいた。幕府や藩は農民の暮らす農村の共同体の慣習を利用して村請制をとり、五人組をつくらせる一方で、有力な本百姓の中から名主・組頭・百姓代等の村方三役を選び、自治を認めた。

農民の負担する税には本途物成（本年貢）、雑税（小物成）、高掛物、国役等があり、街道沿いの村には宿駅に人馬を出す助郷役が課せられた。また百姓の経営を安定させ年貢を確保するために、田畑永代売買の禁令（1643）、田畑勝

手作りの禁、^{けいあん}慶安の御触書^{おふれがき}（1649）、^{ぶんち}分地制限令（1673）が定められた。

職人と商人は都市に定住させられたので町人と呼ばれ、^{まちなぬし}町名主・^{まちどしより}町年寄による自治が行われた。都市の住民には町人（地主・^{いえもち}家持）・^{じがり}地借・^{たながり}店借がいた。また、士農工商に入らない^え賤民身分（^{ひにん}穢多・^{へいじん}非人）の人々もいた。

（3）寛永期の文化

寛永期の文化は桃山文化を受け継ぎながら、幕藩体制の安定を背景に、秩序と落ち着きを取り戻した文化である。絵画では、幕府御用絵師となった狩野派の狩野探幽^{たんゆう}や装飾画の^{たたらや}俵屋宗達^{そうたつ}が有名である。工芸では、^{らくやき}楽焼や^{まきえ}蒔絵で有名な^{ほんあ}本阿弥光悦^{こうえつ}や、^{あかえ}赤絵を完成させた有田焼の^{さかいだ}酒井田柿右衛門^{かきえもん}がいる。主な建築物には、^{こんげんづくり}権現造の日光^{とうしやうぐう}東照宮や数寄屋造の^{かつらりまゆう}桂離宮がある。学問では藤原惺窩が朱子学を禅宗から独立させた。

（4）江戸初期の貿易

徳川家康は貿易の利に注目し、積極的な平和外交を進めた。家康は、1600年^{ばんご}豊後に漂着したリーフデ号の航海士でオランダ人のヤン＝ヨーステン（^{やようす}耶揚子）と、水先案内人でイギリス人のウィリアム＝アダムズ（^{あんじん}三浦按針）を貿易顧問にした。その後オランダが1609年に、イギリスが1613年に、それぞれ平戸に商館を開いた。しかしイギリスはオランダとの争いに敗れ1623年撤退した。家康はまたスペインとの貿易拡大を希望し、1610年、田中勝介^{しょうすけ}をノヴィスパン（メキシコ）に派遣した。

仙台藩主^{だて}伊達政宗^{まさむね}も、家臣^{はせくらつねなが}支倉常長をスペイン・ローマに派遣した。だが、いずれも貿易開始には失敗した。ポルトガルは中国のマカオを基地に中国産の生糸取引を独占していたが、1604年の幕府の^{いとわづぶ}糸割符制度の実施で大打撃を受けた。以後、五カ所商人とよばれる糸割符仲間が活躍した。明とは正式の国交はなく、私貿易や^{であい}出会貿易を行った。朝鮮とは秀吉の朝鮮侵略以来途絶えていた国交を回復し、1607年使節が来朝し、以後、将軍の代替わりごとに慶賀のために朝鮮通信使が来朝するようになった。^{りゅうきゅう}琉球は1609年に薩摩の島津氏に征服されたのを機に、日本と明の両方に属するようになった。

日本人の海外渡航も盛んで、秀吉の時に開始された朱印船貿易も本格化した。貿易が盛んになるにつれ日本人で海外に移住する者が増え、東南アジア各地に日本町ができた。そこで活躍した人物では、アユタヤの^{ながまさ}山田長政が有名である。

(5) 鎖国と鎖国以後の対外関係

幕府は初め、海外貿易を奨励し、キリスト教を黙認する姿勢をとっていたが、キリスト教の道徳が幕府の推進する封建道徳と矛盾することと、キリスト教の布教の背後にある領土的野心への警戒心から、1612年に禁教令を発し、翌年これを全国に広めた。幕府はまた、キリスト教の拡大と西南大名の貿易による富の強化を恐れ、1616年に貿易港を平戸と長崎に限った。以後、1624年にはスペイン船の来航を禁止し、1633年には奉書船^{ほうしよせん}以外の海外渡航を禁止した。1635年には、一切の日本人の海外渡航と海外日本人の帰国を禁止した。

1636年にはポルトガル人を長崎の出島に移した。1637～38年には益田^{あまくさ}（天草四郎）時貞^{ときさだ}を中心とする島原の乱が起こったのを機に、幕府の禁教令が強化され、寺請制度^{てらうけ}等が開始された。1639年にはポルトガル船の来航が禁止され、1641年にはオランダ商館が長崎の出島に移され、鎖国が完成した。

鎖国以後はオランダと中国だけが貿易のために来航し、幕府が貿易を独占した。朝鮮や琉球とは貿易だけでなく国交関係も持ち、朝鮮は対馬^{つしま}の宗氏^{そうし}が、琉球は薩摩の島津氏が担当し独占した。

(6) 文治政治^{ぶんち}

幕府は家康から家光の時代までは、権力を安定させるために武断政治^{ぶだん}を進めていたが、1651年の慶安^{けいあん}の変（由井正雪^{ゆいしょうせつ}の乱）を機に、4代将軍家綱以降、文治政治へと転換していった。家綱の時代には末期養子の禁がゆるめられ、殉死^{じゅんし}が禁止された。

5代将軍綱吉^{つなよし}は側用人柳沢吉保^{そばようにんやなぎさわよしやす}を用い、独裁政治を行った。綱吉は学問を奨励していたので儒学を重視し、湯島聖堂^{ゆしませいどう}を建て、林信篤^{のぶあつ}（鳳岡^{ほうこう}）を大学頭^{だいがくのかみ}に任命した。経済面では1695年から貨幣を改鋳したが、物価騰貴から財政破綻を招いた。また生類憐み^{しょうるいはなれ}の令にみられる文治政策の形式化が進んで政治は乱れた。

6代将軍家宣^{いえのぶ}・7代将軍家継^{いえつぐ}の時代の政治は正徳^{しょうとく}の治とよばれ、儒学者新井白石^{はくせき}が側用人間部詮房^{まなべあきふさ}と協力して、前代からの文治政策を継承・発展させた。白石は閑院宮家創設や、朝鮮使節の待遇簡素化を行った。また将軍を日本国大君から日本国王に変更し、将軍の権威を高めようとした。経済面では、物価安定のために正徳金銀を鑄造し、1715年に金銀の国外流出防止のために海船互市^{かいせんごし}新例を発した。

(7) 元禄文化

元禄文化は5代将軍徳川綱吉の元禄期に発達した文化で、学問は主として武士によって、文芸・美術は町人によって発達した。町人文化は上方の豪商の経済力を背景に発達し、現実的傾向が強かった。

武家社会では封建道德の普及のために儒学が奨励され、その中でも朱子学が官学として重視された。朱子学には、林羅山らの京学派、谷時中・山崎闇斎らの南学派がある。朱子学の他に、中江藤樹・熊沢蕃山らの陽明学や、山鹿素行を祖とする古学等の儒学がある。

その他の学問では、国学の契沖の『万葉代匠記』、史学では、林羅山・鷲峰らの『本朝通鑑』、徳川光圀らの『大日本史』、新井白石の『読史余論』等が有名である。自然科学の代表的なものとしては、農学の宮崎安貞の『農業全書』、本草学の貝原益軒の『大和本草』、暦学の渋川春海（安井算哲）の『貞享暦』、数学の関孝和の『発微算法』、地理学の西川如見の『華夷通商考』等がある。

文芸は町人を中心に発展した。室町期の御伽草子が、江戸初期に仮名草子に発展し、元禄期には浮世草子に発展した。その代表的作家が井原西鶴で、その代表作には、好色物（『好色一代男』）・町人物（『日本永代蔵』）・武家物（『武道伝来記』）がある。俳諧も松尾芭蕉が蕉風を完成し、『奥の細道』等の優れた紀行文を残した。

近松門左衛門は人形浄瑠璃や歌舞伎の脚本を書き、その作品（世話物『曾根崎心中』）・時代物『国性（姓）爺合戦』は竹本義太夫の義太夫節で語られた。歌舞伎では、江戸に市川団十郎（荒事）、上方に坂田藤十郎（和事）らの名優が出た。

絵画では、土佐派の土佐光起が朝廷の、土佐派から分かれた住吉派の住吉如慶・具慶父子が幕府の、それぞれ御用絵師として活躍した。民間では、「紅白梅図屏風」や「燕子花図屏風」で有名な尾形光琳が、俵屋宗達画法を取り入れて琳派をおこした。浮世絵では菱川師宣の「見返り美人図」が有名である。陶芸では光琳の弟尾形乾山が色絵楽焼に傑作を残した。染物では宮崎友禅が友禅染を始めた。

(8) 交通の発達

参勤交代による交通の増大、商品流通の発達などにより、陸上交通、水上交通ともに発達した。

陸上交通では、江戸の日本橋を起点にして、東海道、中山道^{なかせん}、甲州街道、日光道中、奥州街道の五街道のほか、伊勢路、美濃路、山陽道などの脇街道も発達した。1里ごとに1里塚、2～3里ごとに宿駅をおき、本陣^{ほんじん}、脇本陣、旅籠屋^{はたご}などを整備した。主要街道には関所を設け「入り鉄砲に^い出女^{でおんな}」を取り締まった。

一方、水上交通としては、河村瑞賢^{ずいけん}が出羽から津軽海峡を経て江戸へと向かう東廻り海運、出羽から日本海・瀬戸内海を経て大坂に向かう西廻り海運を完成させた。また角倉了以^{すみのくらりょうい}が、富士川、保津川^{ほづ}、高瀬川^{たかせ}などの河川を開いた。更に、江戸と大坂の間の南海路には、菱垣廻船^{ひがき}および樽廻船^{たる}などの定期船が就航した。

(9) 商業と金融

江戸時代中期には将軍のお膝元である江戸の人口は100万人、京都の人口は40万人、天下の台所である大坂の人口は35万人になっていた。また、その頃には流通機構も整備された。諸藩が年貢米や特産物を換金する為に大坂・江戸などに設けた施設が蔵屋敷である。蔵物^{もの}の管理・販売にあたる蔵元^{もと}や、蔵物の出納・代金保管にあたる掛屋^{かけ}に商人を用いた。また、江戸で旗本・御家人相手に禄米^{ろくまい}の受け取り・販売を行ったのが札差^{ふださし}であった。

以上は幕府・諸藩のための流通機構といえることができる。一般の商品流通としては、専門の卸売市場が現れ、大坂には堂島^{どうじま}の米市場、江戸には日本橋の魚市、神田の青物市などが設けられた。

(10) 享保の改革

8代将軍吉宗^{よしむね}の時に、家康時代への復帰をかねて士風刷新・財政再建を目標に享保^{きょうほう}の改革が行われた。財政再建としては、当座をしのぐために上げ米^{あまい}の制を定め、大名に1万石につき100石の割合で米を上納させ、その代わりに参勤交代を緩和し、江戸在府を半減した。また、足高^{あしたか}の制で人材登用に伴う経費を節減しようとした。また、経済安定策として定免法^{じょうめんぽう}を導入し、新田を開発するなどして収入増を図った。また、大坂堂島^{どうじま}の米市場を公認し米価を調整した。また、商業統制を狙って株仲間^{かぶ仲間}を公認し、運上金や冥加金を納めさせた。政治では、目安箱^{めやすばこ}と公事方御定書^{くじかたおさだめがき}が重要である。

(11) 寛政の改革

11代将軍家斉^{いえなり}の時に老中松平定信^{まつだいらさだのぶ}が行った政治を寛政^{かんせい}の改革という。享保^{きょうほう}の改革を手本に農村の復興と幕府の権威の再建を目指した。まず、帰農令を出して農民を帰農させようとした。七分金^{しちぶきん}積み立ての法を出して江戸町費節約分

の7割を積み立て貧民救済にあてようとした。また、石川島に^{にんそく}人足寄場を設立し浮浪人に職業訓練を施した。財政策としては、倭約令や^{きえん}棄捐令で困窮する旗本・御家人を救済しようとした。学問統制としては1790年、寛政異学の禁で、昌平坂学問所での朱子学以外の講義を禁止した。

(12) 文化・文政時代

天保の大飢饉が起きて百姓一揆が頻発した。また、1837年には大坂で^{おおしお}大塩平八郎の乱、続いて^{えちごかしわざき}越後柏崎で^{いくたよろず}生田万の乱が発生した。外国では、1840年～42年にかけて清国と英国との間でアヘン戦争が起こり、清国が敗北した。

(13) 天保の改革

12代将軍家慶の時に老中^{たかくに}水野忠邦が行った政治を天保の改革という。物価を引下げるために株仲間を解散させたが、かえって物価は上昇した。^{ひとがえ}人返しの法を出して、農民の出稼ぎを禁止し、農村人口の確保と農村復興を目指した。また、1843年、^{じょうち}上知令で江戸・大坂周辺の地を幕府の直轄地とし、その地の大名達を転封しようとしたが、大名・旗本らの激しい反対で撤回した。

(14) 諸藩の改革

薩摩藩では、藩主の^{しげひで}島津重豪のもと、^{ずしよひろさと}調所広郷が、琉球との密貿易、黒砂糖の専売制の強化で財政を再建しようとした。また、長州藩では藩主の毛利^{なかつか}敬親のもと、^{せいふう}村田清風が推進した。肥前藩では藩主の鍋島^{なべしな}直正が中心になって改革を断行し、軍政改革の一環として反射炉を設け大砲を铸造した。その結果、西南雄藩の藩権力が強化され、幕政への発言権を強めることになった。また、^{ひぜん}肥前藩の大砲铸造所の構築など、近代工業も生まれたが、幕府も^{にらやま}伊豆韮山に反射炉を建設した。

(15) 封建制への批判

^{おぎゅうそらい}荻生徂徠は武士の帰農・土着論を主張し、幕府に意見した。^{あつたね}山崎闇斎・^{らいさんよう}平田篤胤らの思想は^{そんのう}尊王思想の傾向が強く、1758年の^{ほうれき}宝暦事件、1767年の^{めいわ}明和事件でそれぞれ尊王論を説いた^{たけのうちしきぶ}竹内式部、^{やまがただに}山県大弼が処罰された。また、^{しょうえき}安藤昌益は『^{じねんしんえいどう}自然真営道』で万人が鋤を持つ時代が理想であるとして、身分制を否定した。^{やまがたぼんとう}山片蟠桃は『夢の代』で合理主義を展開し、神仏の存在を否定した。^{としあき}本多利明は『^{せいぎ}西域物語』で積極的な貿易振興策を提唱した。^{のぶひろ}佐藤信淵は『^{ようろく}経済要録』で統一国家形成の必要性や重商主義政策の採用を論じ、社会批判をした。

(16) 化政文化

家斉の時代の文化・文政期が中心の文化である。元禄文化が上方中心であるのに対し、江戸が中心の文化である。

まず、小説では滝沢（曲亭）馬琴の『南総里見八犬伝』に代表される読本、柳亭種彦の『修紫田舎源氏』に代表される合巻、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』、式亭三馬の『浮世風呂』に代表される滑稽本が出てきた。

俳諧では与謝蕪村が出て絵画的な俳句を詠み、また、小林一茶が出て人間味のある句を詠んだ。大田南畝の狂歌、柄井川柳の川柳が出てきた。浄瑠璃では竹田出雲の『仮名手本忠臣蔵』が有名であり、また、歌舞伎の台本作家としては幕末に出た河竹黙阿弥が有名である。

次に美術であるが、田沼時代には鈴木春信が多印刷版画錦絵を創始したが、その後、化政期には浮世絵として繁栄した。役者絵、相撲絵で有名なのが東洲斎写楽であり、また、風景画で有名な浮世絵師としては、東海道五十三次の安藤（歌川）広重、富嶽三十六景の葛飾北斎をあげることができる。

文人画の世界では渡辺崋山の鷹見泉石像が有名である。写生画としては「雪松図屏風」で有名な円山応挙が出た。更に、司馬江漢は銅版画「不忍池図」を描いたが、それは日本で最初の遠近画法を駆使した西洋画であった。

(17) 国学と洋学

国学は創始者が契沖であり、伏見の神官荷田春満、『万葉考』を著した賀茂真淵と続き、伊勢松阪の本居宣長によって大成された。本居宣長には1798年に完成した古事記の注解書である『古事記伝』、源氏物語の研究書である『源氏物語玉小櫛』などの著書がある。また、平田篤胤は儒仏を排斥し、復古神道（尊王思想）を提唱した。塙保己一の『群書類従』は偉大な功績である。

一方、洋学の先駆としては、イタリア人宣教師シドッチを尋問して『西洋紀聞』を著わした新井白石を挙げることができる。田沼時代には、前野良沢、杉田玄白が『解体新書』を刊行したが、杉田玄白の『蘭学事始』にはその翻訳の苦勞が描かれている。寛政期には大槻玄沢がオランダ語の文法書である『蘭学階梯』を書き、稲村三伯が蘭日辞書である『ハルマ和解』を編集した。文政期にはシーボルトが来日し、長崎に鳴滝塾をひらいた。幕末には緒方洪庵が大坂に適塾（適々斎塾）をひらいた。私塾としては、伊藤仁斎・東涯親子の京都堀川の古義堂、荻生徂徠の護国塾も有名である。

【4】近代

〔1〕明治・大正時代

（1）列強のアジア進出と開国

18世紀後半イギリスで始まった産業革命は、次第に欧米列強に広まり、その結果、列強は国外の市場と植民地の獲得を求めて、アジアやアフリカへ進出していった。

列強が日本に最初に接近したのは、1792年のロシアのラクスマンの^{ねむろ}根室への来航だった。これに対して幕府は通商は拒否したが、長崎入港許可書は与えた。その後幕府はこのような事態に備えて1798年に近藤^{じゅうぞう}重蔵らに^{えとらふ}択捉島を探検させ、翌年東蝦夷地を直轄とし、1800年には伊能^{いのうただたか}忠敬に蝦夷地を測量させ、1802年に蝦夷奉行を設置し、松前氏（旧姓^{かきぎき}蠣崎氏）を任命した。1804年にはロシアのレザノフが長崎に来航したが、幕府は要求を拒否し、1807年には蝦夷地をすべて直轄地にした。

1808年、今度はイギリスのフェートン号が長崎に侵入した。1808～09年には、幕府は間宮^{まみやりんぞう}林蔵に^{からふと}樺太・^{えんかいしゅう}沿海州を探検させた。1811年にはロシアのゴローニンが事件を起こした。1825年に、幕府は異国船（無^む二^に念^{ねん}）^{うちほらいれい}打払令を発した。1828年にはシーボルト事件、1837年にはアメリカ船モリソン号の事件、1839年には^{ばんしや}蚕社の獄が起きた。1840～42年、中国とイギリスの間でアヘン戦争が起きている時、幕府は天保の^{しんすい}薪水給与令を実施した。1844年、オランダが開国を勧告したが、幕府は祖法を理由にこれを拒否した。

1846年、アメリカのビッドルが^{うらが}浦賀に来航し開国を要求したが、幕府はこれも拒否した。1853年、アメリカ大統領の国書を持ったペリーが4隻の軍艦を率いて浦賀に来航したので、幕府は1年後の回答を約束し、翌年ペリーが再来すると、日米和親条約を締結した。1858年、初代アメリカ駐日総領事ハリスが通商条約の締結を要求すると、大老^{なのおすけ}井伊直弼は勅許を得ずに日米修好通商条約を締結し、オランダ・ロシア・イギリス・フランスとも同様の条約を結んだ（^{あんせい}安政の五カ国条約）。

（2）幕末の動乱

日米修好通商条約の交渉が進んでいた頃、幕府では13代将軍徳川^{いえきだ}家定の後継をめぐり、松平^{まつだいらよしなが}慶永らを中心とする一橋家^{ひとつばし}の当主徳川^{よしのぶ}慶喜を推す親藩大名や

外様大名の一橋派と、井伊直弼らを中心とする紀伊藩主徳川慶福^{よしとみ}を推す譜代大名の南紀派^{なんき}が対立したが、結局、慶福が後継に決定した（14代家茂^{いえもち}）。

一橋派は、開国反対派と結んで幕府を激しく批判したので、直弼は1858～59年に安政の大獄^{たいごく}で反対派を大弾圧した。反対派への弾圧は強い反発を招き、1860年、直弼は桜田門外の変^{さくらだもんがいのへん}で暗殺された。直弼のあとをうけた老中安藤信正^{のぶまさ}は公武合体を進め、孝明天皇の妹和宮^{わのみや}を家茂に降嫁させたが、1862年、坂下門外の変で失脚した。同年、その後の文久の改革^{ぶんきゅうのかうか}や、生麦事件^{なまむぎ}をへて、徳川慶喜が将軍後見職に就任した。1863年、幕府は朝廷や尊王攘夷派^{じやうい}の主張を受け、攘夷の決行を諸藩に命じた。これを受け、長州藩^{ちやうしやう}は下関で外国船を砲撃し、薩摩藩は前年の生麦事件に端を発した薩英戦争^{さくえいせんそう}を行った。同年、薩摩藩・会津藩^{あいづ}らの公武合体派が、三条実美^{さねとみ}らの公家や長州藩らの急進的な攘夷派を京都から追放した（八月十八日の政変）。

1864年、長州藩は勢力を回復するために、京都に攻めのぼったが、薩摩藩・会津藩らに敗北した（禁門（蛤御門）^{きんもん（はまぐりごもん）}の変）。禁門の変を機に、幕府軍は第1次長州征伐を実施し、長州を降伏させた。同じ頃長州では、欧米列強の四国連合艦隊が下関を攻撃した。これで攘夷が不可能なことを悟った高杉晋作^{たかすぎんさく}は、奇兵隊^{きへいたい}を率いて挙兵し、翌1865年に藩の実権を握り、藩を幕府恭順派^{きやうじゆん}から討幕派へと転換させた。さらに、1865年、列強は兵庫まで艦隊を派遣して条約の勅許を得て、翌1866年には、改税約書を幕府に押しつけ調印させた。1866年には、また、土佐藩出身の坂本竜馬^{さかもとりやうま}・中岡慎太郎^{なかおかしんたろう}の仲介で薩長同盟が成立し、討幕の態勢が整った。

こうした状況の中、第2次長州征伐が実施されたが、幕府軍は各地で敗北し、やがて将軍家茂の急死を理由に撤退した。そして、同年末、徳川慶喜が15代将軍に就任し、フランス公使ロッシュの建策によって幕政の建て直しに努めた。朝廷では幕府に好意的だった孝明天皇が急死し、朝廷内部でも討幕派が優勢になった。1867年、もはや討幕が避けられないことを悟った慶喜は、前土佐藩主山内豊信^{やまうちとよしげ}（容堂^{ようどう}）の進言^{しんげん}をうけて、朝廷に大政奉還^{たいせいほうかん}の上表を提出した。

（3）明治新政府の成立

1867年、15代将軍徳川慶喜の大政奉還とその後の王政復古の号令により明治新政府が成立した。新政府は1868年1月の五箇条^{ごかじょう}の御誓文^{ごせいもん}で基本方針を宣言し、3月の五榜^{ごぼう}の掲示で旧幕府の民衆統制を継承し、閏4月の政体書^{せいたいしよ}で政

府の組織を整え、7月に江戸を東京と改め、9月に元号を明治と改元して一世一元の制を定めた。新政府は1869年3月に東京への遷都を実行し、5月には前年1月から続いていた戊辰戦争を終結させて国内をほぼ統一した。これを受け同年6月には、各藩の藩主に領地（版）と領民（籍）を天皇に返還させるという版籍奉還を実施したが、旧藩主がそのまま知藩事として任命されたため、中央集権化は不徹底だった。

1871年7月、政府は中央集権化を徹底するため藩を廃止して府・県に統一し、知藩事を罷免して府知事・県令を任命し、廃藩置県を断行した。この後、正院・左院・右院の3院制のもとに各省をおく中央政府の制度が完成し、この制度の要職を薩長土肥出身者が占めるという藩閥政府が始まった。また社会改革も進み、1869～71年にかけて士農工商の封建的身分制度を撤廃し、職業選択の自由を認める四民平等を実施し、翌年統一戸籍である壬申戸籍がつくられた。

政府の基本政策である富国強兵の実現のために、まず1870年に工部省を設置し、近代産業育成政策である殖産興業を推進した。次に教育の普及のために、1872年、近代的学校制度を定めた学制を公布した。そして1873年に満20歳以上の男子を徴兵する徴兵令を公布し、軍制を整えた。

政府の財源の安定と近代的な税制を確立するために、1873年、納税方式を従来の米納から地価への租税（地租）による金納に改めるという、地租改正条例を公布した。1876年には、政府の財政上の負担になっていた華・士族への世襲的な禄米である秩禄を全廃する秩禄処分を実施し、政府の財政基盤を確立した。

政府の改革は宗教界にも及び、1868年の神仏分離令は廃仏毀釈の嵐を吹き起こし、キリスト教も1878年に解禁された。

（4）明治新政府の外交

明治新政府の最重要外交課題は、開国時に結ばれた不平等条約の改正と近隣諸国との間の国交と領土問題だった。1871年11月から1年10ヵ月の間、条約改正とその条件づくりのために、岩倉具視を全権大使、木戸孝允・大久保利通・伊藤博文を副使とする岩倉使節団が欧米諸国を視察し、条約改正に挑んで失敗した結果、条約改正には欧米諸国並みの文明と国力で欧米と対等な立場を築く「富国強兵」が不可欠なことを学んだ。1878年、外務卿寺島宗則が関税自主権の回復を目的に交渉するが失敗した。

近隣諸国に対しては、同年清国との間に対等な立場で日清修好条規を結んだが、台湾での琉球漂流民殺害事件を機に、琉球の帰属問題がもちあがり、1874年の日本の台湾出兵で賠償金を確保し、琉球を日本の領土として清国に認めさせた。後に琉球に対しては1879年に武力でもって琉球藩（1872年設置）を廃止し、沖縄県を置く琉球処分を行なった。

ロシアとの間では幕末以来懸案となっていた樺太の帰属問題を、1875年の樺太・千島交換条約で樺太をロシア領、千島列島を日本領と確定することで決着させた。同年日本との国交を拒んでいた朝鮮に対しては、朝鮮の江華島付近で軍艦による挑発行為をし、これに対して朝鮮側が砲撃で応戦した江華島事件を機に、1876年、武力でもって朝鮮にとっての不平等条約、日朝修好条規を結んだ。また1875年に米・英と帰属を争っていた小笠原諸島を日本の領土とした。

(5) 文明開化

富国強兵をめざす政府のもと、率先して西洋の生活様式や近代思想などを取り入れる文明開化の風潮が広まった。生活面では1869年、人力車が営業を開始し、パン食と肉食が普及した。1870年には最初の日刊新聞が発行された。1871年には散髪が許可され、文明開化の象徴である「散切り頭」が普及した。1872年には鉄道が開通し、ガス灯が設置され、1日が24時間、1週間が7日間、日曜が休日という太陽暦が採用された。

思想面でも欧米の近代思想が普及していった。1872年に初版が刊行された福沢諭吉の『学問のすゝめ』は、人間の平等と尊さ、学問の大切さを説いた。同年刊行された中村正直の『自由之理』はイギリスのミルの著書の翻訳で、功利主義と自由の重要性を説いた。1873年に森有礼や福沢諭吉らが設立した啓蒙思想団体の明六社は、1874～75年にかけて機関誌『明六雑誌』で文明開化の推進と啓蒙思想の普及に努めた。中江兆民は1882年にフランスのルソーの『民約論』の翻訳本『民約訳解』を刊行し、フランスの自由主義、人権主義、天賦人権思想を説いた。

(6) 近代国家の成立

秩禄処分や徴兵令などの新政府の改革は、士族の特権喪失や経済的困窮につながった。岩倉使節団の留守を守る新政府の留守組の中には西郷隆盛のように、こうした士族の不平のはけ口を朝鮮派兵に求める征韓論の動きがあったが、そこに帰国した岩倉使節団の面々が内治優先論を唱え、征韓論派を抑えたので、

征韓論派は下野した。下野した者達の中で板垣退助^{いたがきたいすけ}らは藩閥政府批判の運動を始め、1874年に民撰^{みんせん}議院設立建白書^{けんぱくしよ}を政府に提出し、早期の国会設立を要求し、これが後の自由民権運動の先駆けとなった。

一方、保守的な士族は、1874年の佐賀の乱、1876年の神風連^{じんふうれん}の乱、秋月^{あきづき}の乱、萩^{はぎ}の乱、1877年の西南戦争など、日本各地で武力による反乱をおこした。特に最後の西南戦争は、鹿児島^{かごしま}の士族らが西郷隆盛を押し立てた士族最大の反乱だったが、政府軍によって鎮圧され、これ以後武力による反乱はなくなり、言論によって政府を批判する方向へと変わった。自由民権運動が全国的に展開しはじめたのは、1875年の創立まもなく解散した愛国社再興大会が、1878年に大阪で開催されたのがきっかけだった。

1880年、愛国社は国会期成同盟をつくり、署名運動を全国で展開した。同年4月政府は、集会・結社の自由を規制する集会条例を制定して民権運動を圧迫した。政府内部でも意見の対立が生じ、1881年に、国会早期開設論者で自由民権運動支持者の大隈重信^{おおくましげのぶ}と、これに反対する伊藤博文とが対立した。同年に起きた開拓使官有物払い下げ事件で、民権派の政府批判はさらに高まった。政府はこの動きに大隈が関係しているとして、彼を追放した（明治14年の政変）。またこれと同時に国会開設の勅諭^{ちよくゆ}を出し、10年後の1890年に国会を開くことを約束した。これに備えて民権運動側では政党を結成した。

1881年には板垣退助を党首とする自由党が、1882年には大隈重信を党首とする立憲改進黨が、それぞれ結成された。1882年頃から政府の自由民権運動敵視政策や松方デフレによる困窮などにより、運動の支持者である農民の中には手を引く者も出てきた。一部自由党員がこうした政府に対抗する、福島事件、秩父^{ちちぶ}事件等の激化事件を起こしたので、1884年、自由党は解党した。立憲改進黨も大隈らの脱党により活動を停止し、民権運動は衰えていった。

政府側は国会開設前に政治体制の確立をはかるために、1882年、伊藤博文が渡欧して各国の憲法や議会制度を調査した。1885年内閣制度がつくられ、初代内閣総理大臣に伊藤博文が就任した。国会開設が近付くと、1886年、旧自由党の星亨^{ほしとある}らが大同団結を唱え、翌年の井上馨^{かのる}外相の条約改正失敗を機に三大事件建白運動が起こったが、政府は保安条例を出してこれを弾圧した。

1889年、欽定憲法である大日本帝国憲法が發布され、帝国議会は貴族院と衆議院からなる二院制に定められた。1890年、第1回衆議院議員総選挙が行

われ、その結果、旧民権派が議席の過半数を占めた。同年、第1回帝国議会在開催され、アジア初の立憲君主制の近代国家が成立した。

(7) 条約改正交渉

近代国家となった日本の条約改正交渉に最初にあたったのは、外務卿井上馨だった。井上は1882～87年の間、領事裁判権の撤廃と関税自主権の一部回復を主眼に交渉を進めた。井上はまた、鹿鳴館^{ろくめいかん}で西洋風の舞踏会を催すことで日本も欧米並みの文化をもつ国であることを誇示するという極端な欧化政策や、外国人裁判官の登用を進めたが、これらのこととノルマントン号事件のせいで政府内外の反発を招き、交渉の中止と辞職に追い込まれた。

1888～89年の大隈重信外相は^{だいしんいん}大審院に限り外国人判事を任用することで国別に交渉したが、その内容が漏れ、交渉の中止と、黒田清隆^{きよたか}内閣ともども、辞職に追い込まれた。1891年の青木周蔵^{しゅうぞう}外相は領事裁判権撤廃にイギリスの同意を得たが、大津事件で辞職した。

日清戦争直前の1894年、^{むつおねみつ}陸奥宗光外相はロシアの南下政策に対抗したいイギリスと利害が一致し、領事裁判権撤廃に成功した（日英通商航海条約）。その後1905年の日露戦争に日本が勝利すると、その他の国々も領事裁判権撤廃に同意した。残された関税自主権の完全回復も日本の日露戦争勝利による地位の向上もあって、1911年、小村寿太郎^{じゅたろう}外相のもとで成功し、ようやく完全な平等条約が実現した。

(8) 日清戦争とその前後の情勢

朝鮮半島が欧米列強の支配下に入ると日本の独立が危うくなる、という論理で日本は朝鮮半島を支配下に置こうとした。朝鮮国内では明治維新にならって近代化を実現しようという親日派と、旧来の宗主国清国との関係を重視する親清派が対立していた。1882年、親清派の大院君^{たいいんくん}が親日派の閔妃^{びん}一族へのクーデター（^{じんご}壬午軍乱）を起こすが、清軍に鎮圧され、日朝間で済物浦条約^{さいもつぽ}が結ばれた。閔妃一族は親清派に転じ、日本の影響力は低下した。1884年、今度は、親日派の独立党が親清派の事大党^{じだいとう}に日本の援助でクーデター（^{こうしん}甲申事変）を起こすが、清軍に鎮圧され、日清間で漢城条約が結ばれた。翌年、日清関係の調整のため^{てんしん}天津条約が結ばれるが、その後も朝鮮をめぐる日清の対立は続いた。

1894年、朝鮮の民族宗教東学^{とうがく}を信仰する農民が外国の経済進出と政府の圧政に対して反乱（東学党の乱（^{こうしん}甲午農民戦争））を起こし、朝鮮政府の要請で

清が出兵すると、日本も対抗して出兵し、これをきっかけに日清戦争が始まった。軍の近代化を達成した日本は各地で清を破り、勝利をおさめた。1895年、下関条約が結ばれ、朝鮮の独立、遼東半島・台湾・澎湖諸島の譲渡、賠償金2億両、沙市・重慶・蘇州・杭州の開港、等が決められた。

だが同年、日本の勢力拡大を警戒したロシアが、フランス・ドイツとともに遼東半島の返還を日本に要求し（三国干渉）、三国に対抗する力のない日本はこれを受け入れた。これにより「臥薪嘗胆」を合言葉にした国民の反ロシア感情は高まり、政府は対ロシアに備えて軍備の拡張に努め、そのため台湾の統治に力を尽した。

この戦争で弱体を暴露した清は、1898年、ドイツが山東半島の膠州湾を、ロシアが遼東半島の旅順・大連を、イギリスが九龍半島・威海衛を、翌年にはフランスが広州湾を、それぞれ租借し、列強によって分割されていた（中国分割）。アメリカも1899年、中国の領土保全・門戸開放・機会均等の3原則を提唱した。

日清戦争後の日本の国内政治においては政党の力が増大し、1898年、大隈重信らが憲政당을結成し、大隈を首相とする日本初の政党内閣が誕生したが、内紛から憲政당은分裂し、4ヵ月で瓦解した。1900年、伊藤博文は憲政黨の一方を母体として立憲政友会をつくり、第4次内閣を組閣したが、貴族院の反対で退陣した。その後1901年から日露戦争後まで、貴族院勢力に後押しされた第1次桂太郎内閣が続いた。

(9) 日露戦争とその前後の情勢

列強の侵略に対し清国では、1900年、「扶清滅洋」を唱える義和団を中心とする外国人排斥運動が起こり、清国政府もこれに押され、列強に宣戦布告した（北清事変）が、列強と日本の連合軍により鎮圧され、翌年には各国との間に北京議定書を結んだ。この後日本は北清事変後も満州への駐留を続けるロシアに対抗するために、同じくロシアを警戒するイギリスと1902年に日英同盟を結んだが、ロシアは満州から撤退しようとはしなかった。

日本国内では対ロシア開戦論と政府系新聞や財界らの慎重論が対立したが、政府は開戦論に押され、1904年に日露戦争が始まった。日本は1905年1月に旅順、3月に奉天を占領し、5月の日本海海戦の勝利でこの戦争に勝利した。同年9月、アメリカの仲介によりポーツマス条約が結ばれた。その結果日本に

は、韓国の指導権、東清鉄道の権益と旅順・大連の租借権の譲渡、樺太の南半分の譲渡、沿海州・カムチャツカ沿岸の漁業権の譲渡が認められた。だがこの直後に、この条約に対する国民の不満が爆発し、東京では日比谷公園での講和反対大会が暴動に発展する事件（日比谷焼き打ち事件）が起きた。

日露戦争後、日本はポーツマス条約で獲得した韓国と満州の権益を足掛かりに、大陸進出を本格化させた。1904～07年の第1次～第3次の日韓協約をへて、1910年には韓国を併合、京城に朝鮮総督府を置いた。1906年には満州の旅順に関東都督府を置き、関東州の管轄や南満州鉄道の保護にあたった。政治の世界では、日露戦争前から1913年の第一次護憲運動に端を発した大正政変で、桂太郎（第3次迄）内閣が退陣するまで、桂内閣と立憲政友会総裁の西園寺公望（第2次迄）内閣が交互に政権を担当する、という桂園時代が続いた。

(10) 日本の経済発展と社会問題の発生

日本の近代産業は、明治新政府主導の殖産興業のもとで始まった。政府は1880年代には軍事工場以外の官営工場を払い下げ、1882年には日本銀行を設立して唯一の紙幣発行銀行とし、1897年には金本位制を導入し、経済発展の基盤をつくった。

日本の産業革命は、日清戦争前後の紡績・製糸などの軽工業中心の第一次、日露戦争前後の鉄鋼業などの重工業中心の第二次、の2段階でなされた。前者は手紡、ガラ紡、機械紡績へと発展し、製糸業では座繰製糸から器機製糸へと発展し、生産が向上したが、国民の購買力が追い付かず輸出にまわされ、主要な輸出産業になった。後者は前者に比べて発展が遅れていたが、下関条約の賠償金が投入され、1901年には官営の八幡製鉄所が開業し、それにもない発展した。

また、日露戦争後には、三井、三菱、住友などの政商が、多くの部門の会社をグループ化し、財閥として日本経済を支配した。このような急速な資本主義の発展は、工場労働者の低賃金や長時間労働により支えられていたため、労働問題が発生し、1897年の労働組合期成会の結成を機に、労働組合が次々とつくられた。政府は1900年に治安警察法を制定する一方、1911年には工場法を制定した。1901年には社会民主党が結成されたが直後に禁止され、1910年の大逆事件でその主要メンバーは逮捕され、翌年処刑された。

(11) 近代の文化

近代の文化は欧米文化の急激な摂取と、極端な欧化政策への反発から台頭した国家主義により形成された文化である。

教育面においては、1879年の教育令はその前の学制と同様に欧米流で自由主義的であったが、翌年の改正教育令や、1890年の教育勅語から国家主義的になっていった。私学では慶応義塾^{ぎょうぎじく}、同志社、東京専門学校が、独自の学風を誇った。

自然科学では政府の奨励策と外国人教師の指導のもと、世界的な業績があげられた。医学では北里柴三郎^{きたざとしざさぶろう}の破傷風菌^{はしょうふう}の純粹培養、ジフテリア血清療法^{けつせいいりやう}の創始とペスト菌の発見、志賀潔^{しがきよし}の赤痢菌^{せきり}の発見、野口英世^{ひでよ}の黄熱病^{おうねつ}の研究、薬学では高峰讓吉^{たかみねじょうきち}のアドレナリンの抽出、天文学では木村栄^{ひさし}のZ項の発見、地震学では大森房吉^{おほきさきち}の地震計の改良、物理学では長岡半太郎^{はんたろう}の原子構造理論、田中館愛橘^{だてあいきつ}の地磁気測定、等が有名である。

近代文学は、坪内逍遙^{つぽうちやうよう}の『小説神髓^{しんずい}』の中の写実主義の提唱で始まった。これに影響され、二葉亭四迷^{ふたばていしゆい}が言文一致体で『浮雲^{うきぐも}』を書いた。日清戦争前後には北村透谷^{とうこく}が『文学界』でロマン主義を提唱し、その主な作品に島崎藤村^{とうそん}の『若菜集^{わかな}』や与謝野晶子^{よせのあきこ}の『みだれ髪』等がある。日露戦争前後には自然主義が主流となり、国木田独步^{くにきだつぽ}の『武蔵野^{むさしの}』、田山花袋^{かない}の『蒲団^{ふとん}』等が有名である。その他、森鷗外^{おうがい}や夏目漱石^{もうせき}は独自の文学を築いた。

美術ではまず、フェノロサや岡倉天心^{てんしん}らが東京美術学校や日本美術院を設立して日本美術を再興した。洋画は、浅井忠^{ちゅう}の明治美術会と黒田清輝^{せいき}の白馬会^{はくば}を中心に発展した。彫刻では、高村光雲^{こうむん}や荻原守衛^{もりゑ}が西洋的な技術を取り入れた。

(12) 第1次世界大戦前後の情勢と日本

ヨーロッパは植民地をめぐり、三国同盟(ドイツ・オーストリア・イタリア)と、三国協商(イギリス・フランス・ロシア)に分かれ、対立していた。1914年のサラエボ事件を機に第1次世界大戦が始まり、日本も日英同盟を理由にドイツに宣戦布告した。日本は中国に出兵してドイツの植民地を占領すると、1915年に1911年の辛亥革命^{しんがいはい}で成立した袁世凱^{えんせいがい}の中華民国に二十一カ条の要求をつきつけ、その大部分を認めさせた。

経済面では、戦争で欧米諸国が撤退したアジア市場を独占し、軽工業・造船

業・海運業が発展するという大戦景気にわいていた。その一方で物価も上昇し、1918年8月には米価の急騰に抗議する米騒動が起こった。こうした民衆運動を背景に、政友会総裁の原敬^{たちし}が初の本格的な政党内閣を組織した。

同年11月、第1次世界大戦は三国協商側の勝利で終り、翌年フランスのパリで講和会議が開かれ、ヴェルサイユ条約の締結と国際連盟の設立が決められた（ヴェルサイユ体制）。パリ講和会議での民族自決の原則の提唱を受け1919年朝鮮では三・一独立運動が起きたが鎮圧された。パリ講和会議で中国の二十一カ条の要求の撤回という主張が認められないと、同年5月4日に北京の学生が抗日運動を起こし（五・四運動）、それをきっかけに民族運動が広がった。

大戦後の国際政治の主導権はアメリカが握り、1921～22年のワシントン会議で勢力均衡のための海軍軍縮条約、四カ国条約、九カ国条約が締結された（ワシントン体制）。ワシントン体制は大平洋・東アジア地域における列国間の協調をめざしたもので、政友会の原敬・高橋是清^{これきよ}の両内閣はこれを受け入れ、協調外交の基礎をつくった。

(13) 大正デモクラシー

国内では、第1次世界大戦の連合国側の勝利は民主主義の勝利という見方が広がり、民主主義の風潮（大正デモクラシー）が広まった。こうした風潮を背景に、吉野作造^{きよさくぞう}の民本主義^{みんぽんしぎ}を思想的な柱にしながら、労働運動や社会運動や普通選挙運動が活発化していた。1919年、唯一の労働組織だった友愛会が大日本労働総同盟友愛会と改称し、1920年には第1回のメーデーを行った。同年、日本社会主義同盟も結成されたが、翌年解散させられた。また同年、青鞥社^{せいとう}の平塚らいてう（雷鳥）らが新婦人協会を結成し、婦人参政権運動を進めた。1922年には日本共産党や日本農民組合が結成された。同年、全国水平社が結成され、部落差別撤廃運動も活発に行われた。

政治では1921年の原敬暗殺後はしばらく非政党内閣が続いたが、1924年、憲政会・立憲政友会・革新クラブの護憲三派が連合して第二次護憲運動を起こし、加藤高明^{たかあき}が連立内閣をつくり、以後8年間政党内閣が続いた。1925年加藤内閣は普通選挙法を公布する一方で、治安維持法を制定して共産主義・社会主義等を厳しく弾圧した。

[2] 昭和時代

(1) 戦後恐慌から昭和恐慌へ

第1次世界大戦後、欧米諸国の商品がアジア市場に再登場すると、日本経済は不況に転じ、1920年には戦後恐慌が発生した。1923年の関東大震災でさらに震災恐慌が発生した。1927年には銀行の不良貸付や震災手形の処理の不手際から金融恐慌が起こったが、若槻礼次郎内閣の後の田中義一内閣の支払猶予令により鎮静化された。大戦中の1917年以来、日本も欧米諸国にならい金の輸出を禁止していた。大戦後、欧米諸国が金解禁を実施する中、日本は不況の連続で実施できないでいたが、1930年の浜口雄幸内閣でようやく実施した。だが1929年アメリカで始まった世界恐慌の日本への波及と、金解禁の失敗により日本は昭和恐慌に陥った。

(2) 協調外交と強硬外交

若槻内閣の外相幣原喜重郎は、五・四運動を機に広まる中国の民族運動に対して不干渉政策をとり、英米と協調しワシントン体制を守り、日本の利権を維持・発展させるという協調外交を推進した。次の田中内閣は強硬外交に転じ、3次にわたる山東出兵を行い、武力で中国での利権確保をめざした。結局田中内閣は1928年の張作霖爆殺事件（満州某重大事件）の処理をめぐり昭和天皇の不信をかい、翌年退陣した。代わった民政党の浜口雄幸内閣の時、協調外交が復活した。1930年のロンドン海軍軍縮会議で政府は英米との協調に努め、補助艦の比率を英米より少なく定めたロンドン海軍軍縮条約を批准した。立憲政友会・軍部・枢密院はこれを統帥権の干犯であると非難し、同年暮れ、浜口首相は右翼青年に撃たれ、翌年死亡した。

(3) 市民文化の発展

大正から昭和初期は、教育の普及やラジオ等のメディアの発達で市民文化が発展した。文学では、武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎らの白樺派、芥川龍之介や菊池寛の新思潮派、永井荷風や谷崎潤一郎の耽美派、小林多喜二らのプロレタリア文学等が起こった。大衆小説では、吉川英治、直木三十五、江戸川乱歩らが出た。

美術では、日本画で横山大観らが日本美術院を再興し、政府の帝国美術院展覧会（帝展）に対抗して院展を行った。洋画では、有島生馬や梅原龍三郎らの

二科会、岸田劉生らの春陽会が設立された。演劇では小山内薫らが築地小劇場を設立し、新劇が盛んになった。

(4) 軍部の台頭

1931 年は、前年のロンドン海軍軍縮条約を機に、軍部や右翼の国家改造運動が活発化し始めた年で、まずはじめに三月事件が起こった。同年 9 月浜口内閣の後の第 2 次若槻内閣の時、満州では関東軍の柳条湖での鉄道爆破事件（柳条湖事件）を機に満州事変が起こった。これに対して若槻内閣は不拡大方針をとったが、世論の支持を失い、十月事件が起こったこともあり、総辞職した。

かわって同年 12 月に政友会総裁犬養毅が組閣したが、国家改造運動はおさまらず、1932 年に血盟団事件が起こった。同年 3 月関東軍は清朝最後の皇帝溥儀を元首に満州国を建国したが、犬養首相はこの承認をしおり、五・一五事件で暗殺され、政党政治は終焉した。結局、その後の斎藤実内閣が日満議定書を取りかわして満州国を承認した。

国際連盟は満州事変を調査するために、リットン調査団を現地や関係国に派遣した。1933 年 2 月に国際連盟の臨時総会で、リットン報告書にもとづき満州国不承認と日本軍の撤退勧告がなされると、日本の全権松岡洋右はその場を退場し、日本は 3 月に正式に国際連盟に脱退を通告した。これ以後軍部は、ますます政治に介入するようになった。1935 年には、貴族院で美濃部達吉の憲法学説が反国体的であると攻撃され、美濃部が議員辞職を余儀なくされるという天皇機関説問題が発生し、岡田啓介内閣は国体明徴声明を出した。

1936 年 2 月 26 日、陸軍の皇道派青年将校を中心とする部隊が首相官邸・警視庁等を襲撃し、高橋是清蔵相や斎藤実内大臣を暗殺する二・二六事件を起こした。これにより岡田内閣は倒れ、次の広田弘毅内閣から陸軍の統制派を中心に軍部の影響力が拡大し、軍部の要求で軍部大臣現役武官制が復活した。

経済面では、犬養、斎藤、岡田の 3 内閣の高橋是清蔵相が、金輸出を再禁止し、後に管理通貨制度に移行したことで為替相場が下落し、輸出が拡大した。特に綿織物では英国を抜いて日本が世界一の輸出国となったため、英国は日本の行為をソーシャル＝ダンピングと非難し、ブロック経済圏をつくって対抗した。また戦争による軍需の増加により重工業が発達し、軍事費を中心とする財政が膨張し、輸出の拡大とあわせて景気回復の要因となった。自動車工業や化学工業では、日産、日産などの新興財閥が台頭し、軍部と結んで満州・朝鮮に

進出した。

(5) 日中戦争とその後

1933年の日中軍事（塘沽）停戦協定で、満州占領を国民政府に認めさせた日本軍は、さらなる中国での権益確保のために華北に進出した。こうした中、林銑十郎内閣の後の近衛文麿内閣成立直後の1937年7月7日、北京郊外で盧溝橋事件がおき、日中全面戦争に突入した（支那事変）。

近衛内閣は日中戦争勃発後、戦争遂行のために「挙国一致・尽忠報国・堅忍持久」を掲げて、国民の精神の高揚を図る国民精神総動員運動を展開し、国民総動員中央連盟が結成された。中国側の共産党と国民政府は、盧溝橋事件と前年12月の西安事件（蒋介石幽閉）を機に、1924年の反帝国主義闘争を掲げた第一次国共合作に続き、抗日統一戦線を掲げた第二次国共合作を結成した。戦線は華北から拡大し、同年12月、日本軍は首都南京を占領した。国民政府は重慶に移り、抗戦したので戦争は長期化した。

1938年1月、近衛内閣は「国民政府を相手にしない」という声明を出し、同年4月には国家総動員法を制定し、さらに11月には東亜新秩序声明を出した。また同年12月に、国民党政府の副総裁で親日派の汪兆銘の重慶脱出を助け、1940年に南京新政府を樹立させた。1939年に勃発した第2次世界大戦で日本の同盟国のドイツ軍が優勢になると、国内では既成政党の解散と挙国政党の結成を主張する新体制運動が活発化した。

これを受け、1940年に政友会・民政党・社会大衆党などの各党は解散し、大政翼賛会や大日本産業報国会が形成され、ここに総力戦体制が整えられた。そしてアメリカとの交渉は、いわゆるハル＝ノートが満州事変以前の状態への復帰を要求したので、絶望的となった。日本はハワイの真珠湾を攻撃し、1941年に太平洋戦争が始まった。

戦局は翌年のミッドウエーの海戦の敗北を転機として、アメリカの本格的反攻が始まった。1944年からはアメリカ軍の本土爆撃により日本経済は崩壊し、1945年の広島、長崎への原爆投下、ソ連の参戦により、ポツダム宣言を受諾し、日本は無条件降伏した。

戦後アメリカ軍の占領のもと、民主主義国家の道を歩み始めた。そして主権在民・戦争放棄・基本的人権の尊重の3原則からなる日本国憲法を制定し、世界に貢献し、尊敬される平和国家への道を歩み続けている。

【2】重要事項のまとめ

【1】重要年表のまとめ

- 57 年 ^{わ なのこくおう ご かん にゅうこう かなのわのなのこくおう} 倭の奴国王、後漢に入貢、「漢委奴国王」の金印を授かる
- 239 年 ^{や ま たいこく ひ み こ ぎ けん し} 邪馬台国の卑弥呼、魏に遣使
- 391 年 ^{わ くだら しらぎ} 倭軍、百濟、新羅を破る
- 538 年 仏教伝来
 - ※ 仏教伝来、ご参拝
- 593 年 ^{すい こ しょうとく たい し} 推古天皇、聖徳太子を摂政にする
- 603 年 ^{かん い じゅう に かい しょうとく たい し} 冠位十二階制定（聖徳太子）→人材登用と門閥打破
- 604 年 憲法十七条制定（聖徳太子）→天皇中心の国家体制
- 607 年 ^{お ののいも こ けんずい し} 小野妹子を遣隋使として派遣／法隆寺創建（聖徳太子）
- 630 年 ^{いぬがみの み た すき どう けんとう し} 犬上御田鍬を唐に派遣（遣唐使の初め）
- 645 年 ^{そ が たいかの かいしん なかの おお えの み こ なかとみの かまたり} 蘇我氏滅ぶ／大化改新始まる（中大兄皇子・中臣鎌足）
 - ※ 大化改新、虫殺し
- 663 年 ^{はくそんこう} 白村江の戦い（日本軍、唐・新羅軍に敗れる）
- 672 年 ^{じんしん おおあまの み こ おおともの み こ} 壬申の乱（大海人皇子と大友皇子との皇位継承戦争）
- 701 年 ^{たい ほうりつりょう} 大宝律令なる
- 708 年 ^{わどうかいちん ちゅうぞう こうちやうじゅう に せん} 和同開珎の鑄造（皇朝十二銭の最初）
- 710 年 ^{へいじやうきやうせん と げんめい} 平城京遷都（元明天皇）
 - ※ なんと立派な平城京
- 712 年 ^{こ じ き おおの やす まろ ひえだの あ れ} 古事記（太安万侶・稗田阿礼）
- 713 年 ^{ふ ど き せんじやう みことり} 風土記撰上の詔
- 720 年 ^{に ほん しよ き とねりしんのう} 日本書紀（舍人親王）
 - ※ 何を書けたか日本の歴史
- 723 年 ^{さん ぜ いっしんの ほう} 三世一身法
- 743 年 墾田永世私有法、大仏造立の詔（^{みことり しょうむ}聖武天皇）
- 752 年 ^{かいげん} 東大寺大仏開眼（孝謙天皇、藤原仲麻呂）
- 765 年 ^{どうきやう だいじやうだい じん ぜん し} 道鏡、太政大臣禪師となる
- 794 年 平安京に遷都（^{かんむ}桓武天皇）
- 801 年 ^{さかのうえの た むら まろ え ぞ} 坂上田村麻呂、蝦夷を平定
- 805 年 ^{さいちやう てん だいしゅう} 最澄、帰朝し天台宗を伝える
- 806 年 ^{くわかい しん ざんしゅう} 空海、帰朝し真言宗を伝える

- 810 年 藤原薬子^{ふじわらのくすこ}の変^き（嵯峨^さ天皇^が、平城^{へいぜい}上皇^をを討つ）／初めて蔵人^{くらうどのと}所^{ほつけ}を置く（初代蔵人頭^{ふじわらのふゆつぐ}は北家の藤原冬嗣^{ふじわらのふゆつぐ}）
- 858 年 藤原良房^{ふじわらのよしふさ}、摂政^{せつしょう}となる（人臣^{じんしん}摂政^のの初め）
- 884 年 藤原基経^{ふじわらのもとつね}、関白^{かんぱく}となる（関白^のの初め）
- 894 年 遣唐使^{すがわらのみちざね}の廃止（菅原道真^{すがわらのみちざね}の建白^{けんぱく}）
 ※白紙^{しやくし}に戻そう遣唐使
- 901 年 菅原道真^{すがわらのみちざね}、大宰府権帥^{だざいふくんのすけ}に左遷^{させん}される（藤原時平^{ふじわらのときひら}の中傷^{ちゆうけう}）
- 902 年 初めて荘園整理^{えんぎ}の令^ぎを下す（延喜^{えんぎ}の荘園整理^の令^ぎ）
- 905 年 古今和歌集^{きんこのむね}（紀友則^{きのとものり}・紀貫之^{きのつらゆき}等^らが撰者^{せんしや}／勅撰^{てっせん}和歌集^のの初め）
- 969 年 安和^{あんな}の変^{へん}（源高明^{みなもとの高かきら}左遷^{させん}）（藤原氏^{ふじわらの}の他氏^{たし}排斥^{はいし}の最後^{さいご}）
- 1017 年 藤原道長^{ふじわらのみちなが}、太政大臣^{だいていだいじん}になる
- 1019 年 刀伊^{とい}の賊^{ぞく}〔女真族^{じょしんぞく}〕の来寇^{らいこう}
- 1051 年 前九年^{えんきゅう}の役起^{えきおこ}る（源義家^{みなもとのもよしいえ}らが陸奥^{むつ}の安倍氏^{あべし}を倒す）
- 1069 年 延久^{えんきゅう}の荘園整理^の令^ぎ（後三条天皇^{ごさんじょう}）（藤原頼通^{ふじわらのよりみち}への荘園^のの寄進^{きしん}を事実上^{じじつじやう}禁^{きん}じることになる法令^{ほうれい}）
- 1083 年 後三年^{ごさんねん}の役起^{えきおこ}る（源義家^{みなもとのもよしいえ}と藤原清衡^{ふじわらのきよひら}が陸奥^{むつ}の清原氏^{きよはらし}を倒す）
- 1086 年 白河上皇^{しらかわじやうこう}、院政^{いんせい}を始める（院政時代^{いんせいじだい}の始まり）
- 1098 年 源義家^{みなもとのもよしいえ}、昇殿^{しょうでん}を許される
- 1132 年 平忠盛^{たいらのただもり}、内昇殿^{ないしやうでん}を許される
- 1156 年 保元^{ほうげん}の乱^{らん}（後白河天皇^{ごしらかわてんかう}、崇徳上皇^{すんとく}を破る）（源義朝^{みなもとのもよしとも}・平清盛^{たいらのきよもり}台頭^{たいとう}）
- 1159 年 平治^{へいじ}の乱^{らん}（平清盛^{たいらのきよもり}、源義朝^{みなもとのもよしとも}を破る）→平氏政権^{へいしせいけん}の誕生
- 1167 年 平清盛^{たいらのきよもり}、太政大臣^{だいていだいじん}となる
- 1180 年 以仁王^{もちひとおう}の令旨^{りやうじ}／源頼政^{みなもとのもよまさ}挙兵^{きよまさ}、宇治^{うじ}に敗死^{ばいし}／源頼朝^{みなもとのもよとち}挙兵^{きよとち}、石橋山^{いしばしやま}の戦^{いくさ}い／木曾義仲^{きそよしなか}挙兵^{きよなか}
- 1185 年 屋島^{やしま}の戦^{いくさ}い／壇ノ浦^{だんなうら}の戦^{いくさ}い、安徳天皇^{あんとく}入水^{いりすい}、平氏滅ぶ^{へいしめく}／諸国^{しよこく}に守護^{しゆご}・地頭^{じとう}を置く
- 1189 年 源義経^{みなもとのもよつね}、藤原秀衡^{ふじわらのひでひら}の子泰衡^{やすひら}に攻められて奥州^{おくしゅう}で自害^{じがい}
- 1192 年 源頼朝^{みなもとのもよとち}、鎌倉^{かまくら}に幕府^{ばくふ}を開く（武家政治^{ぶけいせい}の初め）

※いい国^{いいくに}つくろう鎌倉幕府^{かまくらばくふ}

- 1205 年 新古今和歌集^{ふじわらのていか}（藤原定家^{ふじわらのていか}）

- 1221 年 ^{じょうきゅう}承久の乱（^{ご と ぼ}後鳥羽上皇方の^{ほうじょうまさこ}挙兵、^{ほうじょうよしとき}北条政子・北条義時に敗れる）
- 1232 年 ^{ご せいはいしきもく}御成敗式目〔^{じょうえい}貞永式目〕の制定（^{ほうじょうやすとき}北条泰時）
- 1274 年 ^{ぶんえい}文永の役（^{げんこう}蒙古襲来、^{げんこう}元寇）（^{ほうじょうときむね}北条時宗）
- 1281 年 ^{こうあん}弘安の役（^{げんこう}蒙古襲来、^{げんこう}元寇）（^{ほうじょうときむね}北条時宗）
- 1297 年 ^{えいにん}永仁の^{とくせいれい}徳政令
- 1324 年 ^{しょうちゅう}正中の変（^{ご だい ご}後醍醐天皇の^{ご だい ご}倒幕計画）
- 1331 年 ^{げんこう}元弘の変（^{ご だい ご}後醍醐天皇の^{ご だい ご}倒幕計画）
- 1333 年 ^{にっ た よしただ}新田義貞、^{よしただ}鎌倉を攻め^{よしただ}鎌倉幕府滅ぶ

㊦ いざ散々 やっつけられた鎌倉幕府

- 1334 年 ^{けんむ}建武の新政（^{ご だい ご}後醍醐天皇の^{ご だい ご}親政）
- 1336 年 ^{ご だい ご}後醍醐天皇、^{あしかがたかうじ}吉野へ逃れる（^{こうみょう}足利尊氏、^{こうみょう}京都に^{こうみょう}光明天皇擁立／^{こうみょう}南北朝時代の始まり）
- 1391 年 ^{めいとく}明德の乱（^{あしかがよしみつ}足利義満、^{やま な うじきよ}六分の一殿山名氏清を討つ）
- 1392 年 ^{あしかがよしみつ}南北朝の合一（^{あしかがよしみつ}足利義満／^{あしかがよしみつ}室町幕府の確立）

㊦ いざ国統一南北朝

- 1399 年 ^{おうえい}応永の乱（^{あしかがよしみつ}足利義満、^{おおうちよしひろ}大内義弘を討つ）
- 1419 年 ^{おうえい}応永の外寇（^{がいこう}朝鮮、^{おか}対馬を侵す）
- 1428 年 ^{しょうちゅう}正長の^{つちいつ き}土一揆（^{ばしやく}近江の馬借から始まり、^{ばしやく}畿内一帯に広まった^{ばしやく}徳政一揆）
- 1438 年 ^{えいきょう}永享の乱（^{あしかがよしのり}將軍足利義教、^{く ぼうあしかがもちうじ}鎌倉公方足利持氏を自殺させる）
- 1441 年 ^{か ぎつ}嘉吉の乱（^{はり ま}播磨守護赤松満祐、^{あしかがよしのり}將軍足利義教を討つ）
- 1467 年 ^{おうにん}応仁の乱（^{あしかがよしまさ}將軍足利義政の後継者争い）→戦国時代の始まり

㊦ 一夜むなしい応仁の乱

- 1485 年 ^{やましる}山城の^{くにいつ き}国一揆（～1493）（^{こくじん}南山城の国人・土民たちによる一揆）
- 1488 年 ^{か が}加賀の^{れんによ}一向一揆（～1580）（^{れんによ}蓮如により組織化した^{れんによ}一向宗信者による一揆）
- 1543 年 ^{たね が しま}ポルトガル人、種子島に中国船で漂着し、鉄砲を伝える
- 1549 年 ^{たね が しま}ザビエル、鹿児島に来てキリスト教を伝える
- 1573 年 ^{あしかがよしあき}足利幕府滅ぶ（^{あしかがよしあき}足利義昭、^{あしかがよしあき}京都から追放）→名実ともに室町時代の終焉

㊦ 以後涙の室町幕府

- 1575 年 ^{ながしの}長篠の戦い（^{お だ のぶなが}織田信長軍が鉄砲隊を使用し^{たけ だ かつより}武田勝頼敗退）
- 1582 年 ^{たけ だ かつより}天正遣欧使節（ヴァリニャーニ）

- 1582 年 本能寺の変 (明智光秀、織田信長を討つ)、山崎の戦い (光秀、秀吉に敗れる)
- 1583 年 賤ヶ岳の戦い (羽柴秀吉、柴田勝家に勝つ)
- 1585 年 羽柴秀吉、関白となる
- 1590 年 小田原征伐 (北条氏滅亡し、秀吉の全国統一なる)
- 1592 年 文禄の役 (秀吉、諸将をして朝鮮に出兵せしむ)
- 1597 年 慶長の役 (秀吉、再び朝鮮に出兵)
- 1600 年 関ヶ原の戦い (徳川家康大勝) / オランダ船リーフデ号 (ヤン・ヨーステン、ウィリアム・アダムズ)、豊後に漂着

※ 一路丸々 天下を治めん関ヶ原

- 1603 年 徳川家康、征夷大將軍となり、江戸幕府を開く
- 1613 年 慶長遣欧使節 (支倉常長)
- 1614 年 大坂冬の陣
- 1615 年 大坂夏の陣 (豊臣氏滅ぶ)
- 1633 年 奉書船以外の海外渡航を禁ず (渡航には朱印状の他、老中奉書が必要)
- 1635 年 参勤交代制の確立 / 日本船海外渡航禁止
- 1637 年 島原の乱 (~ 1638) (天草四郎時貞)
- 1639 年 ポルトガル人の来航禁止
- 1641 年 オランダ人を平戸から長崎の出島に移す (鎖国の完成)
- 1643 年 田畑の永代売買を禁ず
- 1649 年 慶安の御触書
- 1673 年 分地制限令
- 1687 年 生類憐みの令発布

※ 憐れみの色はなに色?

- 1709 年 正徳の治 (徳川家宣・徳川家継の侍講新井白石の文治政治 ~ 16)
- 1716 年 享保の改革 (徳川吉宗)
- 1722 年 上げ米の制を設ける / 新田開発を奨励する
- 1723 年 足高の制を設ける
- 1742 年 公事方御定書を定める
- 1758 年 宝暦事件 (竹内式部を重追放に処す)
- 1767 年 田沼意次、側用人となる / 明和事件 (山県大弼、獄門)
- 1787 年 松平定信 (田安家出身、白河藩松平家の養子)、老中首座となり寛政の改革を開始、倭約令を発す (時の將軍は 11 代徳川家斉)
- 1790 年 朱子学をすすめ、異学を禁ず / 石川島人足寄場を設置

- 1792 年 ^{はやし し へい} 林子平、^{かいこくへいだん}『海国兵談』の^{ひつ か}筆禍／ロシア使節ラックスマン、根室に来て通商を請う
- 1804 年 ロシア使節レザノフ、長崎に来航
- 1808 年 フェートン号事件（英の軍艦フェートン号がオランダ船を追って長崎港に乱入）
- 1825 年 ^{い こくせん うち はらい かい} 異国船打払令〔無^む二^に念^{ねん}打払令〕を下す
- 1837 年 ^{おしあへいはちろう} 大塩平八郎の乱／アメリカ船モリソン号、漂流民を伴い浦賀入港、浦賀、薩摩の山川で打払令によって撃退される
- 1839 年 ^{ばんしゃ} 蛮社の獄（^{わたなべ ざん} 渡辺華山は^{ちつきよ} 蟄居、^{たかの ちょうえい} 高野長英は投獄される）
- 1841 年 ^{みずの ただくに} 水野忠邦の^{てんぽう} 天保の改革が始まる。人返しの法、^{あげちれい} 上知令発布。
- 1853 年 米使ペリー、浦賀来航
- 1854 年 ^{にちべい わしん} 日米和親条約〔^{しな} 神奈川条約〕（鎖国の終了／老中首座阿部正弘）
 ♪ 一夜越し、交渉成功和親条約
- 1858 年 ^{い い なおすけ あんせい} 大老井伊直弼が安政の五ヶ国（米・蘭・露・英・仏）条約を締結
- 1859 年 ^{あんせい} 安政の大獄（^{はしもと さない} 橋本左内、^{よし だしょういん} 吉田松陰など刑死）
- 1860 年 ^{さくらだ ちんが い} 桜田門外の変（大老井伊直弼、暗殺される）
- 1862 年 ^{かずのみや いえもち} 和宮、徳川家茂と結婚（^{かずのみや こう か} 和宮降嫁）
 坂下門外の変（和宮降嫁に憤激した尊王攘夷の志士が^{あふじ} 安藤信正を襲撃）
 ^{なまむぎ} 生麦事件（イギリス人斬殺される）
- 1863 年 8 月 18 日の政変（長州藩主体の^{じょう い} 攘夷論者失脚）／薩英戦争
- 1864 年 ^{はまぐりごもん きんもん} 蛤御門〔禁門〕の変（長州藩士、薩摩藩と会津藩に敗れる）／長州征伐
 ／^{し こくかんたい} 四国艦隊（米・英・仏・蘭）下関砲撃
- 1866 年 薩長連合の盟約成る
- 1867 年 ^{とくがわよしのぶ にじょうじょう} 徳川慶喜、二条城にて^{たいせいほうかん} 大政奉還／王政復古の^{ぼしん} 大号令（戊辰戦争の引き金）
 ♪ いやむなく終わった江戸幕府
- 1868 年 鳥羽・伏見の戦いで戊辰戦争勃発（明治新政府軍と旧幕府軍との戦い）
- 1869 年 ^{ごりょうかく} 五稜郭の戦いで^{ぼしん} 戊辰戦争終結
- 1868 年 ^{めいじ いしん} 明治維新／^{いっせいいちげん} 一世一元の制／江戸を東京と改称／五箇条の誓文
- 1869 年 ^{さつちやう と ひ} 薩長土肥、^{ほんせきほうかん} 版籍奉還
- 1871 年 ^{はいほん ちけん} 廃藩置県→中央集権体制の確立
- 1872 年 ^{がくせいほん ぶ} 学制頒布／新橋・横浜間鉄道開通
- 1873 年 征韓論敗れ、^{さいこうたかもり} 西郷隆盛・^{いたがきたいすけ} 板垣退助など下野／^{げ や} 徴兵令公布
- 1874 年 民撰議院設立建白書（^{いたがきたいすけ} 板垣退助）

- 1877 年 ^{せいなん}西南戦争〔西南の役〕起こる（^{さいこうたかもり}西郷隆盛⇄^{おおく ほとしみち}大久保利通）
- 1881 年 国会開設の詔（^{みことのり}伊藤博文らの^{いとうひろぶみ}明治政府）／自由党成立（党首 ^{いたがきたいすけ}板垣退助）
- 1882 年 立憲改進黨成立（党首 ^{おおくましげのぶ}大隈重信）
- 1885 年 内閣制度制定（初代内閣総理大臣 ^{いとうひろぶみ}伊藤博文）
- 1889 年 大日本帝国憲法発布／衆議院議員選挙法公布（選挙権を持つのは直接国
税 15 円以上を納める満 25 歳以上の男子）（^{くろだきよたか}黒田清隆内閣）
- 1890 年 第一回帝国議会開く（第 1 次^{やまがたありとも}山県有朋内閣）
- 1894 年 ^{ちょうせん どう がく とう}朝鮮東学党の乱〔^{こう こ}甲午農民戦争〕／日清戦争勃発（第 2 次^{いとうひろぶみ}伊藤博文内閣）
※人は苦心の日清戦争
- 1895 年 下関条約調印／露・仏・独の三国干渉（第 2 次^{いとうひろぶみ}伊藤博文内閣）
- 1898 年 ^{わいはん}隈板内閣成立（不完全ながらも最初の政党内閣）（第 1 次^{おおくましげのぶ}大隈重信内閣）
- 1900 年 選挙法改正（直接国税 10 円以上に引き下げ）／治安警察法公布／
^{ほくしん}北清事変（^{ぎ わ だん}義和団事件により中国に出兵）（第 2 次^{やまがたありとも}山県有朋内閣）／
^{いとうひろぶみ}伊藤博文、^{せいゆうかい}政友会を組織する→第 4 次^{いとうひろぶみ}伊藤博文内閣へ
- 1901 年 官営八幡製鉄所操業開始
- 1902 年 日英同盟成立（外務大臣^{こむらじゅたろう}小村寿太郎）（第 1 次^{かつらたろう}桂太郎内閣）
- 1904 年 日露戦争勃発（第 1 次^{かつらたろう}桂太郎内閣）
※朝鮮を一つくれよとおどすはロシア
- 1905 年 ポーツマス条約調印（全権^{こむらじゅたろう}小村寿太郎）（第 1 次^{かつらたろう}桂太郎内閣）
- 1910 年 韓国〔日韓〕併合（第 2 次^{かつらたろう}桂太郎内閣）
- 1911 年 関税自主権の確立（外務大臣^{こむらじゅたろう}小村寿太郎）（第 2 次^{かつらたろう}桂太郎内閣）
- 1912 年 第一次護憲運動（翌年第 3 次^{かつらたろう}桂太郎内閣^{が かい}瓦解）
- 1914 年 第一次世界大戦（日本はドイツに対し宣戦布告）（第 2 次^{おおくましげのぶ}大隈重信内閣）
- 1915 年 対華 21 カ条の要求（第 2 次^{おおくましげのぶ}大隈重信内閣）
- 1918 年 米騒動／シベリア出兵（^{てらうちまさたけ}寺内正毅内閣）／^{はらたかし}原敬内閣成立（日本で最初の
本格的な政党内閣）
- ※寒〜いシベリア行きの嫌
- 1919 年 選挙法改正（直接国税 3 円以上に引き下げ）（^{はらたかし}原敬内閣）
- 1921 年 ワシントン会議（四ヶ国条約により日英同盟破棄）（^{しではらきじゅうろう}幣原喜重郎の協調
外交政策）（^{たかはしこれきよ}高橋是清内閣）
- 1923 年 関東大震災（^{かとうともさぶろう}加藤友三郎内閣）→第 2 次^{やまもとごん べ え}山本権兵衛内閣へ

- 1924 年 第二次護憲運動盛り上がる（清浦奎吾^{きようらけいご}内閣）
→ 護憲三派内閣成立（加藤高明^{かとうたかあき}内閣）
- 1925 年 普通選挙法公布／治安維持法公布（加藤高明^{かとうたかあき}内閣）
- 1927 年 金融恐慌（休業銀行続出）（第 1 次若槻礼次郎^{わかつきれいじろう}内閣）／第一次山東出兵^{さんとう}
（田中義一^{たなかぎいち}内閣）
- 1928 年 張作霖爆死事件（満州某重大事件）（田中義一^{たなかぎいち}内閣）
- 1930 年 ロンドン軍縮会議（補助艦^{しではらきじゅうろう}）（幣原喜重郎^{へいはらきしゅうろう}の協調外交政策）、統帥権干犯^{とうすいけんかんぱん}
問題（浜口雄幸^{はまぐちおさち}内閣）
- 1931 年 満州事変起こる（柳条湖^{りゅうじょうこ}事件）（第 2 次若槻礼次郎^{わかつきれいじろう}内閣）
※ いくさ 一発柳条湖
- 1932 年 五・一五事件（犬養毅^{いぬかいつよし}首相暗殺）／満州国承認（斎藤実^{さいとうまこと}内閣）
- 1933 年 国際連盟脱退（斎藤実^{さいとうまこと}内閣）
- 1935 年 美濃部達吉^{みのべたつきち}の天皇機関説問題化（岡田啓介^{おかだけいすけ}内閣）
- 1936 年 二・二六事件（岡田啓介^{おかだけいすけ}内閣）
- 1937 年 日華事変（日中戦争）起こる（盧溝橋^{るこうきょう}事件）（第 1 次近衛文麿^{このえふみまる}内閣）
※ いくさ 長々の盧溝橋
- 1938 年 国家総動員法成立（第 1 次近衛文麿^{このえふみまる}内閣）
- 1940 年 大政翼賛会^{たいせいよくさんかい}創立／日・独・伊三国軍事同盟条約調印（第 2 次近衛文麿^{このえふみまる}内閣）
- 1941 年 太平洋戦争勃発（日本軍、真珠湾を攻撃。米国・イギリスに宣戦布告）
（東条英機^{とうじょうひでき}内閣）
※ 行くよ 一途な真珠湾
- 1945 年 ポツダム宣言受諾（終戦）（鈴木貫太郎^{すずきかんたろう}内閣）
- 1946 年 財閥解体、農地改革、婦人参政権、天皇神格否定の詔書（人間宣言）
（幣原喜重郎^{しではらきじゅうろう}内閣）／日本国憲法公布（第 1 次吉田茂^{よしだしげる}内閣）
- 1951 年 サンフランシスコ講和会議（講和条約・日米安全保障条約調印）
（第 3 次吉田茂^{よしだしげる}内閣）
- 1956 年 日ソ共同宣言（日ソの戦争終結宣言）、国連加盟（鳩山一郎^{はとやまいちろう}内閣）
- 1964 年 東海道新幹線開業／東京オリンピック開催
- 1972 年 沖縄返還（第 3 次佐藤栄作^{さとうえいさく}内閣）、日中共同宣言（中華人民共和国を唯一^{たなかかくえい}の政府と認めた／田中角栄^{たなかかくえい}内閣）
- 1978 年 日中平和友好条約締結（福田赳夫^{ふくだたけお}内閣）
- 1987 年 国鉄民営化で JR 誕生（中曽根康弘^{なかそねやすひろ}内閣）

【2】文化史のまとめ（『図説日本史』などの写真と一緒に覚えましょう）

〔1〕古代

（1）飛鳥文化（593～645年）：中国の南北朝文化の影響。代表は法隆寺。

厩戸王〔聖徳太子〕の頃の文化。

法隆寺金堂釈迦三尊像（鞍作鳥作）

はん か し い ぞう

半跏思惟像：広隆寺弥勒菩薩像、中宮寺弥勒菩薩像

（2）白鳳文化（645～710年）：フレッシュで明るい感じ。代表は薬師寺東塔

薬師寺金堂薬師三尊像、薬師寺東院堂聖観音像、興福寺仏頭

法隆寺金堂壁画、高松塚古墳壁画

（3）天平文化（710～794年）：盛唐文化の影響大。写実性・仏教的色彩強い。

代表は東大寺。

そ ぞう

塑像：粘土作りで重い。東大寺法華堂執金剛神像、東大寺戒壇院四天王像。

乾漆像：木枠に布を貼り付けてから漆をつけていく。軽い。

唐招提寺鑑真和上像、興福寺阿修羅像、東大寺法華堂不空罽索観音像。
ふくうけんじやく

ちやうもうりゅうじョ

正倉院鳥毛立女屏風、薬師寺吉祥天像
きちじょうてん

万葉集

（4）弘仁・貞観文化（794～894年）：唐文化の影響

密教：真言宗／空海／高野山金剛峯寺／東寺／しゅげいしゅちいん綜芸種智院

天台宗／最澄／比叡山延暦寺

三筆：たちばなのはやなり空海、橘逸勢、嵯峨天皇

かんしん じ にょ い りん

観心寺如意輪観音像、室生寺釈迦如来像（一木造、ほんば翻波式）

まん だ ら

神護寺両界曼荼羅、園城寺不動明王像（黄不動）
おんじょうじ

（5）国風文化（894～1086年）：日本独自の文化。浄土教の影響大、藤原文化

平等院鳳凰堂阿弥陀如来像（じやうちやう定朝作／寄木造）、高野山聖衆来迎図、法界寺阿弥陀堂

くう や

空也が念仏を広める。源信〔げんしん恵心僧都〕の『往生要集』
えしん そうず

こ きん

古今和歌集（醍醐天皇の命できのつらゆき紀貫之、きのとものり紀友則らが編纂）

さん せき

三蹟：小野道風、ふじわらのすけまさ藤原佐理、藤原行成

『源氏物語』（紫式部）、『枕草子』（清少納言）

（6）院政期の文化（1086～1192年）：末法思想の影響

ふ き じ おおどう

中尊寺金色堂、富貴寺大堂、平家納経、源氏物語絵巻、伴大納言絵巻、
ちやうじゅうぎが

鳥獣戯画、せんめんこしやきやう扇面古写経

[2] 中世

- (1) 鎌倉文化 (12 世紀末～ 14 世紀前半) : 新興の武士の生活の中から起こった文化と京都の公家文化が混じった文化で、宋・元文化の影響も加わっている。鎌倉新仏教。

東大寺南大門：天竺様 [大仏様] (豪放な構造美)

円覚寺舍利殿：唐様 [禅宗様] (清楚な禅宗の味)

観心寺金堂：折衷様

石山寺多宝堂、三十三間堂 [蓮華王院本堂]：和様

東大寺南大門金剛力士像 (運慶、快慶)：力量感溢れる仁王像

興福寺無著・世親像 (運慶)：写実性が非常に高い。

平治物語絵巻 (平治の乱を描いた絵巻物)

蒙古襲来絵巻 (元寇における肥後の御家人竹崎季長を描く)

一遍上人絵伝 (京都の町の雑踏などが見事に描かれている)

北野天神縁起絵巻 (菅原道真の怨霊が藤原時平を清涼殿に襲う)

春日権現験記 (藤原氏の氏神春日明神の霊験を描いた)

石山寺縁起絵巻 (更級日記を著した菅原孝標の女の一行の様子)

『新古今和歌集』：藤原定家、藤原家隆らの編。

『平家物語』：軍記物の最高傑作。琵琶法師が語り歩いた。

『方丈記』 (鴨長明)：無常観で転換期の世相を綴る。

『愚管抄』 (慈円)：末法思想によって歴史を眺めている。

『吾妻鏡』：鎌倉幕府の公式記録

『山家集』 (西行)：自然と旅の和歌集

『徒然草』 (吉田兼好)：深い洞察力で動乱期の社会を綴る。

伝源頼朝像 (伝藤原隆信)：似絵と呼ばれる写実性の非常に高い肖像画。

- (2) 鎌倉新仏教 (非常に重要、絶対暗記)

宗派	開祖	主要関連著書	中心寺院と所在地	キーワード
浄土宗	法然	せんじゃく 選択本願念仏集	知恩院 (京都)	南無阿弥陀仏
浄土真宗	親鸞	きょうぎょうしんしやう 教行信証	東 [西] 本願寺 (京都)	悪人正機説
時宗	一遍	一遍上人語録	しょうじやうこうじ 清浄光寺 (神奈川)	踊念仏
日蓮宗	日蓮	りっしょうあんこくろん 立正安国論	久遠寺 (山梨)	南無妙法蓮華経
臨済宗	栄西	興禅護国論	建仁寺 (京都)	京都・鎌倉五山の制
曹洞宗	道元	しょうぼうげんぞう 正法眼蔵	永平寺 (福井)	しかんたざ 只管打坐

(3) 南北朝の文化 (1336 年～ 1392 年)

『神皇正統記』(北畠親房)：神国思想の立場から南朝の正統性を主張。

『太平記』：南北朝の内乱を南朝方の立場から描く。

(4) 北山文化 (1392 年頃の文化)：足利義満の南北朝統一、幕政確立を背景に武家文化が公家文化を摂取して発展する基礎が築かれた。

鹿苑寺金閣、西芳寺〔苔寺〕庭園・天竜寺庭園(夢窓疎石)

『風姿花伝』〔花伝書〕(世阿弥)：能の理論書、能の大成(観阿弥・世阿弥)

瓢箪図(如拙)、寒山拾得図(周文)：水墨画

足利学校：上杉憲実によって再興された中世唯一の学校施設。

(5) 東山文化 (1467 年頃の文化)：応仁の乱を避けて趣味的生活を営む将軍足利義政を中心に、禅宗・明文化の影響を受けた枯淡幽玄の芸術が開花した。

慈照寺銀閣：下層は書院造、上層は禅宗様

『新撰菟玖波集』(宗祇)：正風連歌のみ約 2,000 句を採択。

『犬筑波集』(山崎宗鑑)：滑稽な連歌。卑俗ながら庶民の自由な明るさを示す。

山水長巻(雪舟)：四季の変化を描く山水画の頂点。

大徳寺大仙院庭園・竜安寺石庭：枯山水

(6) 桃山文化 (1573 年～ 1600 年頃の文化)：信長、秀吉に代表される新興武家と豪商の財力を土台にした文化。勇壮・豪快できらびやかな文化。大規模な城郭(大坂城、姫路城、安土城、伏見城)が建設された。絵画では豪壮・華麗な障壁画が発達し、絵具を濃厚に盛り上げる濃絵の手法が用いられた。他に出雲の阿国が歌舞伎を始めている。

西本願寺飛雲閣・大徳寺唐門：聚楽第遺構

西本願寺書院・唐門：伏見城遺構

妙喜庵待庵(千利休)：簡素な二畳茶室で侘茶の精神を凝集する。千利休は侘茶の大成者。

洛中洛外図屏風、唐獅子図屏風(狩野永徳)：金地極彩色の屏風。濃絵。

牡丹図、松鷹図(狩野山楽)

南蛮屏風：渡来した南蛮人の風俗を描いた屏風。

【近世】

(1) 寛永期の文化 (江戸時代初期)

桂離宮(数寄屋造)、日光東照宮(権現造)

修学院離宮(後水尾上皇造営)：比叡山を借景にした雄大な庭園を持つ

俵屋宗達(風神雷神図屏風)

ほん あ み こうえつ ふなばし まきえすずりぼこ
本阿弥光悦 (舟橋時絵硯箱)

(2) 元禄文化 (江戸時代前期)

なかえとうじゅ
中江藤樹：陽明学 (儒学の一派)

やまがそこう
山鹿素行：古学 (儒学の一派)

やまざきあんさい すい か
山崎闇斎：垂加神道

じんさい とうがい
伊藤仁斎・東涯：古学、京都堀川の古義堂

おぎゅう そ らい せいだん
荻生徂徠：古文辞学、『政談』、けん園塾

ばいがん しんがく
石田梅岩：心学 (儒教に仏教や神道の教理を加え、庶民に平易に解説する)

あら い はくせき とくし よろん きふん
新井白石：『読史余論』、『西洋紀聞』 (イタリア人宣教師シドッチを尋問する)

※新井白石は元禄文化に属するが、『西洋紀聞』は化政文化に属する。

こうりん こうはくばい かきつばた やつはしまきえら でんすずりぼこ
尾形光琳：紅白梅図屏風、燕子花図屏風、八橋時絵螺鈿硯箱

にんせい
野々村仁清：色絵吉野山図茶壺

ひしかわものぶ
菱川師宣：見返り美人図

い はらさいかく にほんえいたいぐら
井原西鶴：『日本永代蔵』、『世間胸算用』、『好色一代男』

こくせん や がっせん しんじゅうてんのみじま
近松門左衛門：『国性爺合戦』、『曾根崎心中』、『心中天網島』

さるみの
松尾芭蕉：『奥の細道』 (紀行文)、『猿蓑』 (俳句集)

(3) 化政文化

① 国学者

もとおりのりなが はなわ ほ きいち ぐんしゅるいじゅう
本居宣長：『古事記伝』、塙保己一：『群書類従』

② 蘭学者

まえのりょうたく すぎ た げんぼく
前野良沢、杉田玄白：『解体新書』 (日本における西洋医学の原点)

おおつきげんたく らんがくかいてい
大槻玄沢：『蘭学階梯』 (蘭学入門書、オランダ語文法書)

いなむらさんぼく わ げ
稲村三伯：『ハルマ和解』 (蘭日対訳辞書)

ひらが げんない
平賀源内：エレキテル (摩擦発電機)、西洋婦人図

しづきただ お れきしょうしんしょ
志筑忠雄：『暦象新書』 (地動説、引力説などを紹介)

いのうただたか よ ち
伊能忠敬：大日本沿海輿地全図 (日本最初の実測精密地図)

お がたこうあん ますじろう さない
緒方洪庵：適塾 (大坂の蘭学塾。大村益次郎、橋本左内、福沢諭吉等を輩出)

なるたき たかの ちやうえい
シーボルト：鳴滝塾 (長崎郊外の診療所兼学塾。高野長英等を輩出)

ぼじゅうつ
高野長英：『戊戌夢物語』 (幕府の鎖国政策を批判)

か ざん
渡辺華山：『慎機論』 (幕府の鎖国政策を批判)

③ 重要な思想家

しょうたき じやうしんえいどう
安藤昌益：『自然真営道』 (支配者の一切いらない社会を理想とし、封建制を批判)

らいさんよう にほんがいにし
頼山陽：『日本外史』 (朝廷中心の歴史書。尊王倒幕運動の大きな支えとなる)

吉田松陰^{しょういん}：松下村塾^{しょうかそんじゅく}（萩にあった塾。高杉晋作^{たかすぎしんさく}、伊藤博文^{いとうひろふみ}、山県有朋等^{やまがたありとも}を輩出）

④ 小説

滑稽本：『浮世風呂^{しきでいさんば}』（式亭三馬^{しきていさんば}）、『東海道中膝栗毛^{ひざくりげ}』（十返舎一九^{じつぺんしゃいつく}）

読本：『雨月物語^{うげつ}』（上田秋成^{うへだあきなり}）、『南総里見八犬伝^{なんそうさとみはっけんでん}』（曲亭馬琴^{きよくていばきん}）

⑤ 浮世絵

鈴木春信^{にしきえ}：錦絵（多色刷りの浮世絵版画）「彈琴美人^{だんきん}」

喜多川歌麿^{ふじょにんそうじゅつびん}：「婦女人相十品」（うち1枚は「ポッピンを吹く女」）

東洲斎写楽：「市川鯉蔵」

葛飾北斎：「富嶽三十六景」

歌川広重：「東海道五十三次」

⑥ 浮世絵以外の重要な絵画

司馬江漢^{しばこうかん}：西洋画「不忍池図^{しのばずのいけず}」（銅版画、遠近画法）

池大雅^{いけのたいが}：文人画「十便十宜図^{じゅうべんじゅうぎず}」

円山応挙^{まるやまおうきよ}：写生画「雪松図屏風」

⑦ 文芸

太田南畝^{なんぼ}：狂歌（滑稽で風刺・皮肉のきいた和歌）

[近代]

（1）重要美術作品

[明治時代の日本画]

悲母観音（狩野芳崖^{かのうほうがい}）

竜虎図（橋本雅邦^{がぼう}）

黒き猫（菱田春草^{ひしだしゅんそう}）

大原御幸（下村観山^{しもむらかんざん}）

[明治時代の彫刻]

老猿（高村光雲^{たかむらこううん}）

坑夫・女（荻原守衛^{おぎわらもりえ}）

墓守（朝倉文夫^{はかもり}）

[明治時代の西洋画]

収獲（浅井忠^{ちゅう}）

湖畔（黒田清輝^{せいき}）

天平の面影（藤島武二^{たけじ}）

海の幸（青木繁^{しげる}）

[大正・昭和前期の絵画]

生々流転（横山大観^{たいかん}）

紫禁城（梅原龍三郎^{うめはらりゅうざぶろう}）

金蓉（安井曾太郎^{そうたろう}）

麗子微笑（岸田劉生^{りゅうせい}）

[大正時代の彫刻]

手（高村光太郎^{こうたろう}）

転生（平櫛田中^{ひらぐしでんちゅう}）

(2) 主なお雇い外国人とその業績

- ① フルベッキ (米)：プロテスタント宣教師。開成学校勤務の後、伝道に専念。
- ② モース (米)：東大で動物学を教授。大森貝塚を発見。ダーウィンの進化論を紹介。
- ③ ベルツ (独)：東大で内科・産科を講義。『ベルツの日記』は明治時代を知るための好資料。
- ④ フェノロサ (米)：伝統美術復興を唱えた。岡倉天心^{てんしん}とともに東京美術学校設立に尽力。
- ⑤ フォンタネージ (伊)：イタリアの風景画家。工部美術学校で油絵を教え、明治画の基礎を築いた。
- ⑥ コンドル (英)：イギリス人建築家。鹿鳴館やニコライ堂を設計。東京駅を設計した辰野金吾らを育てる。
- ⑦ ボアソナード (仏)：フランス法にのっとって刑法・治罪法 (刑事訴訟法)・民法を起草。法学教育に尽力。
- ⑧ ナウマン (独)：東大地質学教授。全国地質図を作成し、フォッサ・マグナを指摘した。野尻湖でナウマン象の骨を発見。
- ⑨ クラーク (米)：札幌農学校教頭。内村鑑三^{うちむらかんぞう}、新渡戸稲造^{にとべいなぞう}に影響を与え、彼らをキリスト教入信へと導いた。

(3) 主な自然科学者とその業績

- ① 北里柴三郎^{きたざとしばさぶろう} (医学)：細菌学の研究 (ペスト菌発見)
- ② 志賀潔^{きよし} (医学)：赤痢菌の発見
- ③ 高峰譲吉^{たかみねじょうきち} (薬学)：アドレナリンの抽出、タカジアスターゼの創製
- ④ 鈴木梅太郎^{うめたろう} (薬学)：オリザニンの創製
- ⑤ 長岡半太郎 (物理学)：原子構造の研究
- ⑥ 本多光太郎^{こうたろう} (物理学)：KS 磁石鋼の発明
- ⑦ 野口英世^{ひでよ} (細菌学)：梅毒スピロヘータの純粋培養に成功。黄熱病に感染、病死。

【3】既出重要事項のまとめ

出題年度を西暦で明記したので、学習者は出題傾向も考慮に入れながら効率的な勉強を心がけていただきたい。■印は特に重要であることを示す。

【1】《人物》

- 青木昆陽 09・69・67
1698～1769。江戸の人。幕府書物方で、徳川吉宗の命で蘭学を学ぶ。またサツマイモ栽培を勧める。
- 赤松満祐 94
1373～1441。播磨など3ヶ国の守護。1441年6代将軍足利義教を暗殺する〔嘉吉の乱〕。
- 足利尊氏 77
1305～58。建武の新政に参加するが、後に離反。北朝を擁して室町幕府を開く。室町幕府初代将軍。
- 足利持氏 94
1398～1439。鎌倉公方。1438年将軍足利義教が討伐、持氏は翌年自殺〔永享の乱〕。
- 足利義政 02・95・84・65・62・61
1436～90。室町幕府8代将軍。応仁の乱の原因を作る。奢侈を好み、銀閣〔慈照寺〕を建て、美術を愛好し、いわゆる東山文化を生んだ。慈照寺東求堂同仁斎と呼ばれる書院は銀閣と共に現存する室町時代の貴重な遺構。
- 足利義満 05・04・03・02・95・80・78・77
1358～1408。室町幕府3代将軍。京都室町に「花の御所」を営む。1392年南北朝合一を成就し、北山に金閣を建て、北山文化を現出。明と国交を開き、日本国王臣源道義と称し、日明〔勘合〕貿易に努めた。
- 阿倍仲麻呂 05・93・92
701～770。717年留学生として入唐。753年帰国途中、暴風雨のため帰れず、唐に留まり長安で死去。玄宗皇帝に仕えた。
- 天草四郎時貞 05・61
1621～38。島原の乱（1637～38）の首領となり、落城の際、戦死。
- 新井白石 01・93・89・73・69
1657～1725。木下順庵に朱子学を学ぶ。6代将軍徳川家宣・7代将軍家継の下で正徳の治を行う。著書に『読史余論』・『西洋紀聞』などがある。
- 有馬晴信 08
1567～1612。天正遣欧使節を派遣したキリシタン大名のひとり。

- 在原業平^{ありわらの あり ひら} 77・74
825～880。六歌仙のひとり。『伊勢物語』は彼を主人公にした物語。
- 井伊直弼^{い い なおすけ} 05・77
1815～60。彦根藩主。1858年大老^{たいらう}に就任。安政の大獄（1858～59）を断行し、桜田門外の変（1860年）で暗殺された。
- 池大雅^{いけの たい が} 57・56
1723～76。文人画家。与謝蕪村^{よ き ふ せん}との合作『十使十宜図^{じゅう べん じゅう ぎ}』は有名。
- 一休宗純^{いっ きゅう そう じゆん} 81・56
1394～1481。大徳寺派の禅僧。当時の貴族的・出家的・禁欲的の禅に対し、在家的・民衆的な禅を説く。文化人に参禅する者多く、影響大。著作に『狂雲集^{きやううん}』がある。
- 一遍^{いっ ぺん} 02・75・67
1239～89。時宗の開祖。踊念仏^{おどり}により時宗の普及に努めた。その法話の集成が『一遍上人語録^{しょうにん}』。
- 伊藤仁斎^{い とう じん さい} 97・96
1627～1705。堀川学派の中心人物。京都堀川に古義堂^{こぎだう}〔堀川塾〕を開いた。
- 伊藤博文^{い とう ぶん} 06・88
1841～1909。長州藩出身の政治家。吉田松陰主宰の松下村塾で学ぶ。大久保利通の死後、政府の最高指導者。華族令・内閣制度を創設し初代首相。枢密院議長として明治憲法制定の中心人物となる。初期議会時代第2次～3次の内閣を組閣。立憲政友会総裁となり第4次内閣を組閣、以後元老^{げんろう}。日露戦争後に初代韓国統監。ハルビンで射殺された。
- 稲村三伯^{い なる さん ぱく} 73・67
1758～1811。鳥取藩医。大槻玄沢^{おおつき げんたく}に学び長崎に遊学。『ハルマ和解^{わ げ}』訳出で有名。
- 犬養毅^{いぬ かい ぎ} 79
1855～1932。1882年の立憲改進黨結成に参加。1910年立憲国民党を創立。1922年には革新倶楽部を組織し、護憲運動の中心的政党政治家として活躍。1929年政友会総裁に就任。1931年政友会内閣を組織したが、翌年五・一五事件で暗殺された。
- 犬上御田鋏^{いぬ がみの み た すき} 78・72
生没年不明。630年第1回の遣唐使として渡航。
- 井上馨^{い の う え かおる} 65
1835～1915。長州藩出身。第1次伊藤内閣の外務卿として条約改正に尽力。条約改正への列国の承認を得ようと考え、欧化政策を積極的に推進した。

- 伊能忠敬 82
1745～1818。地理学者。幕命により1800年から1816年にかけて全国の沿岸を測量し、『大日本沿海輿地全図』を作成。
- 井原西鶴 02・84
1642～93。浮世草子作者。代表作は『好色一代男』（好色物）、『日本永代蔵』『世間胸算用』（町人物）など。
- 隠元 06・67・62
1592～1673。黄檗宗（禅宗の一派）開祖。宇治の地に万福寺を開いた。
- 上杉憲実 71・57
1410?～66。関東管領。足利学校を再興した。
- 歌川〔安藤〕広重 63・56
1797～1858。浮世絵師。代表作は『東海道五十三次』。
- 蓮慶 02・72・66・61・57
?～1223。鎌倉時代の仏師。剛健な写実主義は鎌倉時代彫刻の規範となった。代表作は円成寺の大日如来像、東大寺南大門金剛力士像。
- 栄西（ようさい） 93・92・72・67・56
1141～1215。鎌倉時代の禅僧。臨済宗を初めて日本に伝えた。京都に建仁寺を建立。主著『興禅護国論』『喫茶養生記』
- 榎本武揚 87・65
1836～1908。戊辰戦争の際、五稜郭で官軍に反抗。のちに明治政府高官となった。1875年「千島・樺太交換条約」を締結。
- 大内義弘 94
1355?～99。周防・長門など6ヶ国の守護。1399年応永の乱を起こし、堺に籠城、1ヶ月余で敗死。
- 大久保利通 96
1830～78。薩摩藩士。薩長連合・王政復古に活躍。廃藩置県を策し、征韓に反対し、参議兼内務卿として殖産興業に尽力。藩閥政府の中心として権力を振るったが、暗殺された。
- 大隈重信 02・96
1838～1922。佐賀藩出身。大蔵卿・参議を歴任。1881年、国会開設意見書を左大臣に提出し、国会の早期開設を主張。明治十四年の政変で下野。立憲改進黨の党首。黒田内閣の外相として条約改正に尽力。1898年第1次大隈内閣を組織。第2次内閣の時、第1次世界大戦参戦。在野時代の1882年東京専門学校（のちの早稲田大学）を創立。

- 太田道灌 おお た どうかん 76・74
1432～86。室町中期の武将。1457年江戸城を築いた。
- 大槻玄沢 おおつぎ げんたく 01・73・67
1757～1827。蘭医。杉田玄白・前野良沢に学び長崎に遊学。江戸に家塾芝蘭堂を開いた。
著作に『蘭学階梯』がある。
- 太安万侶〔=太安麻呂〕 おのの やす まろ 87
?～723。711年元明天皇の詔で、稗田阿礼ひえだの あ れが伝誦したものを筆録し、712年古事記を献上。
- 大村純忠 おおむら すみただ 09
1533～87。少年使節をローマ教皇のもとに派遣した大名のひとりで、1563年に受洗して日本最初のキリシタン大名となり、長崎をイエズス会に寄進した。
- 岡倉天心 おかくら てんしん 81・56
1862～1913。フェノロサと東京美術学校を設立。のちに日本美術院を設立。
- 緒方洪庵 お がた こうあん 04・01
1810～63。蘭学者・医者・教育家。大坂に蘭学塾（適塾）を開いた。
- 尾形光琳 お ぎょう りん 05・63・57
1658～1716。画家・工芸家。光琳派の祖。代表作『紅白梅図屏風』『燕子花図屏風』『ハツ橋蒔絵硯箱』。
- 荻生徂徠 お ぎゅう そ らい 05・97・96
1666～1728。江戸の人。古文辞学の祖。江戸茅場町に護国塾を開く。著作『政談』。
- 織田信長 お だ のぶなが 87・79・68・66・61・56
1534～82。戦国大名。1560年、今川義元を桶狭間に破って、威名天下に鳴り、諸方を征略。安土城を築き、統一政権樹立を志したが1582年、本能寺で明智光秀に襲われ自刃。楽市楽座・関所廃止・検地・刀狩などの政策は豊臣政権に受け継がれた。
- 小野妹子 お のの いも こ 76・72・64
生没年不詳。聖徳太子の命を受けて、607年遣隋使として渡海。608年隋使裴世清と共に帰国。同年再度使として隋に赴き高向玄理、僧旻、南淵請安らが留学生として同行。
- 快慶 かい けい 72
生没年不明。12世紀末頃の仏師。代表作『東大寺南大門金剛力士像』『東大寺僧形八幡神像』。
- 荷田春満 か だの あづま ます 83・56
1669～1736。国学者。京都伏見の神職。復古神道を唱道。

- 葛飾北斎 かつしか ぼくさい 63
1760 ~ 1849。江戸の人。浮世絵師。代表作『富嶽三十六景』。
- 狩野永徳 かのう えいとく 05・93・85・68
1543 ~ 90。御用絵師。信長・秀吉に仕え、安土城・聚楽第・大坂城の障壁画を描いた。
代表作『唐獅子図屏風』『洛中洛外図屏風』。
- 狩野山楽 さんらく 68
1559 ~ 90。狩野永徳の養子。代表作『松鷹図』。
- 狩野芳崖 ほうがい 06
1828 ~ 88。日本画家。東京美術学校創立に加わった。代表作「悲母観音」。
- 鴨長明 かも の ちやう めい 99・89
1153 ? ~ 1216。鎌倉初期の歌人・随筆家。著作『方丈記』。
- 賀茂真淵 かも の ま ぶち 83・56
1697 ~ 1769。国学者。遠江浜松の神職の子。荷田春満に学んだ。著作『国意考』。
- 鑑真 かん しん 05・92・91・84・64・62
688 ~ 763。唐の僧。754 年来朝。律宗を伝え東大寺戒壇院を建立。唐招提寺を創建。
- 桓武天皇 かん ち 02・67・66
737 ~ 806。平安京遷都・勸解由使・健児の制実施の他、坂上田村麻呂に蝦夷討伐を行わせ、最澄・空海に新仏教を興させるなど、政治刷新を実施。
- 喜多川歌麿 きたがわ かつ まる 63
1753 ~ 1806。浮世絵師。美人画の最高峰。代表作『婦女人相十品』。
- 北里柴三郎 きたざと し ばさぶろう 06
1852 ~ 1931。ペスト菌を発見し、破傷風菌の純粋培養に成功。伝染病研究所創設。
- 紀貫之 きの つら ゆき 02・89・87・85・74
? ~ 945 ?。平安初期の貴族・歌人。『古今和歌集』の撰者。著作『土佐日記』。
- 紀友則 とも の り 74
? ~ 907 ?。平安初期の歌人。『古今和歌集』の撰者。
- 吉備真備 き び の ま き び 92・72
693 ? ~ 775。唐に留学。橘諸兄の政権に参加。後の菅原道真と並ぶ学者政治家。
- 行基 ぎやう き 75
668 ~ 749。渡来人系の僧。政府の要請で東大寺の大仏造営に協力。
- 曲亭 [滝沢] 馬蓼 きょく たい たきざわ ば りょう 02・82
1767 ~ 1848。読本作者。江戸の人。山東京伝の弟子。代表作は『南総里見八犬伝』。

- 空海 ^{くうかい} 05・03・02・98・92・89・75・74・72・67・65・62
774～835。平安初期の僧。真言宗の開祖。高野山に金剛峯寺を開いた。私立学校綜芸種智院を開設。書道の三筆の一人。風信帖。著作『三教指帰』『十住心論』『文鏡秘府論』。
- 楠木正成 ^{くすのきまさしげ} 00
?～1336。南北朝時代の武将。後醍醐天皇の鎌倉幕府討伐に参画。1335年足利尊氏が挙兵するとこれと交戦し、翌年摂津湊川で戦死。
- 熊沢蕃山 ^{くまざわばんざん} 96
1619～91。陽明学者。中江藤樹に学び、岡山藩主池田光政に仕えた。著作『大学或問』
- クラーク 01
1826～86。アメリカの科学者・教育家。札幌農学校の創設にあたった。別離の言葉といわれる Boys, be ambitious! は有名。
- 鞍作鳥 [=止利仏師] ^{くらぶりのどり} 06・02・87・61
生没年不詳。飛鳥時代の仏師。北魏様式の像を造った。代表作『飛鳥寺釈迦如来像』『法隆寺金堂釈迦三尊像』。
- 源信 ^{げんしん} 05・79・77・71・67
942～1017。平安中期の僧。通称は恵心僧都。『往生要集』を著わした。これは鎌倉時代の浄土教成立の先駆をなし、平安時代の浄土信仰に大きな影響を与えた。
- 玄昉 ^{げんぼう} 67
?～746。717～735年唐に留学。橘諸兄の政権に参画。大仏造営など護国仏教の確立に努めた。
- 後三条天皇 ^{ごさんじょう} 88
1034～73。藤原氏と外戚関係がなく親政を行った。1069年延久の荘園整理令を出し記録荘園券契所を設けた。
- 後白河天皇 [上皇] 05
1127～92。1155年に即位したが、これが保元の乱の原因となった。1158年、二条天皇に譲位し、以後5代に渡って院政を行った。
- 後醍醐天皇 ^{ごだいご} 84
1288～1339。建武の新政の中心人物。天皇親政を目指し、新田義貞・足利尊氏らと鎌倉幕府を倒すが、その後尊氏と対立、吉野に皇居を移し南北朝対立を招いた。
- 後鳥羽上皇 [天皇] ^{ごとぼ} 86・84・61
1180～1239。鎌倉幕府に対抗し1221年承久の乱を起こすが敗れ、隠岐に流された。歌人としては優れ、『新古今和歌集』を編纂させた。

- ^{このえみまろ}近衛文麿 96
1891 ~ 1945。貴族院議長から首相に就任。組閣3回。大政翼賛会設立。
- ^{こばやし いっ き}小林一茶 56
1763 ~ 1827。俳人。俳句は皮肉・激情・童心の交じった作風。著作は『おらが春』。
- ^{こぼり えんしゅう}小堀遠州 61
1579 ~ 1647。江戸初期の茶人。将軍・大名などの茶の湯の師範。その一方で江戸幕府の作事奉行として、名古屋城・伏見城・大坂城などの工事を担当した。
- ^{こみずのお}後水尾天皇 [上皇] 06・03
1596 ~ 1680。中宮は2代将軍徳川秀忠の娘和子。洛北に修学院離宮を造営した。
- ^{こむらじゅう なるう}小村寿太郎 02・98・95・85
1855 ~ 1911。第1次桂内閣外相として日英同盟・日露戦争の外交交渉に当たる。第2次桂内閣外相時代に韓国併合・第2次条約改正（最初に改正日米通商航海条約を締結、1911年関税自主権を完全回復）を実現した。
- ^{さいおん じ きんもち}西園寺公望 05・61
1849 ~ 1940。公卿出身の政治家。枢密院議長、文・外相などを歴任。1903年伊藤博文の後を受けて政友会総裁となり、明治末期に2度組閣。パリ講和会議全権。大正時代以降、最後の元老として立憲政治の保持に尽力。
- ^{さいぎょう}西行 02・99
1118 ~ 90。平安末期の歌人。『新古今集』の代表的歌人の一人。諸国を行脚し、自然歌人と言われる。家集『山家集』。
- ^{さいこう たかもり}西郷隆盛 08・01・72・63
1827 ~ 77。薩摩藩の下級武士として尊攘運動に活躍し、薩長同盟を締結。戊辰戦争の参謀。1871年参議。廃藩置県に尽力、征韓論により下野し、1877年西南戦争を起こして敗れ、自刃した。1871年の岩倉使節団には加わらなかった。
- ^{さいちゅう}最澄 02・98・93・92・91・79・75・72・67・64
766 ~ 822。平安初期の天台宗の開祖。比叡山に延暦寺を建立。「山家学生式」を制定。
- ^{さか ちりやう ま}坂本龍馬 00・76
1835 ~ 67。土佐藩郷士。1864年長崎に海運・貿易のための結社、海援隊を組織し、薩長連合を斡旋。中岡慎太郎とともに京都で暗殺された。
- ザビエル 01・94・90・76・64・56
1506 ~ 52。イスパニアのキリスト教宣教師。イエズス会士。1549年鹿児島に来朝。その後、山口・京都などで伝道。

- 慈円 ^{じえん} 93・87
1155～1225。関白九条兼実^{かねざね}の弟。天台宗の最高位天台座主^{ざす}となった学僧。『新古今和歌集』の歌人としても有名。著作『愚管抄』。
- シドッチ 69
1668～1715。イタリア人のイエズス会宣教師。1708年屋久島に潜入。捕らえられ江戸に監禁され5年後に病死。新井白石^{あらい はくせき}の著述『西洋紀聞』『采覧異言』に材料を提供。
- 司馬江漢 ^{し ば こう かん} 80・57
1738～1818。前野良沢に蘭学を学び地動説を紹介。平賀源内^{ひらが げんない}と交わって遠近法・陰影法を採り入れた洋画を描き、1783年日本で初めての銅版画を制作。代表作『不忍池図』^{しのばずのいけ}。
- シーボルト 90・76・71・67・64・62・59
1796～1866。ドイツの医師・博物学者。1823年オランダ商館付医員として来日。翌年長崎郊外に鳴滝塾を開き、高野長英^{たかの ちやうえい}・小関三英^{おげき さんえい}らの門下生に医学を教授。1828年シーボルト事件により国外追放。
- 島崎藤村 ^{しまざきとうそん} 04・81・59
1872～1943。小説家。北村透谷^{きたむらとうこく}らと『文学界』創刊。著作『若菜集』『破戒』『夜明け前』。
- 定朝 ^{じやうちやう} 06・04・03・02・99・79・71・61・59・55
?～1057。平安中期の仏師。藤原頼通の建立した宇治平等院鳳凰堂内の阿弥陀像の作者。平明円満な日本化された仏像を完成し、その作風は定朝様として後世造仏の規範となった。
- 聖徳太子 ^{しやうとくたい} [厩戸皇子^{うまやどの みこ}] 78・73・65
574～622。用明天皇の皇子。推古天皇の摂政として内外の政治を整備した。603年、冠位十二階を定め、翌年には憲法十七条を制定した。607年、小野妹子^{おのの いもこ}を隋へ派遣し国交を開き、大陸文化導入に努めた。特に仏教興隆に尽力し、『三経義疏』を著し、法隆寺・四天王寺を建立するなど多くの業績を残した。
- 聖武天皇 ^{しやうむ} 03・63・57
701～756。文武天皇の皇子。皇后は光明子^{こうみょうし}。深く仏教を信じ、国分寺^{こくぶんじ}を創建、東大寺大仏を铸造。天平文化の黄金時代を作る。遺品は正倉院^{しやうそう}に伝存。
- 親鸞 ^{しんらん} 05・98・89・85・77・67・56
1173～1262。鎌倉初期の僧。浄土真宗の開祖。師は浄土宗を開いた法然。主著『教行信証』^{きやうぎやうしんしやう}の他、弟子、唯円^{ゆいえん}の編になる法話集『歎異抄』^{たふ いしやう}がある。
- 推古天皇 ^{すいこ} 75
554～628。最初の女帝。聖徳太子を摂政に任じた。

- 菅原道真 ^{すがわらのみちざね} 93・79・72・57
845～903。平安前期の公卿・学者。894年、遣唐使の廃止を建白。901年藤原時平の
中傷により大宰府に左遷され、その地で死去。後世、天満天神として全国的に信仰された。
- 杉田玄白 ^{すぎた げんぱく} 01・73・69・67・57・56
1733～1817。江戸中期の蘭方医。蘭学の祖。前野良沢^{りょうたく}らと行ったオランダ語解剖書
(ターヘルアナトミア)の翻訳『解体新書』は日本近代医学の原点。翻訳の苦心を追想
した『蘭学事始^{らんがくことしり}』は特に有名。
- 鈴木春信 08
1725～70。江戸中期の浮世絵師。多色刷りの錦絵の画法を完成させた。
- 世阿弥 ^{ぜあみ} 85・80・62・57・56
1363～1443。室町時代の能の大成者。観阿弥^{かみあみ}の子。能楽理論書として有名な『風姿
花伝^{かでん}』[花伝書]を著わした。
- 清少納言 ^{せいしょうなごん} 78
生没年不詳。平安中期の随筆家。歌人清原元輔の娘。和漢の学才に優れ、一条天皇の
皇后定子^{ていし}(藤原道隆の娘)に仕えた。著作『枕草子^{まくらのそうし}』。
- 雪舟 ^{せつしゅう} 09・05・02・99・95・93・92・77
1420～1506?。相国寺の画僧。日本の水墨画を完成した。代表作『四季山水図巻(山
水長巻)』『秋冬山水図』『天橋立図』。
- 千利休 ^{せん りきゅう} 87・81
1521～91。茶道の大成者。堺の豪商出身。草庵茶室と侘茶を完成した。信長・秀吉
に仕えたが、秀吉に自刃^{じじん}を命じられる。妙喜庵待庵^{みょうきあんたいあん}は千利休の設計。
- 宗祇 ^{そうぎ} 99・89・77
1421～1502。正風連歌^{しょうふうれんが}を完成。諸国を遊歴し、西行・芭蕉^{さいぎょう ばしゅう}と並び称される。代表作は『新
撰菟波集^{うはくはしゅう}』。
- 醍醐天皇 ^{だいご} 85
885～930。宇多天皇の皇子。延喜の治(天皇親政)を実施。藤原時平^{ときひら}の讒言^{ざんげん}で菅原
道真^{みちざね}を大宰府に左遷。延喜の荘園整理令を發布。
- 平清盛 ^{たいらのきよもり} 63・62
1118～81。1167年太政大臣^{だいていしやうだいじん}となって政権を握る。1180年源氏挙兵後、福原遷都に失
敗。まもなく病死した。
- 高野長英 ^{たかの ちやうえい} 01・90・72・67
1804～50。蘭学者。シーボルトに医学・蘭学を学び江戸で開業。蛮社の獄で永牢の
処分を受ける。のち脱獄し翻訳などをしていたが、幕吏に襲われ自刃したと言われる。

- 高橋是清 これきよ 83
1854～1936。政治家。原敬内閣のあと組閣。1927年、田中内閣の蔵相。金融恐慌に際し、支払猶予令を出して収拾。2・26事件で暗殺された。
- 高向玄理 たかむねのくる まる 06・72
？～654。渡来人の子孫。608～640年、遣隋留学生。大化改新で国博士。654年に遣唐使として入唐。長安で死去。
- 田口卯吉 たぐち うきち 79
1855～1905。史学者・経済学者。1879年『東京経済雑誌』創刊。著作『日本開化小史』。
- 武田信玄 02
1521～73。甲斐の戦国大名。しばしば上杉謙信と戦った。72年、遠江三方ヶ原で徳川家康を破った。勢いに乗じて三河に入ったが、まもなく陣中で病死。
- 伊達政宗 02
1567～1636。安土桃山時代・江戸初期の武将。仙台藩主。関ヶ原の戦いで徳川方に属し、上杉景勝と戦った。大坂の陣にも徳川方に参加。仙台藩62万石の基礎を築いた。1613年、支倉常長 はせくら つねなが をローマに派遣した。
- 橘逸勢 たちばなのはや なり 89・59
？～842。伴健岑とともに承和の変を企てたとして、伊豆に流罪。三筆のひとり。橘氏は橘諸兄 たちばなのもろえ の流れを引く有力な氏で、源・平・藤・橘4姓のひとつ。
- 橘諸兄 たちばな もろえ 96
684～757。光明皇后の異父兄に当たる。藤原4兄弟の病死後738年に右大臣、さらに左大臣となり、吉備真備 きびのみまび らを顧問として政権を掌握。
- 田中義一 たなか ぎいち 93
1864～1929。軍人・政治家。長州出身の藩閥の巨頭。原・第2次山本内閣陸相。退役後、1925年立憲政友会総裁となり、第1次若槻内閣崩壊後に組閣。
- 近松門左衛門 ちかまつもんざえもん 75
1653～1724。浄瑠璃作者。後に竹本義太夫の為に作品を書いた。一方、坂田藤十郎の為に歌舞伎脚本も書いた。代表作『国性爺合戦』(時代物)『曾根崎心中』『心中天網島』(世話物)
- 張作霖 ちやうさく りん 93
1873～1928。奉天軍閥の巨頭。日本の支援により満州を統一。後に北京政権に進出。蒋介石の北伐軍に圧迫され、敗走の途中、関東軍の謀略により列車と共に爆死。〔1928年6月4日張作霖爆殺事件〕

- 津田梅子 ^{つだうめこ} 09
1864 ~ 1929。1871 年の岩倉使節団に随行した女子留学生のひとり。帰国後、女子英学塾（現津田塾大学）を設立した。
- 坪内逍遙 ^{つばうちしやう} 78・72
1859 ~ 1935。小説家・劇作家。写実主義を主張し、日本近代文学の先駆。『早稲田文学』創刊。のち演劇改良を企て、文芸協会設立。代表作『小説神髓』。
- 寺内正毅 ^{てらうちまさたけ} 95
1852 ~ 1919。長州出身の軍人・政治家。陸軍大将、元帥。桂内閣時代の陸相。朝鮮総督を経て 1916 年首相。非立憲的な藩閥政治のため非難された。
- 天智天皇 ^{てんじ} 77
626 ~ 671。中大兄皇子 ^{なかのおおえのみこ} の時代に中臣鎌足 ^{なかとみのかんまり} と共に蘇我氏を倒し改新政治を推進。舒明・舒明両天皇の皇太子。齐明天皇死後、称制（即位式を挙げずに政治を執ること）、近江遷都後即位。庚午年籍 ^{こうご かんじやく} を作成し、近江令制定を行った。
- 天武天皇〔=大海人皇子〕 ^{てんむ} 05・01・86
? ~ 686。舒明天皇の子、天智天皇の弟で大海人皇子 ^{おほあまの} という。672 年壬申 ^{じんしん} の乱後、飛鳥浄御原宮 ^{あすかきよみはらのみや} で即位。皇族を重用して天皇政治を強化し、八色の姓・飛鳥浄御原令 ^{やぐさ かげん} を制定。
- 道鏡 ^{どうきやう} 75・67
? ~ 772。法相宗の僧。孝謙上皇の病を癒 ^{いやす} し信任を得て台頭。藤原仲麻呂 ^{なかまろ} の敗死後、765 年太政大臣禅師となり全盛。仏教政治を行った。宇佐八幡の神託と称して皇位を望んだが失敗。770 年下野薬師寺 ^{しもつけ} に追放された。
- 道元 ^{どうげん} 05・02・98・91・81・79・77・72・67・62・56
1200 ~ 1253。鎌倉初期の禅僧。曹洞宗 ^{そうとう} を初めて日本に伝える。越前 ^{えちぜん} に永平寺を創建。著書に『正法眼蔵 ^{しやうぽうげんそう}』。
- 東洲斎写楽 ^{とうしゅうさいしやらく} 05・55
18 世紀末の浮世絵師。江戸に住み阿波侯に仕えた能役者 ^{のうやく} というが伝記不詳。1794 ~ 95 年のわずか 1 年間に約 140 点の個性的な役者絵と少数の相撲絵とを残す。
- 徳川家斉 ^{とくがわいえなり} 58
1773 ~ 1841。11 代将軍。御三卿 ^{ごさんきやう} の一橋家から将軍世嗣 ^{よつぎ} となった。松平定信を登用して幕政に当たらせ、改革後も大御所時代 ^{おおごしよ} を現出した。
- 徳川家光 ^{いへみつ} 03・99・75・66・58
1604 ~ 51。江戸幕府 3 代将軍。その在職中に諸法度 ^{しよはつと}、参勤交代などの制度を整え、キリシタン弾圧、鎖国を断行して全国の専制的支配体制を固めた。

- 徳川家茂^{いえもち よしとみ}〔慶福〕 80・58
 1846～66。14代将軍。紀伊藩主。井伊直弼^{い いなおすけ}らに推されて1858年将軍となり、家茂と改名。1862年和宮^{かずのみや}と結婚、第2次長州征討の時、大坂城で病死した。
- 徳川家康^{いえやす} 88・79・78・72・66・65・58
 1542～1616。江戸幕府初代将軍。最初は信長と結び、後に秀吉の天下統一に協力。秀吉の死後、1600年、関ヶ原に石田三成^{みつなり}を破り対抗勢力を一掃。1603年、征夷大將軍に任ぜられ、江戸幕府を開いた。1614年、1615年の大坂冬、夏の両陣で豊臣氏を滅ぼし名実共に天下を統一して幕府の基礎を固めた。
- 徳川綱吉^{つなよし} 99・58
 1646～1709。5代将軍。家光の第4子。忠孝・礼儀を重視した天和の武家諸法度を発布するなど、大老堀田正俊の補佐で天和の治と呼ばれる文治政治を推進。のちに側用人柳沢吉保^{そばよう にんやなぎさわよしやす}が台頭。好学と生類憐みの令^{しょうるいあわれ}（1687年）は有名。
- 徳川秀忠^{ひでただ} 88
 1579～1632。家康の第3子で2代将軍。武家諸法度・禁中並公家諸法度などを定め、幕政確立に努めた。
- 徳川慶喜^{よしのぶ} 05・58
 1837～1913。15代将軍。水戸藩主徳川斉昭^{なりあき}の第7子。1847年一橋家を継ぎ、将軍継嗣問題で一橋派に推されたが実現せず、1866年将軍に就任。翌年大政奉還。
- 徳川吉宗^{よしむね} 02・95・73・69・67・58
 1684～1751。8代将軍。享保^{きやうほう}の改革を断行。足高^{たりだか}の制、上米^{あげまい}の制を実施した。目安箱^{めやすばこ}を設置し、公事方御定書^{くし がたあきだめがき}の編纂を命じた。その他、殖産興業・新田開発の推進など、幕政全般にわたる改革を行い、ある程度、幕府の支配体制の補強に成功。
- 徳當蘇峰^{とくとう そほう} 79
 1863～1957。評論家。民友社を創立、『国民之友』『国民新聞』を創刊、平民主義を主唱。三国干渉を機に国家主義に転じ終生それを主唱した。主著『近世日本国民史』
- 豊臣秀吉^{とよとみ ひでよし} 88・81・78・68・65・63・61・57
 1536～98。安土桃山時代の武将。織田信長に仕え、しばしば戦功をたてた。信長の死後、柴田勝家を破って主導権を確立。1590年後北条氏を滅ぼし、天下統一を達成した、この間、1585年関白に任ぜられ、豊臣姓を賜り、1587年北野に大茶会を催し威を天下に示した。1592年（文禄の役）、1597年（慶長の役）と二度にわたり朝鮮侵略を行ったが、失敗に終わった。朱印船貿易によって商業資本を掌握^{かたながり}。刀狩によって兵農分離を徹底させ、太閤検地の実施により、税制らしい税制を確立し、幕藩体制の基礎を作った。

- 中江兆民 なか えちやうみん 08
1847 ~ 1901。自由民権運動の理論的指導者のひとりで、『民約訳解』（ルソーの『社会契約論』の訳本）を出版して国民の抵抗権を主張した。
- 中江藤樹 なか えとうじゅ 96
1608 ~ 48。日本陽明学の祖。近江聖人といわれる。朱子学から陽明学に転じた。郷里近江小川村に藤樹書院を開いた。
- 夏目漱石 なつめ そうせき 59
1867 ~ 1916。小説家。帝国大学学生時代から文学活動を始めた。自然主義に反発し、ロマン的余裕派として多くの作品を著すが、のち心理主義的傾向を強めた。代表作『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『それから』『こころ』など多数。
- 日蓮 にちれん 98・82・77・75・67
1222 ~ 82。鎌倉時代の僧。仏法の真髓が「法華経」にあることを悟り、日蓮宗[法華宗]を開いた。主著『立正安国論』。
- 新田義貞 にっ た よしさだ 76
1301 ~ 38。後醍醐天皇の呼びかけで鎌倉を攻め幕府を滅ぼした。足利尊氏の謀反後、南朝を守って戦ったが越前国藤島で戦死。
- 野中兼山 の なかけんざん 08
1615 ~ 63。江戸初期の朱子学者で、南学派[海南学派]に属し、土佐藩の家老となつて、新田開発、殖産興業など、様々な改革を行つた。
- 橋本左内 はしもと さいない 77
1834 ~ 59。福井藩士。1849年大坂で緒方洪庵に医学を学び、藩主松平慶永を助け一橋派として活躍。将軍を頂点とする統一国家を構想した。安政の大獄で江戸で刑死。
- 支倉常長 はせくらつねなが 09
1571 ~ 1622。仙台藩主伊達政宗が派遣した慶長遣欧使節の大使。ローマ教皇に謁見。
- 浜口雄幸 はまぐち おさち 84
1870 ~ 1931。立憲民政党総裁。大蔵省から政界に入り蔵相・内相を経て、1929年首相。「ライオン宰相」といわれ人気が高かった。1930年右翼の襲撃を受けて負傷し、翌年死去。
- 林子平 はやし し へい 78
1738 ~ 93。長崎で海外事情を聞く。『海国兵談』が幕府の怒りに触れ、1792年禁錮刑。寛政三奇人のひとり。
- 原敬 はら けい 02・96・90・84・79
1856 ~ 1921。寺内内閣の後、1918年に立憲政友会総裁として、最初の非華族の首相となる政党内閣を組織。「平民宰相」として人気があったが、東京駅で刺殺された。

- ハリス 83・66・61
1804～78。アメリカの外交官。日米和親条約の結果、1856年、初代駐日総領事として下田に着任。1858年、日米修好通商条約の締結に成功。
- 菱川師宣 ^{ひしかわもろのぶ} 06・04・72
1618～94。浮世絵の祖。代表作『見返り美人図』。
- フェノロサ 01・64・62・56
1853～1908。アメリカの哲学者・日本美術研究家。御雇外人教師。日本美術に関心を持ち、岡倉天心と共に、東京美術学校の創立に参画。帰国後、ボストン美術館東洋部長となり、日本美術の紹介に努めた。
- 福沢諭吉 ^{ふくざわ ゆきち} 69・55
1835～1901。啓蒙思想家。豊前中津藩士。緒方洪庵に学んだ。欧米巡歴3回。1868年、慶應義塾を創設。明六社創立に参加。代表作『西洋事情』『学問のすすめ』。
- 藤原種継 ^{ふじわらの たねつぐ} 96
737～785。784年長岡宮使となり、その造営に当たった。785年現地で監督中射殺され、この事件で早良親王は皇太子を廃され、大伴・佐伯の旧豪族が処刑された。
- 藤原不比等 ^{ふひと} 88
659～720。鎌足の子。大宝律令の制定に参画し平城京遷都に努力。養老律令を完成した。娘宮子 ^{みやこ} が文武天皇夫人として聖武天皇を生み、藤原氏が外戚となる端緒を作った。
- 藤原冬嗣 ^{ふゆつぐ} 02
775～826。平安初期の公卿。嵯峨天皇の信任あつく、藏人所設置とともに、藏人頭となる。二男良房は人臣最初の摂政となる。氏寺興福寺に南円堂を建立。
- 藤原道長 ^{みちなが} 71
966～1027。藤原兼家の子。995年内覧となった。4人の娘を一条・三条・後一条・後朱雀の後とし、その生んだ後一条・後朱雀・後冷泉3代の外戚として権勢を振るった。1016年摂政、1017年太政大臣となり藤原氏の全盛期を現出。晩年には法成寺を造営し、御堂関白 ^{みどうかんぱく} といわれた。『御堂関白記』を著した。
- 藤原行成 ^{ゆきなり} 08
972～1027。書道にすぐれ、三蹟のひとり。世尊寺流書道の祖と仰がれる。
- 藤原頼通 ^{よりみち} 03・79・71
992～1074。道長の子。後一条・後朱雀・後冷泉3代の摂政・関白となった。宇治平等院鳳凰堂を建て、宇治関白 ^{うじかんぱく} といわれた。1067年に隠退。道長以来約60年間は摂関政治の最盛期。

- プチャーチン 94
1803～83。ロシア海軍提督。1852年通商を求めて長崎に来航したが、幕府の拒否で退去。その後、長崎・下田・箱館に度々来航。1854年日露和親条約。1858年日露修好通商条約を締結。
- ヘボン 06・01・59
1815～1911。アメリカ人宣教師・医者。1859年来日し医療・伝道に従事。ヘボン式ローマ字を考案し、聖書の和訳完成。私塾が明治学院の起こり。(現明治学院大学)
- ペリー 94・87・76・74・65・61
1794～1858。アメリカの海軍将官。東インド艦隊司令官。1853年、浦賀に入港して開国を要求。1854年まで猶予を求められて退去。1854年江戸湾に再来し、日米和親条約を締結。下田・箱館を開港させる約束に成功。
- ベルツ 62
1849～1913。ドイツ人内科医。1875年政府に招かれ、東京医学校・東大で内科・産科を講義。1905年に帰国。『ベルツの日記』は当時を知る好資料。
- 北条実時 57
1224～76。執権北条義時の孫。評定衆として時頼・時宗らを助けた。学問を好み、自分の蔵書を公開して金沢文庫を設けた。
- 北条早雲 57
1432～1519。もと將軍の近習、伊勢新九郎長氏、出家して宋瑞と号す。初め駿河の守護今川氏親の外戚として今川氏に寄食。1493年伊豆に攻め入り堀越公方足利茶々丸を追って韮山城に進出、のち相模小田原城に拠った。子氏綱の代から北条を称したが、鎌倉幕府の執権北条氏と区別のため後北条氏ともいう。
- 北条高時 94・77
1303～33。14代執権。遊樂に耽って幕政を乱し、元弘の変に際して後醍醐天皇を隠岐に流したが、御家人が離反し、新田義貞の鎌倉攻撃を防ぎ得ず自殺した。
- 北条時宗 07・03・01・79・63
1251～84。鎌倉幕府8代執権。時頼の子。文永・弘安の両役(1274年・81年)に際して元軍を撃退させることに成功した。
- 北条政子 01・61
1157～1225。北条時政の娘で源頼朝の妻。頼朝の死後、北条氏一門と共に幕府政治を執り、尼將軍と呼ばれた。

- 北条泰時^{やすとき} 88・86・63・61
 1183～1242。3代執権。義時の子。承久^{じょうきゅう}の乱に功を立て、乱後、叔父時房と初代六波羅探題となる。1224年執権就任後、連署^{れんしよ}・評定衆^{ひょうじょうしゅう}の新設、貞永式目制定など執権政治の確立に努めた。
- 法然^{ほうねん} 98・78・74・67
 1133～1212。浄土宗の開祖。源信の『往生要集』により、浄土宗開立を決意し専修念仏による往生を説いた。主著『選択本願念仏集^{せんじゆ}』。
- 細川勝元^{ほそかわかつもと} 01・86・63
 1430～73。管領。応仁の乱の東軍の将。初め將軍義政を奉じ、足利義視^{あしかがよしみ}・畠山政長^{はたけやまさなが}・斯波義敏^{しばよしとし}らを後援して山名持豊^{やまなもちとよ}の軍と戦い、勝敗決せぬまま死去。
- 前野良沢^{まえのりようたく} 01・73・72・69・67
 1723～1803。江戸中期の蘭医。47才で蘭学を志し青木昆陽^{きんたう}にオランダ語を学び、1770年長崎に留学。杉田玄白、中川淳庵^{じゅんあん}、桂川甫周^{かづらがわしゅう}らと共に、オランダ語の解剖書『ターヘル・アナトミア』を訳述した『解体新書』を刊行。
- 正岡子規^{まさおか しき} 08
 1867～1902。俳句雑誌『ホトトギス』によって写生俳句を首唱。また『歌よみに与ふる書』を出版して、短歌の革新運動に乗り出した。
- 松尾芭蕉^{まつ お ばしやう} 99・89・71・56
 1644～94。俳人。伊賀の人。談林風を学び、のち蕉風^{しやうふう}を確立し俳句に与えた影響は大。代表作『奥の細道』『猿蓑』。
- 松平定信^{まつ だいら ざだ のぶ} 03・02・95・84
 1758～1829。將軍家斉^{いえなり}の老中筆頭。白河藩治政の実績により、幕政を担当。寛政^{かんせい}の改革として囲米、寛政異学の禁、七分金積立、人足寄場の設置などを実施。
- 間宮林蔵^{ま みやりんぞう} 93
 1775～1844。1808年幕命によって樺太を探查し、島であることを確認（間宮海峡の発見）。晩年は幕府隠密となった。
- 三浦按針^{み うら あんじん} [=ウィリアム・アダムズ] 94・64
 1564～1620。英人。リーフデ号水先案内人。家康の外交顧問となり、三浦半島に領地、日本橋に屋敷をもらった。平戸のイギリス商館設立に尽力。平戸で死去。
- 水野忠邦^{みず の ただくに} 95
 1794～1851。浜松藩主。老中首座として天保^{てんぽう}の改革を実施。厳しい統制政策をとっていたが、上知令^{あげちれい}の失敗により失脚。

- みなもとのもちあき 源実朝 00・59
 1192～1219。源頼朝の2男。3代将軍。北条氏の圧迫が強く、やがてその策謀で頼家の子公暁に暗殺された。和歌に優れ、歌集に『金槐和歌集』がある。
- みなもとのもちりえ 源頼家 00
 1182～1204。源頼朝の長男。2代将軍。家督をついで間もなく、北条氏のために勢力を失い、しゅうとの比企能員と結んで北条氏討伐を企てたが失敗し、能員は殺され、頼家は伊豆修禪寺に幽閉され、翌年殺された。
- みなもとのもちとも 源頼朝 84・78・61
 1147～99。鎌倉幕府初代将軍。平治の乱に敗走の途中捕らわれ、伊豆に配流。1180年、以仁王の^{りやうじ}旨を受けて挙兵したが、石橋山の戦いに敗れた。1184年、弟範頼、義経を大将に任じ、源義仲を討ち、平氏を一の谷から追い落とし、1185年、義経をして壇ノ浦に平氏を滅亡させた。同じ年、諸国に守護・地頭を設置し武家政権を確立した。1192年、征夷大將軍に任ぜられ、幕府を創設した。
- むがくそげん 無学祖元 08・79・64
 1226～86。南宋の禅僧。1279年北条時宗の招きで来日。鎌倉に円覚寺を開いた。
- むそうそせき 夢窓疎石 64・61・57
 1275～1351。鎌倉末期・南北朝時代禅僧。臨済宗の黄金期を築いた。7代の天皇から国師号を贈られた。西芳寺・天龍寺などに残る卓抜な造園技術は有名。
- むつむねみつ 陸奥宗光 95
 1844～97。和歌山県出身。駐米大使を経て第2次伊藤内閣の外相として日英通商航海条約を結び、条約改正に成功。日清戦争と三国干渉の外交処理に当たった。
- むしきしよ 紫式部 74
 ?～1016?。越前守藤原為時の娘。一条天皇の中宮彰子(道長の娘)に仕え、『源氏物語』を著す。
- じゅこう 村田珠光 08
 1422～1502。室町中期、禅の影響を受けて日本独自の茶道である侘び茶を創始した。
- モース 06・01・66・62・59
 1838～1925。アメリカの動物学者。御雇外人教師。東京大学で動物学を講義し、ダーウィンの進化論を普及。その間、東京の大森貝塚を発見して、日本考古学の端緒を開いた。
- もとりのなが 本居宣長 01・97・83・78・56
 1730～1801。江戸中期の国学者。国学四大人の一人。伊勢松坂の人。賀茂真淵の影響を受ける。『古事記伝』によって、古代精神を極め、日本古典の意義を明らかにする一方、『直毘霊』を著して外来思想、特に儒教を排し、復古思想を説いて国学の思想的な基礎を固めた。

- 柳沢吉保 99・96
1658～1714。綱吉の小姓から側用人となり、甲府15万石を領し大老格となった。綱吉の意を受けて文治政治を推進。
- 山上憶良 99・85
660～733。万葉歌人。702～704年入唐。その歌は子らを思う歌や貧窮問答歌など人生・社会を詠じた切実なものが多い。
- 山鹿素行 96
1622～85。古学派の儒者。会津の人。朱子学・神道・兵学に通じ、実用の学を主張し朱子学を批判し、自ら聖学と呼んだ。このため幕府は赤穂へ配流した。武士道の大成者。著作『聖教要録』。
- 山崎闇斎 96
1618～82。南学派の儒者。谷時中に学び、吉川惟足に神道を受けて垂加神道を創始。京都に塾を設け、多くの門弟を養成し崎門学派を形成。
- 山名氏清 94
1344～91。中国・近畿に一族合わせて11ヶ国を領した守護大名。領国が日本60余州の6分の1に当たるので六分一殿と称される。義満に挑発され、1391年明德の乱で敗死した。
- 山名持豊〔宗全〕 05
1404～73。室町時代の武将。応仁の乱では初め足利義尚をたて、その総帥となったが、陣中で死んだ。
- 与謝野晶子 66
1878～1942。歌人。与謝野鉄幹を慕って新詩社に入り、結婚。歌風は情熱的で華麗。日露戦争批判の詩を発表。歌集『みだれ髪』。
- 与謝蕪村 57・56
1716～83。俳人・画家で摂津の人。平凡で俗気が多い月並調に対し、絵画的描写の画俳一致を特徴とする天明調俳諧と高雅な文人画で有名。池大雅との合作『十便十宜図』で有名。
- 吉田兼好 09・99
1283?～1350?。鎌倉末期・南北朝時代の歌人・随筆家。随筆集『徒然草』。
- 吉田松陰 00・77
1830～59。長州藩士。江戸で佐久間象山に師事。1854年ペリー再来の際、下田で海外密航を企てたが失敗し、幽閉中松下村塾（長州萩郊外）で教えた。安政の大獄で刑死。

- 吉野作造 99・97・82
1878～1933。政治学者。東大教授。1916年『中央公論』にて民本主義を主唱。大正デモクラシーの先駆となった。
- ラックスマン 94
1766～96?。ロシア軍人。1792年、女帝エカテリーナ2世の命により通商要求を目的に大黒屋光太夫ら漂流民を伴い根室に来航。通商は拒否されるが長崎入港許可書を受けて帰国。
- ラフカディオ・ハーン 01・64・59
1850～1904。ギリシア系英国人。日本紹介に貢献。帰化して小泉八雲。著作『怪談』。
- ルイス・フロイス 01・94・90・79
1532～97。ポルトガルのイエズス会宣教師。1563年来日。京都で信長に謁見、秀吉とも親しく、キリシタンの地歩を固めた。追放令で退去後、再来日。長崎で死去。著作『日本史』。
- レザノフ 94
1764～1807。露米会社支配人。1804年アレクサンダー1世の遣日使節として長崎に来航。通商を要求したが容れられず、翌年退去。
- 蓮如 93・67
1415～99。本願寺8世。当時不振の本願寺を再興。比叡山衆徒のため本願寺を焼かれて1471年越前（現在の福井県）吉崎に坊舎を構える。
- 渡辺華山 03・57
1793～1841。蘭学者・画家。高野長英らと蘭学研究。蛮社の獄で自刃。鷹見泉石像。
- 主仁 64
4世紀末に来日した百済の博士。『論語』『千字文』をもたらした。

【2】《社会・事件・制度》

- 足尾銅山鉍毒事件 97・80
古河の足尾銅山精錬所の鉍毒が渡良瀬川沿岸の田畑に被害を与え、社会問題化。政府は鉍毒予防条例を出し、鉍毒調査会を設置したが効果なく、1900年には大挙訴訟の被害農民が群馬県川俣で官憲に弾圧され（川俣事件）、ついに1901年の田中正造の天皇直訴にまで発展。結局1907年谷中村の廃村・遊水池設置で決着。
- 安政の開国 88
1854年日米和親条約〔神奈川条約〕締結により、鎖国が破られる。

- 安政の大獄^{たいさく} 77・74
 1858～59年に行われた政治弾圧。主として井伊直弼^{い い なおすけ}の専制に反対する者を処断。連座100余人に及ぶ。
- 池田屋事件 09
 1864年、近藤勇^{こんどう いさみ}ら新撰組が、尊攘派の志士を京都の旅館池田屋で殺傷した事件。
- 異国船打払令^{い ぐく せん うち はらい けい} 88
 1825年、清・蘭船以外は二念（ためらうこと）なく撃退することを命じたもの。無二念打払令ともいう。
- 永享の乱^{えい きやう} 08・94
 1438年、鎌倉公方足利持氏^{くぼう あしかがもちうじ}が幕府に背き、将軍義教^{よしのぶ}が討伐。翌1439年持氏自殺で終わる。以後関東管領上杉氏が実権を握った。
- 永楽通宝^{えいらく づうほう} 06・80
 永楽銭ともいう。明から輸入した銅銭。室町時代以降標準的な通貨として広く流通。
- 永仁の徳政令^{えいにん とくせい けい} 88
 1297年鎌倉幕府が出した徳政令。
- 応永の乱^{おう えい} 05・94
 1399年、大内義弘が幕府の圧迫に反抗、鎌倉公方足利満兼^{あしかがみつかね}らと呼応して領国和泉の堺で反乱、義満の討伐を受けて敗死。
- 王政復古の重大号令^{おうせい ふくこ} 84
 薩長の武力討伐派が計画し、1867年発表。摂関・幕府の廃絶。三職の設置、諸事神武創業の昔への復帰などを宣言。天皇中心の新政府樹立を目指した。
- 応天門の変^{おうてんもん} 08
 大納言伴善男^{ともよし お}が平安京応天門に放火し、その罪を左大臣源信^{みなもと の まこと}に負わせようとして発覚し、流罪に処せられた事件。これにより、伴〔大伴〕氏は没落した。
- 応仁の乱^{おうにん} 05・01・88・86・63・61
 1467～77。細川勝元と山名持豊^{もちとよ}の対立に將軍繼嗣問題^{けいし}と畠山・斯波家^{はたけやま し ば}の家督争いがからんで起きた11年間の大乱。その結果、公家勢力・將軍権威失墜、戦国時代となった。
- 大塩平八郎の乱^{おおしお へいはちろう} 83
 1837年、陽明学者で大坂町奉行与力^{よりき}であった大塩平八郎が、天明^{てんめい}の飢饉による貧民の窮乏を訴えるが認められなかったため起こした乱。1日で鎮圧された。
- 大津事件 09
 1891年滋賀県大津でロシア皇太子が巡査に切りつけられ負傷した事件。政府は巡査を死刑にするように裁判所に圧力をかけたが、大審院長児島惟謙^{こじま いけん}は司法の独立を守った。

- 嘉吉の乱 94
1441 年、播磨守護赤松満祐が將軍義教を謀殺。山名氏ら諸将が満祐を討伐、赤松氏衰退。山名氏の勢力巨大となった。
- 学制 68
1872 年に公布された近代的学校制度を定めた法令。フランスの学制にならう。
- 刀狩令 88・54
1588 年豊臣秀吉が発令。諸国の農民から方広寺の大仏造営を口実に武器を没収。
- 株仲間 92
同業者や、利害を同じくする異種の商人・職人が結成した団体で、幕藩が公認したもの。
- 勘合符 92・78・62
明が貿易統制のため使用した割符。
- 勘合貿易〔=日明貿易〕 80・79・62・55
1404 年、足利義満が明と勘合による朝貢貿易を開始。輸出品は銅・硫黄など、輸入品は銅銭・生糸など。
- 韓国〔日韓〕併合 95・71
1910 年 8 月韓国併合条約を調印。以後 1945 年まで朝鮮総督府による植民地支配を行った。
- 寛政の改革 95・88
1787～93 年。老中首座松平定信が行った幕政改革。
- 関税自主権 68・63
自国の関税率を自主的に規定できる国家的権利。日本は安政の五ヶ国条約の協定関税制でこの権利がなく、条約改正の努力で、1911 年完全に回復した。
- 関白 64
天皇を補佐し、万機に關与する令外の官。最初の関白は藤原基経。
- 享保の改革 95・88
徳川吉宗による 1716～45 年の幕政改革。
- キリスト教伝来 90・74
1549 年イスパニア人イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルによってもたらされた。
- 欽定憲法 82
君主の単独の意図によって制定された憲法。19 世紀のドイツ諸邦の憲法、明治憲法など。民定憲法に対する言葉。

- 九カ国条約 68
1922 年、英・米・日・仏・伊の五カ国にベルギー・ポルトガル・オランダ・中国を加え、九カ国が締結。中国の主権尊重・門戸開放・機会均等を規定する。この条約に基づき、日本は中国に山東省の権益を返還。
- 黒船 78
欧米の船を指す。1853 年のペリー来航は日本に衝撃を与えた。
- 慶安の御触書 88
1649 年、徳川幕府が農民に与えた心得 32 条。順法心得・耕作奨励・衣食住の制限など生活の細部にまで触れている。
- 下剋上 89・63
下の者が上をしのぐ意で南北朝時代から戦国時代にかけて、伝統的権威を否定する社会的風潮。一揆の高揚、戦国大名の台頭などはその例。
- 建長寺船 77
1325 年、鎌倉幕府が建長寺の再建費を得るために元に派遣した貿易船。
- 遣隋使 95
聖徳太子が派遣。607 年小野妹子、614 年犬上御田鍬を派遣。
- 遣唐使 95・93・92・78・76・74・72・60・57
630 年～894 年の間に 10 数回渡海した。630 年一回目の遣唐使は犬上御田鍬。894 年菅原道真の献言で中止。
- 元の来襲〔＝文永・弘安の役〕 92・76・75・74・63・60
13 世紀における 2 度にわたるモンゴル軍の日本襲来。文永の役と弘安の役を合わせていう。
- 憲法十七条〔＝十七条憲法〕 74
604 年、聖徳太子が制定。天皇を中心とする国家意識が強調されている。
- 建武の新政 74
建武の中興ともいう。鎌倉幕府滅亡後の後醍醐天皇による新政をいう。足利尊氏の反乱により 3 年足らずで崩壊。
- 五・一五事件 79
1932 年 5 月 15 日、海軍青年将校中心のクーデター。この事件により、犬養首相が射殺された。
- 五街道 95・89・63・60・54
江戸日本橋起点の幹線道路。道中奉行が支配し、設備も整う。東海道・中山道・日光道中・奥州道中・甲州道中の 5 つ。

- 国際連合加盟 68
第3次鳩山内閣の1956年12月に加盟。58年以後、しばしば安全保障理事会の非常任理事国に選ばれ、村山内閣の94年、常任理事国入りの意志を表明。
- 国際連盟脱退 85・68
1932年10月国際連盟理事会は13:1で日本の撤兵を勧告した。総会は1933年2月リットン報告書に基づく対日勧告案を42:1で採択。日本は3月連盟脱退を通告した。
- 御家人 ^{ごけにん} 63
〔中世〕鎌倉時代に将軍と主従関係を結んだ武士。
〔近世〕江戸時代の将軍直属の下級家臣。旗本の下位。御目見得(将軍に謁見すること)はできず、ほとんど蔵米取。
- 御三家 ^{ごさんけ} 06・89・62
江戸幕府の親藩中の最高位。尾張家(藩祖:徳川義直)・紀伊家(藩祖:徳川頼宣)・水戸家(藩祖:徳川頼房)を指す。
- 後三年の役 ^{ごさんねんのやく} 63
1083～87年。清原氏の相続争いに陸奥守として赴任した源義家が介入、藤原清衡を助けて清原氏を金沢柵に滅ぼす。源氏の信望が東国に高まり武家の棟梁の地位を確立した。
- 国家総動員法 88
1938年4月、第1次近衛内閣が公布。戦時に際し、人的・物的資源の統制運用を議会の承認を得ずに勅令で行うことができるようにした法律。
- 米騒動 07・99・83
1918年8月、富山県での米価高騰に対する一漁村の主婦たちの蜂起を機に全国的に広がりをもせた米価引き下げ・廉売を要求した騒動。
- 坂下門外の変 09
1862年、将軍徳川家茂の妻に和宮(孝明天皇の妹)が迎えられたことに憤激した尊王攘夷論者が老中安藤信正を江戸城坂下門外で襲撃し負傷させた。
- 鎖国 ^{こく} 06・89・76・75・69・66・60
禁教と貿易統制を目的に日本人の海外渡航禁止と外国船来航規制を断行した。1641年オランダ人の長崎出島集住で完成。オランダと清国だけが日本との貿易を許された。
- 三管領 ^{さんかんれい} 89
室町幕府の重要職である管領に任じられる細川・斯波・畠山の3有力守護家を指す。
- 山東出兵 ^{さんとう} 93
1927～28年、国民革命軍の北伐に対し、田中義一内閣は在留日本人の生命・財産の保護を口実に、3度山東省に出兵した。

- サンフランシスコ平和条約 98・86・68
日本と連合国の講和条約。1951年9月8日締結。戦争終結・領土の範囲・賠償を規定。日本は主権を回復。
- シベリア出兵 99
ロシア革命への干渉戦争。1918年に出兵。しかしソビエト政権と人民の抵抗は強く、日本国内での反対世論も高まり1922年に撤兵。この出兵は、内外から激しい非難を受け何ら得るところなく失敗した。
- 島原の乱 09・05・01・74・58
1637～38年のキリシタン農民の一揆。天草領主寺沢氏、島原領主松倉氏らの圧政に反抗。天草四郎時貞を大将に3万余りの農民が原城址に立て籠もる。江戸幕府は12万人を動員して半年の攻囲で落城。籠城した農民は内通した1人を除き全員が殺された。
- 四天王 89
仏法守護の武神のこと。東方を持国天、西方を広目天、南方を増長天、北方を多聞天がそれぞれ守護する。
- 下関条約 00・95・93
1895年。日清戦争の講和条約。日本全権伊藤博文・陸奥宗光と清国全権李鴻章が下関で会談、調印。清は朝鮮の独立を認め、日本へ遼東半島・台湾・澎湖諸島の割譲、賠償金2億両（邦貨約3億1千万円）の支払いなどを承認した。
- 朱印状 92・78・62
戦国～江戸期の支配者の朱印を押した公文書。領地給付・国内交通・貿易免許・渡航許可などに関して発行された。
- 朱印船 78
幕府から渡航許可の朱印状を受けた公認貿易船。主に東南アジアで中国船と出会い、貿易を行った。最重要輸入品は中国産生糸、最重要輸出品は銀。
- 自由民権運動 89
明治前期、政府に対し民主主義的改革を要求した政治運動。天賦人権思想を基に自由民権論が叫ばれ、藩閥打破・国会開設などを要求。
- 守護・地頭 89・78
〔守護〕鎌倉幕府の軍事・警察権掌握のための地方機関。1185年、源義経追討を理由として国ごとに設置を公認された。初め惣追捕使と呼ばれ、やがて守護の語に固まる。有力御家人が任命された。
〔地頭〕1185年、源頼朝は諸国の公領・荘園に地頭の設置を公的に認められた。任務は土地管理・年貢および兵糧米の徴収・治安維持。

- 朱子学 06・71
南宋の朱熹が大成した儒学の一派。鎌倉時代に伝来。五山僧に普及し、林羅山の幕府登用により御用学問となる。寛政の改革により聖堂学問所で唯一講義が認められた。
- 貞永式目〔＝御成敗式目〕 01・91・89・88・61・55
1232年、北条泰時が定めた鎌倉幕府の基本法律 51 カ条。日本最初の武家法。頼朝以来の先例や武家社会の慣習を基準とした。
- 荘園整理令 88
荘園増加の防止・縮小のため出した法令。延喜の荘園整理令（902年醍醐天皇）・延久の荘園整理令（1069年後三条天皇）が有名。
- 承久の乱 01・86・63・61
1221年、後鳥羽上皇の鎌倉幕府打倒の兵乱。執権義時は泰時・時房に軍を授けて上皇方を破った。その結果、後鳥羽上皇ら 3 上皇の配流、後堀河天皇の擁立など、朝廷方の勢力が著しく失墜した。
- 心学 62
18 世紀初め、石田梅岩が始めた平易な庶民教育。
- 壬申の乱 05・01・88・86・64
671 年天智天皇が死去し、翌年大友皇子の近江朝廷側と吉野の大海人皇子とが皇位をめぐる争った内乱。大海人皇子が勝利し、後に天武天皇として即位。
- 新橋・横浜間鉄道開通 66
1872 年に開通した日本最初の鉄道。
- 神仏分離令 75
1868 年、政府は王政復古・祭政一致から神道国教化の方針をとり、その純化のため神仏混淆を禁止。神社を寺院から独立させた。
- 西南戦争 01・77・68・63
最大の士族反乱。1877 年、鹿児島県の私学校生徒を中心とした士族が西郷隆盛を擁して挙兵したが、政府軍に鎮圧された。徴兵軍の実力が認められ、士族の武力反抗に終止符が打たれ、言論による反抗の世となった。
- 関ヶ原の戦い 83
1600 年、豊臣政権の前途を憂えた石田三成ら西軍が徳川家康の東軍と戦って敗北。徳川の覇権確立。天下分け目の戦いと称する。
- 関所 92
江戸幕府は五街道などに治安維持を目的に多数設置。通行には関所手形が必要。箱根関で特に厳しく取り締まわれたのは「入鉄砲に出女」。

- 摂関政治〔摂政・関白〕…………… 89・88
 10～11世紀、平安中期、藤原氏が外戚として摂政・関白を独占し国政を左右した政治。
 11世紀前半の藤原道長・頼通親子が全盛期。
- 摂政…………… 73・64
 天皇が幼少または病気などの時、代わって政務を処理する代行者。本来は、聖徳太子にみられるように、皇族が任命されたが、藤原良房が清和天皇の即位した858年実質的にその任に当たり、866年正式に任命された。臣下の摂政では初めて。
- 尊王論…………… 72
 天皇尊崇の思想。幕末になると、攘夷論と結びつき、反幕府運動の政治思想となった。
- 対華21ヶ条の要求…………… 93・85
 1915年、第2次大隈内閣が中国における利権拡大のために袁世凱政府に要求。
- 大化改新…………… 77・74
 645年、中大兄皇子・中臣鎌足らによる蘇我氏打倒に始まる一連の政治改革。唐の律令制を基に天皇中心の中央集権国家建設を目標とした。
- 太閤検地…………… 88
 豊臣秀吉の行った検地。
- 大政奉還…………… 77・68
 將軍慶喜の政権返上。1867年10月土佐・安芸の両藩が慶喜に大政奉還を建白し、慶喜はこれを受けて上表。
- 大日本帝国憲法…………… 88・82・57
 1889年発布、1890～1947年施行。いわゆる明治憲法。ドイツ憲法に範をとり、伊藤博文らの起草で欽定憲法として発布。天皇を元首とし国民を臣民と呼ぶ主権在君制。近代代的立憲体制が整ったが巨大な天皇大権が実在した。
- 大宝律令…………… 88
 701年成立、施行。文武天皇の命で刑部親王らが編集。
- 治安維持法…………… 99・92・90・88
 1925年加藤内閣が普通選挙法成立直前に立法。国体の変革、私有財産の否認を目的とする結社を禁止する社会立法。普通選挙の実施と、日ソ国交樹立後の社会主義運動の活発化を見越しての社会主義運動を取り締まるのが目的。
- 治外法権…………… 70・63
 在留外国人の裁判はその本国の領事が行う権利。安政の五ヶ国条約で認められ、日本の国権を侵害した。1899年条約改正により撤廃。

- **地租改正** 04・91・89
 1873年の地租改正条例により実施された土地制度・課税制度の変革。地主が地価の3%（1877年に2.5%に変更）の地租を、豊凶による増減なく金納することになった。
- **徴兵令** 88・80
 1873年1月、徴兵告諭と全国徴兵の詔に基づき、国民皆兵の方針により満20歳以上の男子を兵籍に編入し兵役につかせる法令。大村益次郎の発案を山県有朋が継承し実現。
- **帝国議会** 90
 大日本帝国憲法下における最高立法機関。衆議院・貴族院の二院制。
- **鉄砲（伝来）** 92・89・78・77・65・63
 1543年ポルトガル人によって種子島に伝来。火縄銃で「種子島銃」とも呼ばれた。やがて九州・堺・紀伊・近江・近江国友などの鉄砲鍛冶により製造され普及。
- **天正遣欧使節** 06・92・61
 ヴァリニャーニの勧めで九州の大村・大友・有馬の3大名がローマ教皇に送った少年使節。伊東マンショ・千々石ミゲルの2人が正使、原マルチノ・中浦ジュリアンが副使。1582年出発し、90年帰国。
- **天保の改革** 95・58
 1841～43年、老中水野忠邦が行った幕政改革。
- **天竜寺船** 92・77・76・54
 足利尊氏が後醍醐天皇の冥福を祈るため天竜寺建立を企て、その造営費を得る目的で元に派遣した幕府公許の貿易船。
- **徳政一揆** 88
 徳政（債権・債務の破棄）の発令を要求する土一揆。高利貸資本の圧迫を多く受けた京都など畿内の都市周辺に多く発生。
- **長篠の戦い** 79
 1575年、三河長篠で信長・家康の連合軍が武田勝頼軍と戦った。足軽鉄砲隊の威力を発揮して武田軍の騎馬隊を大敗させた。
- **中先代の乱** 94
 1335年、北条高時の子時行が鎌倉幕府再興を図って起こした兵乱。一時鎌倉将軍府を陥れたが足利尊氏に鎮定される。
- **南蛮貿易** 92・88・79
 南蛮船（ポルトガル船が主）による貿易。主な輸出品は銀、主な輸入品は中国の生糸。
- **日英同盟** 00・85・68
 1902年締結。ロシアの南下策に対する同盟。北清事件が直接の契機。

- **日華事変** 68
 1937 年 7 月 7 日の^{ろこうきょう}廬溝橋事件に端を発した日中紛争。1945 年日本降伏まで継続。
- **日清戦争** 00・76・70・68・61
 1894～95 年。朝鮮の支配権をめぐる日清両国の衝突。^{こうし}甲午農民戦争を契機に、日本の朝鮮政府改革要求が清に拒否されて 8 月 1 日に宣戦布告。日本が勝利。下関で講和条約。
- **日ソ中立条約** 08
 1941 年に締結された日本とソ連との中立条約。締約国の一方が第 3 国と戦争の時、もう一方は中立を守る。日本側代表は松岡洋右。
- **日独伊三国同盟** 98
 ファシズムによる世界制覇を目指した日・独・伊の 3 国間の軍事同盟条約。1940 年調印。ヨーロッパとアジアにおける指導的地位の相互尊重、日中戦争およびヨーロッパ戦争に参加していない国からの攻撃に対する相互援助（ただしソ連を除く）を約した。
- **日米修好通商条約** 98・87・85・83・66・61
 1858 年締結。箱館の他、神奈川・長崎・新潟・兵庫の開港、江戸・大坂の開市、領事裁判権の設定、自由貿易の承認、協定関税などを規定。片務的不平等条約といわれる。
- **日米和親条約〔＝神奈川条約〕** 09・03・87・58
 1854 年、阿部正弘とペリーとの間で締結。内容は永世不朽の和親、下田・箱館の開港、^{さいはいこく}最恵国待遇の供与など。アメリカの他に、イギリス・ロシア・オランダとも同様の条約を締結。この時の将軍は 13 代の徳川家定。
- **日露戦争** 00・87・79・68
 1904～05 年。満州・韓国をめぐる日露両国の戦争。1904 年 2 月、日本軍の旅順攻撃に始まり、日本の勝利に終わる。1905 年、アメリカのポーツマスで講和会議。
- **二・二六事件** 83・80
 1936 年 2 月 26 日、陸軍皇道派青年将校を中心とするクーデター。齊藤実内大臣・高橋是清蔵相・渡辺錠太郎陸軍教育総監らを殺害。これ以後、皇道派は一掃され、軍部の発言権が強化される。
- **日本銀行設立** 68
 1882 年設立の中央銀行。松方大蔵卿の建議による。1885 年より^{だん}兌換銀行券を発行。
- **日本国憲法** 57
 1946 年 2 月、GHQ が^{しではら}幣原内閣に原案を提示。吉田内閣の下で議会審議。同年 11 月 3 日公布、1947 年 5 月 3 日施行。11 章 103 条。主権在民・象徴天皇制・戦争放棄・基本的人権の尊重などを定めた。改正は国会で発議のうえ、国民投票で決定する。

- 農地改革 92
1945 年 12 月の GHQ の指令による。寄生地主制と高率小作料から農民を解放し、自作農を創設する目的で 1946 年一次・二次と実施。
- 萩の乱 08
1876 年、前参議前原一誠に率いられた不平士族の反乱。政府軍によってあっけなく鎮圧され、前原は斬刑となった。
- 白村江の戦い 92
663 年、唐・新羅軍に滅亡させられた百済を救援するために朝鮮半島に赴いた日本の水軍が唐の水軍に大敗した戦い。百済の復興はならず、日本は半島の足場を失った。
- パリ講和会議 86
1919 年 6 月に行われた。この会議でドイツと連合国との講和条約(ヴェルサイユ条約)が結ばれた。日本全権は西園寺公望と牧野伸顕。
- 蛭社の獄 90・74・72
1839 年の洋学者弾圧事件。知識人の集まりである尚齒会(しやうしがい)の蘭学者グループ(蛭学社中)の渡辺華山・高野長英らが小笠原渡航計画などを理由に逮捕され、無実であることは判明したが、モリソン号事件を批判したとして処罰された。
- 武家諸法度 91・89・88
大名に対する根本法典。1615 年、秀忠の元和令を初めとし、家光の寛永令で整備された。城郭修築禁止などの政治規制。治安規定・礼儀規定を含み、違反者は厳罰。将軍代替わりごと(家継と慶喜は除く)に発した。
- 譜代大名 62
譜代大名は、関ヶ原の戦い以前から徳川氏に従い、大名に取り立てられた者。石高は少ないが要職につく。最高は彦根藩(井伊家)の 35 万石。幕末に約 150 家。
- 普通選挙法 99・90・88
納税額・財産・所得・教育程度などを選挙権の要件としない選挙法。日本では長い間の普通選挙運動ののち、1925 年加藤高明内閣の時、治安維持法と引替えに納税額制限を撤廃した普通選挙法が成立した。しかし、女性などの参政権を認めないなど不完全な普通選挙法であった。
- 仏教伝来 92・78
『日本書紀』には 552 年に百済の聖明王(せいめいおう)が仏像・経巻を献じたとあり、公的伝来の初めという。『上宮聖徳法王帝説』や『元興寺縁起』には 538 年と記されている。

- 不平等条約 63
 法権・関税自主権などで締結国相互が対等ではない条約。日本は日米和親条約で片務的な最恵国待遇を、修好通商条約で領事裁判権を認め、協定関税制を容認して関税自主権はなかった。これらの回復が明治時代の条約改正の重要課題であった。
- 踏絵 59
 キリシタン検出のため踏ませた聖画像。長崎で 1629 年頃開始。長崎奉行が管理。
- 文明開化 88・61・55
 明治初年の旧習打破・西洋文物の移植の風潮。国民の生活様式に変化が生じ、近代的思想・学問が生まれた。
- 文禄・慶長の役 61・60
 1592～96 年、1597～98 年の 2 度にわたって行われた豊臣秀吉の朝鮮出兵のこと。
- 平安京遷都 84・76・67
 桓武天皇が和気清麻呂の献言で 794 年に長岡京より遷都。
- 平城京遷都 74
 710 年、元明天皇により藤原京より遷都。
- 保安条例 89・68
 1887 年、反政府運動の弾圧法規。三大事件建白運動・大同団結運動など民権運動の高揚に際し、第 1 次伊藤内閣の山県内相が発布。民権派を 3 年間皇居外 3 里の地に追放。尾崎行雄、片岡健吉、中江兆民、星亨ら 570 名に適用。1898 年廃止。
- 保元の乱 05・74
 1156 年、崇徳上皇・後白河天皇の対立に、関白藤原忠通・弟頼長の対立がからみ、上皇が源為義らの武力を頼んで天皇方に挑戦、敗北した。院政の混乱と武士の進出を示す事件。
- 宝治合戦 08
 1247 年、執権北条時頼が三浦泰村一族を鎌倉で滅ぼした合戦。この結果、北条氏独裁体制が確立した。
- 戊辰戦争 87
 1868 年、鳥羽・伏見の戦いに始まり、官軍の東征、江戸開城、越後の長岡城攻防戦、奥羽越列藩同盟の中心会津若松攻撃などがあり、1869 年五稜郭の戦いで終了。
- ポツダム会談 86
 1945 年 7 月、ベルリン郊外のポツダムで、トルーマン・チャーチル・スターリンが、欧州の戦後処理と対日戦終結策を討議した。

- ポツダム宣言 92
英米中国の名で日本に降伏を勧告したもの。終戦の条件として、軍国主義の絶滅、領土制限、民主化促進などを列挙。日本政府は 1945 年 8 月 14 日これを受諾して無条件降伏。戦後、占領政策の基点となった。
- ポーツマス条約 03・00・98・95・93・61・54
1905 年 9 月、アメリカのポーツマスで調印した日露講和条約。日本全権小村寿太郎、ロシア全権ウィッテ。日本は韓国の指導権、ロシアの経営する東清鉄道の長春以南と付属利権、樺太南半分、関東州租借権、沿海州・カムチャツカ半島の漁業権などを得たが、賠償金は取れなかった。
- 本能寺の変 83
1582 年、明智光秀が主君織田信長を京都の本能寺に襲った事件。信長は自刃。
- 満州事変 93・85
1931～33 年、柳条湖での南満州爆破事件〔柳条湖事件〕を機に、東三省を武力占領し、満州国として独立させ、後、熱河省をも占領した。以後日中戦争から太平洋戦争を通算して十五年戦争ともいう。
- 民本主義 97・82
吉野作造提唱のデモクラシー思想。主権在民の民主主義とは一線を画し、主権在君の憲法体制下での民衆の政治参加を主張。政治の目的は民衆の福利にあり、政策決定は民衆の意向によるとして政党内閣制と普通選挙の実現を説いた。
- 明治維新 77・63
1868 年、薩長など西南雄藩の革新的下級武士の主導で江戸幕府を倒し、「百事御一新」を掲げて進められた政治変革。以後、殖産興業・富国強兵をスローガンとする近代化政策を推進。西南戦争後、自由民権運動を圧倒して、1889 年明治憲法による国家体制を確立。
- 明徳の乱 94
1391 年、山名氏清の反乱。將軍義満の討伐を受け、山名氏の勢力は一時衰えた。
- モリソン号事件 09
1837 年の事件。アメリカ船モリソン号が漂流民と通商交渉のために浦賀に来航したが砲撃を受けて退去。次に薩摩の山川港に停泊したがここでも砲撃を受け日本を離れた。
- 洋書輸入解禁 73・69・67・58
8 代將軍徳川吉宗は実学を奨励するために、洋書の禁を緩和し、キリスト教に関係のない書物の輸入を許した。

■ 楽市楽座 92・87・63・54

特権的な座や市場の独占を廃し、商品取引の拡大円滑化を図った政策。信長が美濃加納・安土山下町などに実施した後を受けて、秀吉も推進した。領主の城下町繁栄と商業統制の政策。

□ 六・三・三・四制教育実施 06・68

1947年3月に成立した学校教育法によって、六・三・三・四の単線型学校系列が規定され小・中学校9カ年が義務教育となった。同年、教育基本法も制定された。

□ 倭寇 82

13～16世紀。朝鮮・中国沿岸を略奪した武装商人団。私貿易の他、人間や米などを略奪した。

□ ロンドン会議 07

1930年1月～4月。統帥権干犯問題を引き起こし、浜口雄幸首相が狙撃される要因となった海軍軍縮会議。英・米・日・仏・伊の5カ国が参加。首席全権は若槻礼次郎。

□ ワシントン会議 86・84

1921年11月～22年2月。アメリカ大統領ハーディングの提唱で開かれた国際会議。海軍軍備制限と、極東・太平洋問題を協議した。日本側全権は海相加藤友三郎、貴族院議長徳川家達、駐米大使幣原喜重郎。

□ ワシントン海軍軍縮条約 09

1922年に締結された。主力艦の総トン数の比率をアメリカ5、イギリス5、日本3に定めた。この時の内閣は高橋是清内閣。

【3】《文化》

□ 悪人正機説 85

『歎異抄』に述べられた親鸞の往生説。絶対他力の阿弥陀仏の本願は善人よりも煩惱の多い悪人に対して深く、悪人の自覚ある者こそ往生が可能であることを説いた。

□ 飛鳥文化 02・87

7世紀前半、推古朝を中心とする時代の文化。斑鳩の法隆寺に代表的遺構・遺品が多い。中国の南北朝文化、朝鮮文化の影響が大きく、西域文化の影響も見られる。

□ 安土桃山文化 00・87

16世紀末～17世紀初頭の文化。信長・秀吉に代表される新興武家と、豪商の財力とを土台にした現実的・人間的な文化。城郭に代表される豪華さと、侘び茶の示す精神性、また南蛮人来航による異国文化の影響も見逃せない。

- 校倉造 ^{せうくらつくり} 90・60
柱を用いずに断面が台形や三角形の木材を井の字形に組み壁面を構成するもの。東大寺正倉院は断面が三角形の木材を用い、校倉造の最古、最大の例。
- 一本造 ^{いちぼく} 99・95・94
木造で頭部と胴体が一本の木材で作られているもの。肉が厚いので深く彫れる特徴がある。平安中期以降の寄木造と対をなす。
- 一遍上人絵伝 ^{いつべんしやうにんえでん} 87
鎌倉後期の絵巻物。一遍の生涯を描いたもの。『一遍聖絵』ともいう。円伊作。
- 浮世絵 ^{うきよえ} 99・72
庶民的風俗画。元禄の初め、菱川師宣 ^{ひしかわもろのぶ}により確立。遊女・役者などを題材とする。18世紀頃錦絵も開発され、美人画・役者絵・風景画が化政期に栄えた。
- 臼杵の磨崖仏 ^{うすきまがいはつ} 70
大分県臼杵市。凝灰岩に刻まれた62体の石仏群が谷をめぐって4ヶ所に存在。平安後期に大半が完成した日本の石仏の代表。
- エンタシス 73・62
南北朝様式建築の特徴のひとつで、柱が中央部で膨らんでいるもの。
- 王朝文学 ^{おうちやう} 61
平安時代、宮廷貴族を中心に生まれた文学。その中でも紫式部の『源氏物語』は王朝文学の最高傑作といわれている。
- 化政文化 ^{かせい} 87
文化・文政時代（1804～29）、江戸を中心に発達した町人文化。文化の爛熟期で洒落・通を好み、野暮 ^{やぼ}を笑うという刹那的・享樂的・退廢的な色彩が濃い。そのため、派手を卑しみ渋味や粋を重んじた。
- 狩野派 ^{かのう} 95
狩野正信・元信父子により成立した漢画系の画派。室町時代後半から江戸時代を通じて御用絵師として栄えた。
- 歌舞伎 ^{かぶき} 79・65・56
17世紀初め出雲阿国 ^{いずものおくに}以来、女歌舞伎・若衆歌舞伎・野郎歌舞伎と移り、女形 ^{おやま}の発達をもたらす。江戸時代に全盛。
- 鎌倉の大仏 90・79・69・66
正式名称は『高德院阿弥陀像』。奈良大仏に次ぐ巨大な仏像。

- 鎌倉文化 02・87
12世紀末～14世紀初めの文化で、京都の公家文化を基に新興の武士の生活の中から興った文化が加味され、さらに大陸から禅宗など宋・元文化の影響も加わった。
- 唐獅子図屏風 87・58
狩野永徳筆。雌雄一對の獅子を描いた金碧の六曲屏風。
- 唐様 90・86・56
〔書道〕平安初期、三筆に代表されるような唐風の力強い筆跡を特色とする書風。
〔建築〕鎌倉時代の禅院に多く用いられた宋からの輸入の建築様式。細かい材木を用いて整然とした美しさを出す。禅宗様ともいう。
- 枯山水 78・73・64・62・57
室町時代禅院の作庭様式。砂と石で水を用いずに山水自然の生命を表現。庭中で築いた小山や山形をした置き石を盆山という。
- 元興寺薬師如来像 94
9世紀。木造。檜の一木造。量感に富み、神秘的面相を持つ。両脚の前面を覆う衣は長卵形の面を作り、厚味のある衣は翻波式の髪を刻む。
- 乾漆像 00・94
漆で固めて造った像。
- 観心寺如意輪観音像 94・69
9世紀。木像。平安前期密教彫刻の代表作で、華麗な彩色と豊満な肢体は女性的表現を強調。
- 漢委奴国王印 92・75
1787年、現在の福岡県志賀島で発見。後漢の光武帝が奴国王に与えたと『後漢書』に記されている印綬と推定される。
- 北山文化 95
15世紀初頭の文化。足利義満による南北朝合体・幕政確立を背景に、武家文化が公家文化を摂取して発展する基礎を得た。日明貿易や土倉・酒屋の商人層との結びつきなどで新しい要素を加えている。
- 旧石器文化 75
更新世で、打製石器・骨角器は使用したが、土器の製作、家畜の飼育は知らず、狩猟・漁撈の採集生活をしていた時代の文化。
- 華嚴宗 03
東大寺を総本山とする南都六宗の一つ。華嚴経を經典とする。

- 元禄文化 87・58
元禄時代を中心とする江戸時代前期の文化。遊里の事情に通じた粋な気性を尊ぶ上方豪商や武士を主な担い手とし、人間的で華麗な町人文化が発達した。
- 興福寺八部衆像 94
734 年造立。脱乾漆像。
- 興福寺十大弟子像 94
734 年造立。脱乾漆像。
- 興福寺仏頭 08・94
685 年造立。平安末、興福寺僧徒が飛鳥の山田寺から奪取した丈六の薬師三尊の頭部と推定される。童顔の明るい顔は白鳳の精神を示す。
- 広隆寺半跏思惟像 09・94・63
木像。603 年聖徳太子が秦河勝に賜った朝鮮伝来のものと伝えられ、韓国に類似する像がある。中宮寺の像とともに新羅様ともいう。
- 古学派 96
朱子学・陽明学などの解釈を排し、直接原典に当たって、孔孟の真意を汲み取ろうとする儒学一派。山鹿素行・伊藤仁斎・荻生徂徠などが属する。
- 国風文化〔＝和風文化、藤原文化〕 95・87・61・57
それまでの唐風文化消化の上に遣唐使廃止の影響もあって日本風〔国風〕の文化が生まれた、摂関時代を中心とする文化。かな文学の発達と優雅な貴族文化、浄土教の流行が特徴的。
- 五山文化 95
南北朝～室町時代、五山・十刹に拠った禅僧たちが中心となって起きた文化。また、ここで生まれた文学を五山文学と呼ぶ。
- 古墳 61
3 世紀末～7 世紀初頭に瀬戸内海沿岸から近畿にかけて発生した有力豪族などの墓。
- 金銅像 94
銅像の表面に鍍金を施した像で、飛鳥・白鳳時代に多い。奈良時代は塑像・乾漆像、平安・鎌倉時代は木像が全盛。
- 猿楽・田楽 80・56
〔猿楽〕古代・中世の芸能。滑稽を主とした雑芸・歌曲。
〔田楽〕平安中期以降流行した田植祭の祭礼神事芸能で、公家にも流行。
- 山水長巻 87
水墨画で有名な雪舟の 1486 年の作品。『四季山水図巻』とも呼ばれる。

- **三筆** さんびつ 89
 平安初期、唐風の力強い筆跡を特色とする嵯峨天皇・空海・橘逸勢をいう。
- **時宗** じしゅう 67
 開祖は一遍。平生を臨終と心得て念仏する臨命終時宗の意で、信心の有無を問わず唱えるだけで全ての人が救われると説く。
- **朱子学** しゅうしがく 06・96
 儒学一派。鎌倉時代に伝来。五山僧に普及し、林羅山の幕府登用により御用学問となる。寛政異学の禁により、聖堂学問所において唯一講義が認められた。
- **書院造** しよゐんづくり 95・90・82・61・57
 室町時代に成立した住宅建築様式。禅院の書斎の影響を受ける。現代日本住宅の源。
- **正倉院鳥毛立女屏風** ちやうもうりゅうじよ 87・63
 8世紀。天平文化を代表する絵画。6枚あるが、いずれも樹下に唐衣装の美女を配する樹下美人図。
- **浄土教** じやうどきやう 71
 10世紀以降発達した阿弥陀浄土への往生を願う信仰。
- **浄土宗** じやうど 78・74・67
 開祖は法然。従来の貴族風の浄土教から脱皮、専修念仏の教えで、貴族にも武士にも普及した。
- **浄土真宗** しんじやう 85・77・67
 開祖は親鸞。一向宗ともいう。絶対他力を強調し、人々はすべて弥陀の本願にすがれば極楽往生できると唱えた。武士・農民層に普及、室町時代に発達した。
- **障壁画** しやうへきが 68・62・61
 襖や壁・障子に描かれた絵。桃山時代城郭建築の内部を飾り、狩野派の画人が健筆を振るった。
- **真言宗** しんごんしやう 67
 空海が中国から伝え、開宗した密教宗派。総本山は金剛峯寺。
- **寝殿造** しんてんづくり 95・78・73・61・57
 藤原時代の貴族の住宅。寝殿の南庭には池を掘り築山を設け、中島をつくり、池水は寝殿の東から遣水で引いた。建物は白木造・檜皮葺など日本風。
- **神護寺金堂薬師如来像** じんご 94
 8世紀末。木像。檜の一木彫刻。金堂の本尊で顔の表現に威圧感がある。堂々たる体軀を持ち力強さに富む。

- 新薬師寺十二神将像 94
 塑像群。新薬師寺は光明皇后発願の華嚴宗の寺。本尊を中心にした壇上に日本最古の十二神将像が並ぶ。怒りの面相で有名。
- 水墨画 95・93・92・77
 墨の濃淡と強弱の描線による東洋独特の絵。禅僧により宋・元から伝えられ、初期の禅の精神を表現する宗教画から風景の山水画へ発達。
- 禅宗 64・57
 6世紀頃中国で始まった、坐禅により悟りを開く自力中心の仏教宗派。鎌倉時代に臨済宗・曹洞宗が、江戸時代に黄檗宗が伝来した。
- 曹洞宗 81・77・67
 1227年、道元が南宋から伝えた禅宗の一派。坐禅そのものが仏法であるとして只管打坐を説き、臨済宗と異なり公案を用いない。
- 塑像 94
 粘土で造った像。インドから伝えられ中国で発達、写実的表現を尊ぶ。8世紀に流行。東大寺戒壇院の四天王像。
- 濃絵 00・95・61
 障壁画には水墨画と金碧濃彩画があり、後者を濃絵という。狩野派画人がよく描いた。
- 陀羅尼 66
 梵文の呪文を翻訳しないで、そのまま読誦するもの。一字一句に無辺の意味を蔵し、これを誦すればもろもろの障害を除いて種々の功德を受けるといわれる。一般に、短いものを真言、長いものを陀羅尼という。
- 中宮寺天寿国繡帳 63
 聖徳太子の死後、太子の妃が太子の天寿国にある姿を写した刺繍。
- 中宮寺半跏思惟像 94
 木像。片足を他の足の股の上に組み（半跏）、手に頬を当てて思惟している。南朝形式に近い。
- 町人文化 61
 江戸時代の元禄文化・化政文化のような町人を中心として栄えた大衆文化。
- 大仏様 [=大仏様] 90
 東大寺再建に重源が採用した様式。大仏様ともいう。
- 天台宗 02・67・64・57
 805年最澄が唐から日本に伝えた宗教。比叡山延暦寺を創立して本山とした。

- 天平文化 00・87・63・57
 8世紀の聖武朝の天平時代を中心とした奈良時代の文化の総称。美術は天平美術。唐文化を初め西方各地の文化の影響を受ける。律令国家最盛期を反映して豪壮雄大、また貴族的で仏教的色彩の濃い文化である。
- 東大寺大仏 75・71・66
 盧舎那大仏。743年聖武天皇が大仏造立の詔を出し、752年開眼供養した。
- 東大寺大仏の頭部 69・66
 1180年平重衡の南都焼き打ちや1567年松永久秀の乱によって大仏は焼け落ちた。現存している大仏は17世紀初頭に復元されたもの。
- 東大寺南大門金剛力士像 72
 阿形・吽形の仁王像。1203年造立。運慶・快慶の合作による寄木造の傑作。
- 東大寺不空絹索観音像 65
 脱乾漆像。法華堂〔三月堂〕本尊。
- 東大寺法華堂日光菩薩・月光菩薩像 94・65
 塑像。日光（向かって右）は法衣、月光は唐服をつけ、静かに合掌した敬虔な姿に写実的作風がみえる。
- 東大寺法華堂執金剛神像 94
 塑像。奈良時代。秘仏で12月16日開扉。皮の甲冑に身を固め金剛杵を執り仏敵を叱咤。華麗な彩色も残存。
- 銅版画 80・62
 絵画を銅板に刻んで印刷したもの。直接銅板に刀で刻したものと、薬品で腐食させたエッチングとがある。後者は桃山時代に輸入されたが中絶し、18世紀末司馬江漢が再び始めた。
- 南学 96
 土佐に興った朱子学の一派。海南学派ともいう。南村梅軒を祖とし、谷時中が儒学を仏説から分離して確立。野中兼山・山崎闇斎に伝わる。
- 南蛮屏風 56
 南蛮人との交易や風俗を主題とした風俗画屏風。狩野派の画家が多く描き日本画風。現存約60。

- 南蛮文化 61
南蛮人の伝えた南欧文化。主にポルトガル系・キリスト教的文化で、思想・学問から天文・地理・医学・美術・出版などにわたる。
- 似絵 61・60
鎌倉時代に発達した大和絵の肖像画。実際の人物を写實的に写し、個性まで表現した。
- 唐招提寺鑑真像 94・61
脱乾漆像。奈良後期。御影堂に安置され6月6日開扉。鑑真の慈悲、高邁な精神をよく表現する肖像彫刻の傑作。
- 能（楽） 83・80・79・62・57・56
もと社寺の祭礼に奉仕する猿楽能に、民間に発達した田楽を取り入れ、宗教的芸能から庶民的な舞台芸術に発達。さらに観阿弥・世阿弥父子により芸術的な演劇に完成。
- 埴輪 59
素焼の焼物で、円筒・形象の2種に大別され、古墳の表土に列をなして並べ飾られた。製作動機は土留め・器台形土器の発展・葬列模倣・殉死代用など諸説がある。
- 東山文化 00・95・87
15世紀後半の文化。応仁の乱を避けて趣味的生活を営む将軍足利義政を中心に、禅宗・明文化の影響を受けた枯淡幽玄の芸術が開花した。
- 風神雷神図屏風 09
俵屋宗達筆。擬人化された風神雷神がダイナミックに楽しげに描かれている。
- 富嶽三十六景 87
葛飾北斎の風景画。文政年間の作で、富士を東海道と甲州から眺めた46枚の図。
- 武家造 62
武士の住宅建築様式。矢倉・物見櫓などの防備施設を備える。寝殿造の簡素化したもの。
- 文人画〔＝南画〕 95・62・57
文人・学者が余技として描いた絵。南画とも呼ばれ、18世紀後半盛んとなる。化政期に最盛期を迎える。
- 平家納経 86・62
1164年、平清盛ら一門が繁栄御礼のため、厳島神社に奉納した装飾経。
- 平等院鳳凰堂阿弥陀像 06・94・79・71・61・55
11世紀。定朝作の確証のある唯一の作品。優雅さが特色。寄木造。
- 法界寺阿弥陀像 94
11世紀。鳳凰堂の阿弥陀像とほぼ同時期。定朝様式。和様の典雅さが特色。

- 法隆寺金堂壁画 02
聖徳太子建立の法隆寺金堂内部に描かれていたが、1949 年の火災で焼損。
- 法隆寺金堂釈迦三尊像 06・94・69
金銅像。北魏様式の飛鳥仏の典型。鞍作鳥の代表作。
- 法隆寺玉虫厨子 63
宮殿風の厨子は飛鳥建築を偲ばせ、須弥座周囲の浮彫の飾り金具の下に 2,563 枚の玉虫の羽を伏せてあった。
- 法華宗 [=日蓮宗] 77・67
開祖は日蓮。法華經の功德を仏教の真髓とし、題目を唱えることによって人は即身成仏、世界は浄土となると説く。初め東国地方の武士などに、室町時代に京都の商工業者に支持された。
- 室生寺弥勒堂釈迦如来像 94
9 世紀末。木像。貞観彫刻の美しさを示す典型的な像。特に着衣は鋭い稜角を持った翻波式で美しい。
- 蒙古襲来絵詞 02
御家人竹崎季長が、元寇の戦いで奮戦した自分の姿を描かせたもので、当時の日本の武士と元軍の戦い方がうかがえる貴重な資料。
- 木簡 83
文字を墨書した木札。地方諸国の貢進物や官庁間の事務連絡に使用。平城宮跡発掘中 1961 年初めて発見され、以後藤原宮跡・地方国衙（諸国の役所）などで発見。
- 薬師寺薬師三尊像 66
金銅像。飛鳥仏の硬さを脱し、変化ある姿勢で柔らかに表現。台座の唐草文様などには西アジアの影響がみられる。
- 薬師寺東院堂聖観音像 94
金銅像。技巧に優れ、飛鳥仏の外面性から天平仏の内面性の推移を示す。
- 大和絵 99・95
藤原時代、唐絵に対し日本的風物を主題とした絵画。その大部分は、季節の推移を主題とした四季絵が占める。その手法は絵巻に発揮され、土佐派・住吉派が生まれて日本画の源流となる。
- 陽明学 96
明の王陽明が創始した儒学の一派。朱子学と対立。中江藤樹が唱道し、熊沢蕃山・大塩平八郎はその学統。時世批判の傾向が強く、幕府に圧迫された。

- 寄木造 99・95・94
 平安中期以後の仏像彫刻法。2材以上の材を寄り合わせ、多くの工人で部分を製作し、全体をまとめる技法。一本造に対する語。
- 臨済宗 81・67
 12世紀末、榮西が南宋から伝えた禅宗の一派。鎌倉・室町幕府の保護を受けて、京・鎌倉の五山を中心に発達した。坐禅の時公案を解決して悟りに達する。
- 連歌 00・99・77・62
 和歌の上の句と下の句とを唱和する文芸。室町時代に大成。
- 六歌仙 77・74
 平安前期の和歌の上手6人の総称。在原業平・僧正遍昭・喜撰・小野小町・文屋康秀・大友黒主。
- 侘茶 81・61
 豪華な書院の茶に対して草庵の茶をいう。簡素な小座敷・道具立てで、精神的深さを味わうもの。村田珠光に始まり、茶道として大成。
- 律宗 03・92
 南都六宗のひとつ。戒律を自ら実践することが成仏の因と説く宗派。天武天皇時代に伝来したが、鑑真の渡来で隆盛。

【4】《寺院》

- 石山本願寺 93・66
 蓮如が1496年大坂に建立した本願寺別院石山坊。その後山科本願寺が焼亡したので本寺となった。1570～80年に織田信長に攻められ、ついに敗れた。
- 永平寺 07・91・85・81・76・67・62
 福井県にある曹洞宗大本山。道元が開山。
- 円覚寺（舍利殿）..... 90・86・79・63
 1282年北条時宗創建。開山は無学祖元。鎌倉五山第2位。また、舍利殿は禅宗様〔唐様〕の代表的遺構。
- 延暦寺 93・91・79・75・67・63
 滋賀県大津市比叡山にある。785年最澄が初めて草庵を結び、788年一乗止観院（比叡山寺）を創立。805年帰国後、天台宗を開宗した。823年、最澄の死後延暦寺の勅額を賜る。以後、仏教教学の中心で、南都（興福寺）と並び北嶺と称された。
- 元興寺 94
 奈良市にある。飛鳥寺〔法興寺〕を移したもの。

- 観心寺 94
大阪府河内長野市にある真言宗の寺。役小角えんのおずめの創立と伝わる。
- 金閣〔=鹿苑寺〕 09・05・95・64・58・56
足利義満が1397年京都北山に営んだ3層の楼閣。1950年放火により焼失、55年再建。
- 銀閣〔=慈照寺〕 01・95・90・84・71・69・65・64・61・58・57
足利義政が1489年東山山荘に建てた2層の楼閣。
- 銀閣寺東求堂 57
足利義政の営んだ東山山荘の持仏堂。書院造。
- 久遠寺 67
山梨県身延山にある法華宗の総本山。
- 建長寺 04・91・90・67・62
1253年北条時頼創建。開山蘭溪道隆らんけいどうりゅう。鎌倉五山第1位。
- 建仁寺 93・89
1202年、源頼家の援助で明庵栄西みやうあんようさいが創建開山。京都五山第3位。
- 興福寺 94・90・81・67
藤原鎌足の私寺山階寺が前身で、藤原不比等により奈良に移され、以後藤原氏の氏寺として栄えた。法相宗の大本山として南都教学の中心となり、中世には大和国守護を兼ね多くの座を支配していて俗界にも君臨。
- 広隆寺 94
603年、秦河勝が京都の太秦うづまさに建立したものという。秦氏の氏寺で、半跏思惟像で有名。
- 金剛峯寺 75・62
和歌山県北東部、高野町にある。真言宗総本山。816年空海の創立。院政期の白河・鳥羽両法皇を初め、朝廷貴族の信仰を得て、多数の荘園・僧兵を擁した。
- 西大寺 67
奈良市にある。765年称徳天皇の創建。東大寺と並ぶ南都の大寺院。
- 西芳寺〔=苔寺〕 64・63・58・57
京都市にある。夢窓疎石むそうそせきの作庭で有名。上段が枯山水で下段は回遊式池泉。石組の構成は他の模範となる。
- 四天王寺 73
大阪市所在。略称天王寺。聖徳太子が物部守屋もののべもりやとの戦いで四天王に祈り、勝利を得たので創建したという。四天王寺式伽藍配置。
- 神護寺 94
京都市にある。神護寺薬師如来像で有名。

- 新薬師寺 94
奈良市にある。新薬師寺十二神将象・新薬師寺薬師如来像で有名。
- 瑞巖寺 56
宮城県中東部、松島町にある臨済宗の寺。桃山文化を代表する貴重な遺構。
- 清浄光寺 08・67
神奈川県藤沢市にある時宗総本山。国宝の一遍上人絵伝を所有している。
- 大徳寺 06・81・61
京都市にある。1324年赤松則村が創建。初めに南禅寺と並んで五山の上位であったが、
將軍義満の下で十刹となり、後にこれを辞した。一休宗純を住持として特異の文化を生む。
- 大徳寺大仙院 64
多数の石組みと白砂で構成された枯山水の庭園で有名。
- 大徳寺唐門 68
聚楽第の遺構。安土・桃山時代の様式を示す代表的遺構。
- 知恩院 67
法然の往生の地。京都東山に建立された浄土宗（鎮西派）総本山の寺院。
- 中宮寺 94
聖徳太子が母の宮跡を寺にしたもの。法隆寺に隣接する尼寺で、半跏思惟像・
天寿国曼陀羅繡帳が有名。
- 中尊寺 05・91・85・61・58
岩手県中南部、平泉町にある天台宗の寺。奥州藤原氏の清衡が建立したもの。
- 中尊寺金色堂 09・02・86・69・63
1124年藤原清衡が陸奥平泉に創建。光堂ともいう。単層、宝形造。須弥壇の下に清衡・
基衡・秀衡3代のミイラを納める。
- 天竜寺 04・89・64・61
1339年足利尊氏の創建。開山夢窓疎石、京都五山第1位。
- 東寺 67
教王護国寺の通称。京都市にある古義真言宗東寺派の総本山。823年嵯峨天皇から空
海に勅賜。五重塔・不動明王像などが有名。
- 唐招提寺 94・91・84・62・61
奈良市にある。759年鑑真の創建。金堂は天平建築の遺構、また講堂は平城宮の朝集
殿を移したもので奈良時代の宮殿建築唯一の遺構。

- 東大寺^{とうだい} 67・61
奈良市にある。総国分寺と称され、仏教の鎮護国家の思想を具現。伽藍^{がらん}は大仏鑄造後789年までにはほぼ完成。三戒壇のひとつ。広大な莊園を私有。1180年と1567年の2回兵火で焼失。現在の大仏殿は江戸時代の再建。華嚴宗大本山。
- 東大寺三月堂〔＝法華堂〕 94・65・63
750年頃建立。毎年3月に法華会^{ほっけえ}が行われるのでこの名がある。寄棟造^{よせむねづくり}の正堂が天平建築。礼堂は鎌倉建築。
- 東大寺転害門^{てがい} 69
760年頃建立。東大寺創建当時の現存する唯一の門。
- 東大寺南大門 06・90・72・56
大仏様の代表的建造物。
- 西本願寺^{にしほんがん} 68
浄土真宗本願寺派の総本山。1570～80年の織田信長による石山本願寺攻めを受ける。その後1602年西本願寺と東本願寺に分裂。唐門^{からもん}は伏見城の遺構。飛雲閣は聚楽第の遺構と伝えられる。
- 西本願寺の唐門^{からもん}と書院 68
豊臣秀吉晩年の邸宅城郭である伏見城の遺構といわれる。
- 西本願寺飛雲閣^{ひうんかく} 08・90・68・65
3層の楼閣で、軽快で変化と調和がよく保たれている。聚楽第の遺構と伝えられる。
- 東本願寺^{ひがしほんがん} 82・67
浄土真宗大谷派の本山。1602年西本願寺と東本願寺に分裂。
- 平等院鳳凰堂^{びやうどういほうおうどう} ... 03・94・90・83・79・76・71・69・66・63・61・55
1053年建立。藤原頼通の宇治の別荘を阿弥陀堂にしたもの。定朝^{じやうちゆう}の『阿弥陀如来像』、欄間の51体の雲中供養仏、壁画などが有名。
- 法界寺^{ほうかい} 94
京都南郊醍醐日野の阿弥陀堂。11世紀中頃日野資業^{すけなり}が建立。『阿弥陀如来像』や壁画で有名。
- 法興寺〔＝飛鳥寺〕^{ほうこう} 73
蘇我馬子^{そがのうまこ}が飛鳥の地に建立した寺。後に平城京に移り元興寺となる。
- 法隆寺^{ほうりゅう} 94・73・65
7世紀初めに大和の斑鳩^{いかるが}に聖徳太子が建立した寺院。斑鳩寺ともいう。金堂・五重塔など法隆寺式伽藍配置の西院と、夢殿・伝法堂の東院に分かれる。

- 法隆寺金堂 94・66
西院の中心で、7世紀の建造。柱のエンタシスなど南北朝様式を特色とする。鞍作鳥の釈迦三尊像や焼失した壁画は著名。五重塔・中門・歩廊と共に旧山田寺廻廊遺材に続く世界最古の木造建築。
- 万福寺 06・62・54
黄檗宗の本山。隠元が宇治の地に開創。中国様式の万福寺伽藍配置で有名。
- 三井寺 75
園城寺の俗称。滋賀県大津市にある天台宗寺門派総本山。858年円珍が再興。その後延暦寺内の円仁門徒と円珍門徒の対立から分離。延暦寺を山門派、園城寺を寺門派と呼ぶ。また園城寺不動明王像〔黄不動〕でも有名。
- 室生寺 94・61
奈良県北東部、室生村にある。真言宗。女人高野と呼ばれ、山岳寺院の自由な伽藍配置を示している。
- 室生寺五重塔 63
平安初期の建立。『弘法大師一夜造りの塔』と呼ばれる端麗な小塔。屋根は檜皮葺で、寝殿造への移行を示す。
- 薬師寺東塔 77
衰階つきの三重塔。リズムある姿で「凍れる音楽」の異称がある。
- 立石寺〔=山寺〕 89・84
山形市大字山寺にある天台宗の寺。延暦寺の別院。
- 竜安寺 02・64・61・58・57
枯山水の代表的石庭（大小15個の岩石を配している）があることで知られる。
- 輪王寺 86・66
東照宮で知られる日光の二社一寺一院のうち、一寺に相当する。

【5】《建物・遺跡》

- 足利学校 85
下野国足利（現栃木県足利市）にある学校。鎌倉時代に足利氏が一族の学校として建てたが、上杉憲実が再興。戦国時代、「坂東の大学」と称される。
- 安土城（址） 93・85・68
1576年、織田信長が近江に築いた最初の近世的城郭。1582年本能寺の変後焼失。
- 熱田神宮 04
愛知県名古屋市。三種の神器の一つである草薙剣を祭神とする。

- 出雲大社 86
島根県出雲市。国譲り神話では、^{おおくにぬしのみこと}大国主命の国土献上の代償として朝廷が贈った宮殿という。大社造の本殿は古代建築様式を伝えて貴重。
- 伊勢神宮 05
三重県伊勢市。20年ごとに社殿を造り替える式年遷宮^{せんぐう}の制を残す。
- 一乗谷 03
福井県。越前の守護代・守護となった朝倉孝景^{たかかげ}が本拠地とした城下町で、約1.4kmの谷間に武士の屋敷などが配された。その一部が現在復元されている。特別史跡。
- 厳島神社 06・05・86・85・73・62
広島湾の厳島にある。平清盛の崇敬を受け、平氏の氏神のようになった。平家納経は国宝。
- 犬山城 71
^{いぬやま}現存する城郭建築のひとつ。天守閣は日本で最も古いもののひとつ。愛知県北西部にあり、木曾川に臨む。
- 岩宿遺跡 00・92
^{いわじゅく}群馬県中南部にある旧石器文化の遺跡。1946年、^{あいざわただひろ}相沢忠洋が関東ローム層中の石器を発見。
- 宇佐神宮 04・01
大分県宇佐市にある。全国八幡宮の総社。奈良時代に僧道鏡が天皇位を得る託宣を求めたが、使者和気清麻呂^{わけのきよまさろ}によって否定された事件で有名。
- 大坂城 71・68
^{おおさか}石山本願寺の旧地に秀吉が1583年に築城。難攻不落の名城といわれたが、1615年大坂の陣で落城。
- 大森貝塚 06・00・96・66・59
^{おおもり}東京都にある。縄文後期の貝塚。1877年アメリカ人モースによって日本最初の発掘調査が行われた貝塚で、日本考古学発祥の地。
- 岡山城 71
^{おかやま}岡山県岡山市旭川の河畔にある城。江戸時代には池田氏が城主。
- 小田原城 71・57
^{おだわら}神奈川県小田原市にある。古くは鎌倉時代、小早川氏の山城に始まり、大森氏が小峯山に築城。のちに北条早雲^{ほうじょうそううん}に奪われ、後北条氏の本拠地となる。

- オランダ商館 92・90
1609年、平戸に建設。41年に長崎出島に移り、1855年まで215年間存続して長崎貿易を展開した。
- 春日大社 81・62
奈良市にある藤原氏の氏神。平安末、興福寺の支配下に入り僧兵が神木を擁して横暴。
- 桂離宮 02
京都市にある。数寄屋造・回遊式庭園の代表的傑作。中央の池の周りに書院群・茶屋などが配されている。後陽成天皇の弟の八条宮智仁親王の代に造営が始められた。
- 金沢文庫 06・01・82・54
鎌倉中期、北条実時が武蔵国金沢称名寺（現在の横浜市）内に開設した私設図書館。
- 上賀茂神社 08
京都市にある。京都三大祭りのひとつ、葵祭の祭事で知られる。
- 亀ヶ岡遺跡 92
縄文晩期に東日本に広まった進んだ技法の土器である亀ヶ岡式土器が発掘された青森県にある遺跡。
- 唐古・鍵遺跡 00
奈良盆地最大の弥生時代の集落跡で、鋤・鍬などの木製農具と共に、楼閣や船の絵を描いた土器片なども出土している。
- 熊本城 71・70
熊本市内にある。近世名城のひとつ。1601年加藤清正が大規模な築城を行う。加藤氏除封後は代々細川氏が城主。銀杏城とも呼ばれる。西南戦争で攻城戦が行われた。
- 古義堂 96
伊藤仁斎が京都堀川に開いた塾。
- 小倉城 71
福岡県北九州市。
- 五稜郭〔戊辰戦争最北の戦場〕 87・83・81・76・65・58・57
ヨーロッパ風の星形城塞。戊辰戦争最後の戦場。
- 西都原遺跡 99・92
宮崎県中部の西都市に広がる西都原の中に展開する古墳群で、特別史跡の指定を受けている。その数は300を優に超え、4～7世紀に造られたものといわれている。
- 紫香楽宮 03・96
滋賀県南部。聖武天皇は743年にこの地に大仏造営を発願、745年に都と定めたが、人心服さず、同年平城宮に戻った。多数の礎石が現存する。

- 聚楽第 68
秀吉が大内裏跡に造営した城郭風邸宅。
- 首里城 06
かつての琉球王国の王宮。太平洋戦争で焼失したが、復元された。世界遺産。
- 正倉院 61・57
正倉院宝庫内に、聖武天皇の遺宝数千点を擁する。校倉造最古かつ最大の例。
- 関ヶ原 88・76
1600 年関ヶ原の戦いが行われた古戦場（現在の岐阜県にある）。この戦いで大勝した徳川家康が全国の支配権を確立した。
- 大猷院（廟） 86・66
東照宮で知られる日光の二社一寺一院のうち、一院に相当する。江戸幕府 3 代将軍家光の廟所。
- 多賀城 06・85・76・65
宮城県多賀城市。律令政府の東北経営の政庁。陸奥の国府と鎮守府が置かれ、蝦夷経営の根拠地。
- 高松塚古墳 98・96
奈良県明日香村。1972 年に発見された高松塚壁画で有名。特別史跡。
- 大宰府 85・76
九州に置かれていた大和政権の出先機関で「遠の朝廷」とも呼ばれた。菅原道真が左遷されたことで知られる。
- 鶴ヶ岡八幡宮 90
1063 年、前九年の役後、源頼義が山城の石清水八幡宮を鎌倉に勧請。源氏・鎌倉幕府の守護神として尊崇された。
- 藤樹書院 96
中江藤樹が郷里近江小川村に開いた私塾。
- 登呂 99・92・85・62・58・54
静岡県南部にある弥生後期の遺跡。水田跡が発掘された。
- 名古屋城 71
名古屋市中区にある城。初代徳川義直以来 16 代にわたる尾張徳川氏の居城。
- 名護屋（城跡） 83・70・58
1592～96 年、文禄の役の際、秀吉が指揮した場所。肥前（佐賀県）にある。

- 鳴滝塾 07・90
シーボルトが1824年長崎郊外鳴滝村に開いた医学塾。医学・博物学の講義と診察を行い、門下から伊東玄朴・高野長英らの俊才を出す。
- 日光東照宮 09・05・86・78・76・71・66・65
1634～36年栃木県日光に造築される。徳川家康を祀る。霊廟建築・権現造の代表的遺構で、特に極彩色の彫刻で飾る陽明門が有名。
- 大仙古墳〔＝仁徳天皇陵〕 98・85・76・74・71・69・66
大阪府堺市にあり、百舌鳥古墳群の中心。日本最大の前方後円墳で5世紀くらいの築造。
- 原城跡 77
島原半島突端の、もと有馬氏の居城。島原の乱の際は、この廃城に一揆勢が籠城した。
- 彦根城 71
滋賀県彦根市にある。歴代城主は井伊氏。国宝。
- 二荒山神社 86・66
東照宮で知られる日光の二社一寺一院のうち、二社の一つ。他の一社が日光東照宮。
- 姫路城〔＝白鷺城〕 01・86・71・69・57
池田輝政の居城として築城。兵庫県播磨平野の小丘陵にある代表的な平城。5層7重の大手守を中心に3小天守が渡櫓で結ばれた連立式天守閣の遺構。国宝。世界遺産。
- 弘前城跡 84
弘前城は天守、櫓、城門などが保存され、城跡は特別史跡の指定を受けている。
- 伏見（桃山）城 76・68
現在の京都市に造られた豊臣秀吉晩年の邸宅城郭。1598年、秀吉はここで亡くなった。
- 平城京（遺跡） 05・99・85
710～784。元明天皇の時代に藤原京から遷都。唐の長安に倣う。
- 松本城 71
長野県松本市にある平城。勾配のゆるい石垣の上に築かれた5層6階の天守閣は、現存する天守閣のうち規模の大きいものの一つ。国宝。
- 八幡製鉄所 06
1897年に設立。1901年に操業開始した官営の軍需工場で、日露戦争後には生産を軌道に乗せた。
- 湯島聖堂 03
文京区湯島にある5代将軍徳川綱吉の時に建てられた孔子を祀る廟。現在の建物は1935年の再建。

- 吉野ヶ里遺跡 00・99・97・96・92
佐賀県東部の台地上にある日本屈指の大環濠集落。

- 鹿鳴館 03・65・62
東京日比谷にあった官営国際社交場。1883 年竣工。英国人コンドルの設計。音楽会・舞踏会などを開催。当時を鹿鳴館時代と呼ぶ。

【6】《書物》

- 吾妻鏡 66
1180 年の源頼政の挙兵以後 1226 年までの諸事件を日記体に記した鎌倉幕府の記録。鎌倉時代の最も重要な資料。

- 一握の砂 08
石川啄木の著作で、三行分けの散文的スタイルで知られる歌集。

- 往生要集 79・77・71
985 年、源信の著書。念仏による極楽往生の方法を示し、浄土信仰を確立。

- 雨月物語 05・03・87
上田秋成の初期読本。1776 年刊。怪談小説。

- 大鏡 56
11 世紀後半。平安中期の歴史物語。『世継物語』ともいう。藤原道長一代を中心とした藤原全盛期を批判的に叙述。紀伝体、仮名史書の初め。四鏡のひとつ。

- 奥の細道 81
松尾芭蕉が著した俳諧紀行文。

- おらが春 07
江戸時代後期の俳人である小林一茶の代表的俳句集。

- 海国兵談 07・78・63
林子平の著作。1791 年刊。ロシア南下を警告し、海防論を展開。軍備・戦術を図解説明するが、これが幕府の怒りにふれ、1792 年禁錮刑。

- 解体新書 73・72・71・69・67・57
日本最初の翻訳解剖書。前野良沢・杉田玄白らが『ターヘル・アナトミア』を翻訳したもの。

- 華夷通商考 69
西川如見の著書。如見が長崎で見聞した海外事情・通商関係を記述。

- 懷風藻 09・87
わが国最古の漢詩集。751 年成立。大津皇子・藤原不比等・長屋王ら 64 名の作品 120 首が収められている。

- 学問のすすめ 55
福沢諭吉の啓蒙書。1872～76年。大ベストセラー。実学を勧め、個人の独立、国家の隆盛は学問によって成り立つと説く。
- 魏志倭人伝 93
三国時代の正史『三国志』の一部。3世紀の日本の様子が描かれている。
- 教行信証 71
親鸞が著した浄土真宗〔一向宗〕の教典。
- 金槐和歌集 08
鎌倉幕府3代将軍源実朝の歌集で、万葉調の清新なリアリズムが特徴。
- 近世日本国民史 79
徳富蘇峰の著作のひとつ。
- 愚管抄 07・93・89
慈円の歴史書。1220年成立。歴史の展開としての道理と末法思想によって歴史をみる。最初の歴史哲学的著述。
- 源氏物語 01・96
11世紀初め。紫式部の大長編小説。光源氏を中心とする前41帖と薫大将を主人公とする13帖から成る。藤原氏全盛期の貴族社会を描写。
- 興禅護国論 93・92
1198年、栄西が旧仏教側の禅宗非難に対し、禅宗の本質を説き、旧仏教側の疑問を解いた書。
- 古今和歌集 06・99・85・74
905年、醍醐天皇の命で紀貫之・友則ら編集した勅撰和歌集。優美・繊細・技巧的な歌風で「古今調」と呼ばれ、万葉調と対比される。
- 国性爺合戦 08
近松門左衛門の著作で、歴史上の出来事に題材をとった人形浄瑠璃〔文楽〕の脚本。
- 古事記 83・78・73
稗田阿礼が伝誦した神代から推古天皇までの天皇系譜や皇室の伝承を太安万侶が筆録して、712年元明天皇に献上したもの。
- 後撰和歌集 74
勅撰和歌集のひとつ。
- 西域物語 72
本多利明の著書。西洋諸国の国勢風俗を記し、航海・貿易の必要な人口論と併せ説く。

- 黄綴日記 01・89
1058年頃成立。菅原孝標の女が13才で父の任地上総から帰京する旅に始まり、宮仕え・結婚・夫との死別など一生の回想録。
- 三教義疏 78
法華経・勝鬘経・維摩経の注釈書で聖徳太子の撰。現存の『法華経義疏』は太子自筆と伝えられ、伝存する日本最初の著書で最古の書物。
- 山家学生式 75・67
最澄が著した比叡山で学生を養成するための法式。
- 拾遺和歌集 74
勅撰和歌集のひとつ。
- 小説神髓 72
坪内逍遙の文学論。1885～86年発表。西洋文学の理論を基礎とし、文学の独立と写実主義を主張。
- 正法眼蔵 98・79
道元の著作。曹洞宗の禅の本質・規範を述べたもの。
- 白樺 07
1910年に創刊され、楽天的な人道主義・理想主義を標榜した文芸雑誌。
- 新古今和歌集 89・87
1205年、後鳥羽上皇の命によって、藤原定家らが編集した勅撰和歌集。
- 新撰菟玖波集 89
宗祇が編集した連歌集。1495年成立。
- 神皇正統記 08
北畠親房の著作。南朝の正統性と皇位継承のあり方などを説いた。
- 西洋紀聞 73・69・63
新井白石が著した西洋研究書。シドッチの尋問で得た西洋の地理・風俗などを記録。
- 大菩薩峠 96
中里介山の代表作。全18冊。幕末を舞台に展開する波乱の長篇時代小説。
- 歎異抄 89
親鸞の弟子唯円が親鸞の口伝に異説が多いことを嘆き、親鸞死後の異説を正したもの。
- 徒然草 87・56
1331年頃成立。吉田兼好の傑作随筆。動乱期の人間・社会の深い洞察を簡潔・自由な筆で写す。

- 東海道中膝栗毛 とうかいどうちゅうひざくりげ 96
 十返舎一九の代表的作品。滑稽本。江戸っ子弥次郎兵衛と喜多八の東海道旅行記。
- 読史余論 とくしよろん 93・89・63
あらいはくせき
 新井白石の代表的著作のひとつ。公家政権から武家政権への推移と徳川政権の正当性を述べた歴史書。
- 土佐日記 とさ 01・89
きのつらゆき
 紀貫之の著作。最初のかな日記。935年頃成立。
- 南総里見八犬伝 なんそうさとみ はっけんでん 02・82
 曲亭〔滝沢〕馬琴の代表的読本。安房の里見家の八犬士の主家再興の伝奇小説。
- 日本開化小史 79
うきち
 田口卯吉の著作。古代から廃藩置県までを合理的・発展的に叙述した歴史書。
- 日本外史 にほんがいし 89
らいさんよう
 頼山陽の著作。勤王思想を鼓吹した。
- 日本書紀 にほんしよき 77・71
げんしろう
 元正天皇の720年完成。編者は舎人親王。
- 破戒 はかい 81
とうそん
 島崎藤村の代表作。1906年刊。被差別部落出身の瀬川丑松の生き方を問う。
- ハルマ和解 わげ 73・67
さんぽく
 蘭学者稲村三伯が翻訳した日本最初の蘭日対訳辞書。
- 貧乏物語 びんぼう 79
かわ かみはじめ
 河上肇の代表作。
- 風姿花伝〔=花伝書〕 ふうし かでん 85・62・57
かでんしよ
 能の大成者世阿弥の能楽の芸術論。
- 風土記 ふどき 80
 713年諸国に撰進が命じられる。その国の地名の由来・産物・伝承などを記載。現存は常陸・出雲・播磨・豊後・肥前の5つで、出雲のみ完本。
- 平家物語 05
 仏教的無常観に基づく叙事詩的物語で、軍記物語の代表。成立は鎌倉中期と推定されている。琵琶法師によって語られた。
- 方丈記 ほうじょうき 09・99・89・56
かものちようめい
 鴨長明の代表作。無常を感じて閑居した心境を描いた日本の代表的随筆のひとつ。

- 坊^ぼっちゃん 59
 夏目漱石^{なつめ そうせき}の代表作のひとつ。1906 年の作。旧制松山中学校の経験を素材に無鉄砲な青年教師の姿をユーモラスに描く。
- 枕^{まくら}草^{そう}子^し 01・78・56
 清^{せい}少^{しょう}納^な言^{ごん}の随筆集。鋭い感覚・機知に富む。四季の情趣、人生の面白みなどを記す。
- 万^{まん}葉^{よう}集^{しゅう} 09・99・85・83
 770 年頃成立の和歌集で、約 4,500 首を収録。編者は大伴家持^{おおとものやかもち}か？歌風は素朴で力強く万葉調と呼ばれる。
- 夜^よ明^あけ前^{まえ} 01・59
 島崎藤村が著した歴史小説。
- 蘭^{らん}学^{がく}階^{かい}梯^{てい} 73・67
 大槻玄沢^{おおつきげんたく}の代表的著作。蘭学入門書。
- 立^{りつ}正^{しょう}安^{あん}国^{こく}論^{ろん} 98・82
 日蓮^{にちれん}の代表的著作。これが原因で伊豆流罪^{ゐづりざい}になる。日蓮は法華宗〔日蓮宗〕の開祖。
- 吾^{わが}輩^{はい}は猫^{ねこ}である 96
 夏目漱石の出世作。1905～06 年『ホトトギス』に発表。猫に託して作者の社会観を語る。

【3】重要問題演習

【1】重要問題（1）

【1】飛鳥・奈良時代の文章、並びに設問の選択肢の正しいものを○で囲みなさい。

厩戸王^{うまやとおう}〔聖徳太子〕は、天皇中心の（中央集権／律令）体制の推進を図り、女帝（孝謙天皇／推古天皇^{すいこ}）の摂政になった。厩戸王は603年に人材登用のために（御成敗式目／冠位十二階^{かんいじゅうにかい}）を制定し、翌年には官人・豪族への訓戒として、（欽定憲法／憲法十七条）を定めた。さらに、厩戸王は607年に（小野妹子／犬上御田歊^{けんずいし}）を遣隋使として派遣し、対等外交を目指した。後に隋に渡る高向玄理・僧旻^{みん}は大化改新に大きな影響を与えた。厩戸王の死後、（中大兄皇子／蘇我馬子^{そがのうまこ}）と中臣鎌足^{なかとみのかまたり}は、天皇中心の中央集権国家を目指して、（645／663）年に蘇我蝦夷^{そがのえみし}、入鹿父子を滅ぼした。ここから大化改新が始まる。（中大兄皇子／蘇我馬子）は後に天智天皇になるが、天智天皇の死後、672年に大友皇子と天皇の弟の（長屋王／大海人皇子）との間で皇位継承を巡って（壬申の乱／承平・天慶の乱^{あすかきよみはらのみや}）が起こった。乱は（長屋王／大海人皇子）の勝利で終結し、飛鳥浄御原宮に即位して（天武／元明）天皇になった。その妃は次期天皇となり、古代最大の都である藤原京を造営した持統天皇であった。

さて、古代の中央官制を見た時に行政法を中心とする令、刑法を中心とする律といった法律があるが、これらと平安前期に作られた条文の補足・修正や、施行規則を合わせて、（律令格式／大宝律令^{きやくしきたいほうりつりよう}）と呼ばれる。701年に文武天皇時に刑部親王が編纂した大宝律令は有名である。大宝律令は現存しないが、藤原不比等^{ふじわらのふひと}が編纂した養老律令と大要は同じであると推定される。このように、律令体制が押し進められていくが、710年元明天皇は都を（平安京／平城京）に移した。ここより、奈良時代が始まることになる。奈良時代の特色は仏教を中心にした鎮護国家を目指したことにある。古事記・日本書紀が編纂されたのもこの時代であり、古事記は（稗田阿礼／太安麻呂^{ひえだのあれ}）が暗唱していたものを、712年（稗田阿礼／太安麻呂^{おのやすまろ}）が書きとったものである。日本書紀は720年に（舍人親王／太安麻呂^{とねり}）らによって編纂された。奈良時代は僧侶が幅をきかしていた時代でもあるが、特に764年の藤原仲麻呂^{ふじわらのなかまろ}の乱後、（皇極／称徳^{こうぎくしょうとく}）天皇の厚い信頼のもと、太政大臣・法王となった（道鏡／鑑真^{どうきょうかんじん}）は有名である。

〔問〕聖武天皇^{しょうむ}は国ごとに寺を設立し、国家の平安を祈らせた。このようにして建立された寺を（神宮寺／国分寺^{じんぐうじこくぶんじ}）と言う。

[2] 次の平安時代の文章と設問の正しいものを○で囲みなさい。

(桓武／聖武)天皇は、(710／794)年に平安京に遷都し、平安時代が始まった。嵯峨天皇の時代には、810年の藤原(不比等／^{くすこ}薬子)の変に際して、機密保持のため、(公文所／^{くろうどどころ}藏人所)が置かれた。その後、藤原氏は権門勢家として台頭し、858年には、藤原(良房／^{よしふさ}基経)が清和天皇の(摂政／^{せいわ}関白)になった。さらに、884年には、藤原(良房／^{もつつね}基経)が最初の(摂政／関白)となった。その後、901年には、陰謀によって(菅原道真／^{すがわらのみちざね}伴善男)を大宰府への左遷に追いやったり、969年には、源高明を大宰府に左遷させた。これを、(応天門／^{あんな}安和)の変という。このように他氏排斥が繰り返され、1017年には藤原(道長／^{よりみち}頼通)が太政大臣になり、その子(道長／頼通)とともに、藤原氏の全盛期を築いた。このように、平安時代の中期は藤原氏台頭の歴史ということが出来る。

しかし、1069年に(後三条／^{えんきゅう}醍醐)天皇により、延久の(莊園整理令／徳政令)が出されると、藤原氏の権力は落ち、1086年に(白河／後鳥羽)上皇が(親政／院政)を始めてからは、上皇と、平氏・源氏を中心として台頭してきた武士とが歴史の主役になっていくことになる。

[問1] 初代藏人頭になった人物は(藤原忠平／^{ふじわらのふゆつぐ}藤原冬嗣)である。

[問2] 菅原道真の建議によって遣唐使が廃止されたのは(894／901)年である。

[問3] 藤原氏は地方の開発領主によって土地を寄進されたが、このようにして成立していった莊園は一般に(寄進地系莊園／^{みょうでん}名田／自墾地系莊園)と呼ばれる。

[3] 次の各項目の中で、飛鳥文化に該当するものには (A)、白鳳文化に属するものには (B)、天平文化のものには (C)、弘仁・貞観文化に属する場合は (D)、国風文化の場合は (E)、院政期の文化に入る場合には (F)、とカッコに記入しなさい。

- | | |
|--------------------|----------------------|
| (1) 広隆寺弥勒菩薩像 () | (2) 平等院鳳凰堂阿弥陀如来像 () |
| (3) 中尊寺金色堂 () | (4) 法隆寺金堂釈迦三尊像 () |
| (5) 東大寺不空絹索観音像 () | (6) 薬師寺金堂薬師三尊像 () |
| (7) 阿弥陀聖衆来迎図 () | (8) 東大寺執金剛神像 () |
| (9) 出羽三山の山伏、密教 () | |

[4] 次の各設問のかっこの中で正しいものを○で囲みなさい。

- 1) 鎌倉北条執権の政治を確立させた事件は（承久の乱／平治の乱）と呼ばれ、（1219／1221）年に起こった。この時、（後鳥羽上皇／順徳上皇）が隠岐に流されている。
- 2) 日本最初の武家法は（御成敗式目／建武式目）と呼ばれ、その制定は（1221／1232）年のことである。その時の執権は（北条泰時／北条時政）である。
- 3) 元寇の時の執権は8代執権（北条時宗／北条義時）である。
- 4) 元寇の後に、御家人を救うために出された法令は（永仁の徳政令／半済令）と呼ばれている。
- 5) 鎌倉幕府が滅んだのは（1333／1336）年であるが、その時自害したのは（北条時頼／北条高時）である。
- 6) 鎌倉幕府滅亡後、後醍醐天皇が行った親政を（延喜の治／建武の新政）という。
- 7) 1336年、京都で光明天皇を擁立し室町幕府を開いたのは（足利尊氏／足利義満）である。
- 8) 後醍醐天皇が吉野に逃れたのは（1333／1336）年であり、吉野側は（北朝／南朝）と呼ばれた。
- 9) 南北朝を合一したのは（足利義満／足利尊氏）で、（1336／1392）年のことである。
- 10) 将軍足利義教が暗殺されたのは（1441／1467）年のことで、暗殺した人物は（北畠親房／赤松満祐）である。また、その乱は（永享／嘉吉）の乱と呼ばれている。
- 11) 鉄砲伝来は（1543／1549）年で、キリスト教伝来は（1543／1549）年である。

【2】重要問題（2）

〔1〕次の文章の空欄に下の語群から適語を選び、その記号を記入しなさい。

鎌倉新仏教の先駆けとなったのは（1 ）である。彼は身分性別に拘わらず、一心に念仏を唱えさえすれば極楽往生出来るという（2 ）の教えを説き、（3 ）を開いた。（1）の教えを徹底させたのが彼の弟子の（4 ）で、彼は自ら肉食・妻帯し、僧俗の区別を否定し悪人正機説を説いた。この宗派を（5 ）という。同じく（3）から分かれたものに（6 ）の（7 ）がある。（6）は（8 ）と自称して各地を布教して歩き、踊念仏を勧めた。（9 ）を開いた（10 ）は南無妙法蓮華經と題目を唱えれば成仏出来ると説き、法華經至上主義の信仰を主張した。この他宋から伝えられた禅宗がある。（11 ）を開いた（12 ）は旧仏教と妥協する態度をとり、京都と鎌倉を中心に上流武士の間に信仰を得た。（13 ）を伝えた（14 ）は名利を嫌って貴族にも幕府にも接近せず、越前の（15 ）に住んで門下の養成に努め只管打坐を説いたが、彼の死後（13）は地方武士の間に広まった。

〔語群〕

ア) 法華宗 ほっけしゅう	イ) 曹洞宗 そうとうしゅう	ウ) 法然 ほうねん	エ) 日蓮 にちれん
オ) 親鸞 しんらん	カ) 時宗 じしゅう	キ) 捨聖 すてひじり	ク) 臨済宗 りんざいしゅう
ケ) 永平寺 えいへいじ	コ) 自力本願 じりきほんがん	サ) 道元 どうげん	シ) 一遍 いつぺん
ス) 浄土宗 じょうどしゅう	セ) 栄西 えいさい	ソ) 高野聖 こうやひじり	タ) 延暦寺 えんりやくじ
チ) 他力本願 たりきほんがん	ツ) 隠元 いんげん	テ) 黄檗宗 おうばくしゅう	ト) 万福寺 まんぶくじ
ナ) 浄土真宗 じょうどしんしゅう			

〔2〕次にあげたもののうちで、鎌倉文化に属するものは A、北山文化に属するものは B、東山文化に属するものは C、桃山文化に属するものは D、と空欄に記入しなさい。

- | | |
|---------------------------------------|--|
| (1) 慈照寺銀閣 ()
<small>じしょうじ</small> | (2) 西本願寺書院・唐門 ()
<small>からもん</small> |
| (3) 西芳寺庭園 ()
<small>さいほうじ</small> | (4) 竜安寺石庭 ()
<small>りょうあんじ</small> |
| (5) 鹿苑寺金閣 ()
<small>ろくおんじ</small> | (6) 山水長巻 ()
<small>さんすいちょうかん</small> |
| (7) 唐獅子図屏風 ()
<small>からじし</small> | (8) 東大寺南大門金剛力士像 () |

[3] 以下の文章の空欄に語群から正しい人名を選び、番号を記入しなさい。

1467 年、将軍（ ）の相続争いがもとで東軍細川勝元、西軍山名宗全を大将に応仁の乱が勃発し京都は焼野と化した。以後、戦乱は地方に及び、いつ果てるともしれぬ戦国の世へ移って行った。この古い権威が通用しなくなった戦国時代に戦国大名にのしあがるためには個人の實力が大ききものをいった。主な大名には、関東地方の支配権を確立する基礎を築いた（ ）、中部地方に強大な領国を形成した甲斐の（ ）がいる。約 1 世紀にわたる争乱の中から出てきたのが尾張の（ ）である。彼は 1560 年桶狭間の戦いで今川義元を倒し、1570 年姉川の戦いの後、近江の浅井長政・越前の朝倉義景を討ち滅ぼし、1573 年将軍（ ）を京都から追放し、ここに室町幕府は名実ともに滅亡した。また、1575 年の長篠合戦で武田勝頼の騎馬隊を鉄砲で打ち破ったのも彼であった。しかし、1582 年部下の（ ）に攻められ、京都の本能寺で敗死した。その時、中国大返しを敢行した（ ）は山崎の戦いで明智光秀を倒した。翌 1583 年彼は賤ヶ岳の戦いで柴田勝家を滅ぼし、1590 年に天下統一を果たした。

[語群]

- | | | | |
|---------|----------|----------|----------|
| 1) 明智光秀 | 2) 斎藤道三 | 3) 北条義時 | 4) 武田信玄 |
| 5) 足利義昭 | 6) 柴田勝家 | 7) 織田信長 | 8) 豊臣秀頼 |
| 9) 足利義政 | 10) 北条早雲 | 11) 豊臣秀吉 | 12) 上杉謙信 |

[4] 以下の文章のかっこの中の正しいものを○で囲みなさい。

(1598 / 1600) 年、(関ヶ原の戦い / 大坂の陣) で大勝した徳川家康は、全国の支配権を確立し、(1600 / 1603) 年、江戸に幕府を開いた。徳川氏に従おうとしなかった(豊臣 / 前田)氏に対しては、1614 年の(大坂冬の陣 / 大坂夏の陣)、1615 年の(大坂冬の陣 / 大坂夏の陣)の 2 度にわたる戦いで滅ぼした。幕府は大名に対しては(武家 / 武士)諸法度・(参勤交代 / 助郷)、朝廷に対しては(国役 / 禁中並公家諸法度)、農民に対しては田畑永代売買禁止令・(身分制度 / 分地制限令)などを発令し、統制を強化した。対外的には 3 代将軍(秀忠 / 家光)の時に鎖国体制が固まった。

[5] 享保の改革は享、寛政の改革は寛、天保の改革は天とかっこに記入しなさい。

- | | | |
|---------------|-------------|-----------------|
| (1) 七分金積立 () | (2) 上げ米 () | (3) 足高の制 () |
| (4) 人返しの法 () | (5) 目安箱 () | (6) 公事方御定書 () |
| (7) 上知令 () | (8) 棄捐令 () | (9) 石川島人足寄場 () |

[6] カッコの中の正しいものを選び、○で囲みなさい。さらに問いに答えなさい。

幕末には、列強は市場を求めアジアに進出していたが、幕府は列強の進出に対して1825年（1. 異国船打払令／^{しんすい}薪水給与令）を出して、清・オランダ船以外の撃退を命じた。これをうけて、（2. 1837／1842）年にモリソン号が打ち払われている。この事件に際して^{わたなべ か ざん}渡辺崋山は「慎機論」、^{たか の ちょうえい}高野長英は「^{ぼ じゅつゆめものがたり}戊戌夢物語」を著し幕府の鎖国政策を批判したので1839年に罰せられた。これを蛮社の獄という。しかし、時代の波には勝てず、（3. 1853／1854）年に再度来航したペリーの要求に屈して、幕府はアメリカと和親条約を結び、下田・（4. 箱館／長崎）の二港を開いて燃料・食料の供給や、漂流民の救出などの取り決めを行なった。次いで（5. 中国／ロシア）・オランダ・イギリスとも同様の条約を結んだ。アメリカはさらに初代の駐日総領事（6. サトー／ハリス）をもって、強硬に（7. 軍事同盟／通商条約）の締結を迫ってきた。幕府はこの要求を入れるのもやむを得ないと考え、^{ろうじゅうしゅ ざ ぼった まさよし}老中首座堀田正睦は（8. 勅許／^{ちよつきよ}大政奉還）を乞うたが、（9. 水戸／^{じょう い}長岡）藩を中心とする（10. 攘夷／公武合体）論者は強く反対し、又（8）も下らなかったで、大老（11. 阿部正弘／^{い い なおすけ}井伊直弼）は（8）を待たずに（12. 1858／1859）年、（7）に調印した。次いでイギリス・（5）・オランダ・フランスとの間にも同じ内容の条約を結んだ。この条約で日本は下田・（4）の他、江戸・大坂の両市と（13. 神奈川／下関）・長崎・新潟・兵庫の諸港を開くことを約した。又、領事裁判権のような（14. 統治権／治外法権）を認める一方、（15. 外交権／関税自主権）を失うなど、著しく不平等な条約であった。

このようにして200余年にわたる鎖国は終わり欧米列強との間に外交貿易が始まったが、この条約が（8）を得ていないという点で尊王（10）論者の攻撃的になり、幕府はますます窮地に追い込まれた。しかし幕府も反対派の大弾圧に乗り出し、多数の志士を処罰した。これが（16. 安政の大獄／8・18の政変）である。このため（11）は志士の反感を買い、（17. 1859／1860）年、（18. ^{はまぐり ごもん}桜田門／^{はまぐり ごもん}蛤御門）外で（9）浪士らに暗殺された。これを境として幕府の威力は急速に衰えていく。しかし、幕府は^{こうめい}孝明天皇の妹の^{かずのみや}和宮を14代将軍^{とくがわいえもち}徳川家茂に降嫁させ、公武合体政策をとった。さらに徳川家を延命させるため15代将軍^{とくがわいしのお}徳川慶喜は1867年大政奉還をするが、王政復古の^{ぼ しん}大号令が出された。それに怒った旧幕府軍と薩摩長州軍との間で1868年戊辰戦争が勃発すると旧幕府軍は敗れ、明治の時代を迎えることになる。

[問] 下線部分において刑死した人物を2名選び、○で囲みなさい。

^{よし だしょういん}吉田松陰、^{たかすぎしんさく}高杉晋作、^{お がたこうあん}緒方洪庵、^{はしもと さ ない}橋本左内、^{ふくざわ ゆ きち}福沢諭吉

【3】重要問題（3）

〔1〕A群の人物名とB群の事項を結び付けなさい。答えはB群の記号をかつこの中の左側に記入しなさい。また、A群の人物が元禄文化に属する場合は元、化政文化に属する場合は化というふうに、今度はかつこの右側に記入しなさい。

〔A群〕

- | | | |
|--|--|---|
| ア) <small>やまざきあんざい</small> 山崎闇斎 (/) | イ) <small>いとうじんざい</small> 伊藤仁斎 (/) | ウ) <small>もとりのりなが</small> 本居宣長 (/) |
| エ) <small>はなわ ほ きいち</small> 塙保己一 (/) | オ) <small>あら い はくせき</small> 新井白石 (/) | カ) <small>まえ の りょうたく</small> 前野良沢 (/) |
| キ) <small>すぎ た げんぱく</small> 杉田玄白 (/) | ク) <small>おおつきげんたく</small> 大槻玄沢 (/) | ケ) <small>いなむらさんぱく</small> 稲村三伯 (/) |
| コ) <small>お がたこうあん</small> 緒方洪庵 (/) | | |

〔B群〕

- | | | | | |
|-----------------------------|------------------------------|----------------------------------|-----------------------------|-------|
| a) <small>き ぶん</small> 西洋紀聞 | b) <small>こ ぎ どう</small> 古義堂 | c) <small>ぐんしよるいじゅう</small> 群書類従 | d) 解体新書 | e) 適塾 |
| f) <small>すい か</small> 垂加神道 | g) 古事記伝 | h) <small>かいてい</small> 蘭学階梯 | i) <small>わ げ</small> ハルマ和解 | |

〔2〕A群の人物名とB群の作品を結び付けなさい。答えはB群の記号をA群のかつこの中に記入しなさい。

〔A群〕

- | | | |
|-------------------------------------|--|---|
| ア) <small>うたがわひろしげ</small> 歌川広重 () | イ) <small>かつしかほくさい</small> 葛飾北斎 () | ウ) <small>とうしゅうさいいやらく</small> 東洲斎写楽 () |
| エ) <small>し ば こうかん</small> 司馬江漢 () | オ) <small>すず き はるのぶ</small> 鈴木春信 () | カ) <small>き た がわうたまろ</small> 喜多川歌麿 () |
| キ) <small>まるやまおうきよ</small> 円山応挙 () | ク) <small>いけのたい が</small> 池大雅 () | ケ) <small>お がたこうりん</small> 尾形光琳 () |
| コ) <small>い はらさいかく</small> 井原西鶴 () | サ) <small>ちかまつもん ざ え もん</small> 近松門左衛門 () | |

〔B群〕

- | | | |
|---|--|----------------------------------|
| a) <small>ゆきまつ ず びょう ぶ</small> 雪松図屏風 | b) <small>に ほんえいたいぐら</small> 日本永代蔵 | c) <small>しのばずのいけ ず</small> 不忍池図 |
| d) <small>こうはくばい ず びょう ぶ</small> 紅白梅図屏風 | e) <small>じゅうべんじゅう ぎ ず</small> 十便十宜図 | f) <small>ふ がく けい</small> 富嶽三十六景 |
| g) <small>そ ね ざきしんじゅう</small> 曾根崎心中 | h) <small>ふうじんらいじん ず びょう ぶ</small> 風神雷神図屏風 | i) ポッピンを吹く女 |
| j) <small>つぎ</small> 東海道五十三次 | k) <small>だんきん び じん</small> 弾琴美人 | l) <small>えびぞう</small> 市川鰻蔵 |

[3] 以下の文章のかっこの中の正しいものを○で囲みなさい。

19世紀当時ヨーロッパ列強では帝国主義が盛んとなり、競って利権や領土を求め、東洋に目を注いでいた。日清戦争はこのような世界情勢の中で戦われたのであった。我が国が清国に勝利し、清国と（下関／南京）条約を結ぶと、ロシアはフランス・ドイツ両国と共に我が国に干渉し、（山東／遼東^{りょうとう}）半島を清国に還付させた。これを（三国／枢軸）干渉という。しかし、その後も欧米列強の中国進出はやまなかった。こうした清国に対する圧迫を憤って、中国人の排外運動がさかんになり、北清一帯にいわゆる義和団^{ぎわだん}の乱が起これ、これを鎮定するために各国は連合軍を組織してこの鎮定にあたった。これを（満州／北清^{ほくしん}）事変という。ロシアはこの事変を機に大兵を出して（シベリア／満州）を占領し、その上韓国内まで南下する勢いを示した。そこで我が国は、韓国の領土を守り、東洋の平和を確保するため、ロシアと交渉を重ねたが遂に意見が合わず、（1902／1904）年に日露戦争が起こった。戦局は日本に有利のうちに進み、翌年5月、対馬沖の日本海海戦で戦局は一段落を告げ、ロシアの極東経営は行き詰まった。しかし我が国は国力の殆ど全てを出し尽くし、これ以上の作戦の継続は困難となった。ここにアメリカ大統領ルーズベルトの勧告をいれ、アメリカの（ボストン／ポーツマス）で講和会議を開いた。

[4] A群の人物に最も関連する事項をB群の選択肢から選び、その数字をかっこに記入しなさい。

[A群]

さいごうたかもり 西郷隆盛（ ）	いたがきたいすけ 板垣退助（ ）	いのうえかおる 井上馨（ ）
むつむねみつ 陸奥宗光（ ）	ふたばていしめい 二葉亭四迷（ ）	ふくざわゆきち 福沢諭吉（ ）
よさのあきこ 与謝野晶子（ ）	こむらじゅたろう 小村寿太郎（ ）	よしのさくぞう 吉野作造（ ）

[B群]

1) めいろくしゃ 明六社	2) ちがい 治外法権撤廃	3) 細菌学	4) うきぐも 浮雲
5) 日英同盟	6) 日本美術院	7) ろくめいかん 鹿鳴館	8) 西南戦争
9) 自然主義文学	10) みんぼん 民本主義	11) 自由民権運動	12) みようじょう 明星

[5] 次の文章は政党政治の歴史について述べたものです。かっこの中の正しいものを○で囲みなさい。

1898 年、自由党・進歩党は憲政党を結成し、同年、不完全ながらも政党人を主体にした日本で初めての政党内閣である（超然／隈板^{わいはん}）内閣が生まれた。しかし内部対立が激しく、まもなく倒れてしまった。

1900 年、（伊藤博文^{ひろふみ}／山県有朋^{やまがたありとも}）は政党の必要を認め、（立憲政友会／革新倶楽部）を結成して内閣を組織したが、実際は官僚を基礎としたもので、本格的な政党内閣とは言い難かった。大正時代に入ると大正デモクラシーが花開き、1913 年、第 3 次（西園寺公望^{さいおん じ きんもち}／桂太郎^{いぬかいつよし}）内閣の時に犬養毅・尾崎行雄らの第 1 次護憲運動（大正政変）が起き、山本権兵衛内閣^{さんぺん べ え}に取って代わられた。1914 年の第 1 次世界大戦の時、大戦景気にわいたのは第 2 次大隈重信内閣^{おおくましげのぶ}の時であった。その後、寺内正毅内閣の時にシベリア出兵が決定し、その結果、米騒動が起きた。そこで、（1918／1925）年、元老西園寺公望らは、世論の動向を察知し、（加藤高明^{はたらかし}／原敬）を内閣の首班に推し、ここに本格的な政党内閣が誕生した。これ以降紆余曲折はあったものの多数党が内閣を組織する慣行が生まれた。しかし、1924 年成立の清浦奎吾^{きようらい}内閣は超然内閣であったため、第 2 次護憲運動が起きた。そしてその結果、（加藤高明／高橋是清^{これきよ}）内閣が組閣され、1925 年、公約通り普通選挙法が公布された。このような大正デモクラシーは吉野作造の民本主義を背景にしていた。しかし、同年、非常に厳しい取締法である（治安警察法／治安維持法）も公布され、これ以降デモクラシーは鳴りをひそめることになる。

そして、大正末期から昭和初期、1921 年に始まったワシントン会議や 1930 年のロンドン海軍軍縮会議で活躍した幣原喜重郎^{しではらきじゅうろう}の協調外交も一部見られたが、ファシズムが次第にその激しさを増すにつれ、政界の形勢も変化し、田中義一内閣の時に山東出兵が行われ、1928 年には張作霖爆殺事件が起きた。また、1930 年ロンドン軍縮会議の批准を巡り、浜口雄幸内閣^{おさち}の時に統帥権干犯問題^{とうすい かんぱん}が起きた。そして、1931 年の柳条湖事件に端を発して成立した日本の傀儡である満州国を（近衛文麿^{この え ふみまろ}／犬養毅）首相が承認しなかったため、一部青年将校が首相を暗殺した（5・15／2・26）事件が 1932 年に起こった。ここにおいて戦前の政党政治は終わりを告げた。政党政治が復活するまでに、日本は死者 310 万人の犠牲を払わなければならなかったのである。

【4】重要問題（1）の解答・解説

【解答】

【1】○で囲むべきもの（順番に）

中央集権	推古天皇	冠位十二階	憲法十七条
小野妹子	中大兄皇子	645	中大兄皇子
大海人皇子	壬申の乱	大海人皇子	天武
律令格式	平城京	稗田阿礼	太安麻呂
舎人親王	称徳	道鏡	

〔問〕 国分寺

【2】○で囲むべきもの（順番に）

桓武	794	薬子	蔵人所
良房	摂政	基経	関白
菅原道真	安和	道長	頼通
後三条	荘園整理令	白河	院政

〔問1〕 藤原冬嗣

〔問2〕 894

〔問3〕 寄進地系荘園

【3】

- | | |
|--------------------|----------------------|
| (1) 広隆寺弥勒菩薩像 (A) | (2) 平等院鳳凰堂阿弥陀如来像 (E) |
| (3) 中尊寺金色堂 (F) | (4) 法隆寺金堂釈迦三尊像 (A) |
| (5) 不空絹索観音像 (C) | (6) 薬師寺金堂薬師三尊像 (B) |
| (7) 阿弥陀聖衆来迎図 (E) | (8) 東大寺執金剛神像 (C) |
| (9) 出羽三山の山伏、密教 (D) | |

【4】（順番に）

- 1) 承久^{しょうきゅう}の乱、1221、後鳥羽^{ごとば}上皇
- 2) 御成敗式目^{ごせいばいしきもく}、1232、北条泰時^{ほうじょうやすとき}
- 3) 北条時宗
- 4) 永仁^{えいにん}の徳政令
- 5) 1333、北条高時
- 6) 建武の新政
- 7) 足利尊氏
- 8) 1336、南朝
- 9) 足利義満^{あしかがよしみつ}、1392
- 10) 1441、赤松満祐^{あかまつみつすけ}、嘉吉^{かきつ}
- 11) 1543、1549

【解説】

【1】

（1）飛鳥時代

(1) 推古天皇：日本最初の女帝。

(2) 中央集権：統治の機能が中央政府に統一集中していること。

厩戸王〔聖徳太子〕は天皇中心の強力な国家を創ろうとした。

(3) 遣隋使：日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。小野妹子。

(4) 蘇我馬子^{そがのうまこ}：物部守屋^{もののべのもりや}を滅ぼし国政の主導的立場につく。

(5) 蘇我蝦夷^{そがのえみし}：蘇我馬子の子。父について大臣^{おおみ}になり、国政上の主導的地位につく。

645 年、息子、入鹿^{いるか}が暗殺されると自邸に火を放って自殺。

(6) 冠位十二階：氏姓制度の門閥世襲打破。人材登用。

それまでは、能力の有無に関わらず、同じ氏（ex. 蘇我氏：財務 物部氏：軍事、警察）が同じ職務についていた。

豪族をこの制度のもとで官吏に編成した。

(7) 憲法七条：わが国最初の成文法。天皇を中心とする国家意識が強調され、大化改新の政治的理念となった。「国に二君なし」「和をもって貴しとなし、さからうこと無きをむねとせよ」「篤く三宝を敬え。三宝は仏法僧なり」「おおいなることは独りさだむべからず」

(8) 遣唐使：630 年の犬上御田鍬から 9 世紀にかけて唐に派遣された公式の使節。計 10 数回派遣された。日本の政治、学問、宗教などの発達に貢献した。

(9) 持統天皇：天武天皇の妃。万葉集^{まんようしゅう}（770 年頃完成）に歌がある。

(10) 御成敗式目：貞永式目。鎌倉幕府の基本法典。51 カ条。御家人の権利・義務、所領の訴訟などについて書かれている。

(11) 欽定憲法：君主の単独の意思によって制定された憲法。大日本帝国憲法。

(12) 仏教伝来：538 年もしくは 552 年に百濟^{くだら}（もとの馬韓）から公式に伝来した。

(13) 仏教論争：蘇我馬子（奉仏論）⇔ 物部守屋（排仏論）

(2) 奈良時代

- (1) 古事記：神代～推古天皇までの天皇系譜や皇室の伝承。
- (2) 日本書紀：日本最初の勅撰の歴史書。
- (3) ^{ながやおう}長屋王：聖武天皇即位とともに左大臣となり、藤原氏に対抗する勢力をなした。729年、密告により邸宅を囲まれ自殺。これを長屋王の変という。藤原氏陰謀の犠牲になったと言われている。
- (4) 孝謙[称徳]天皇：聖武天皇の娘。母は^{こうみょう}光明皇后。父帝発願の東大寺大仏を開眼。
- (5) 鑑真：中国の僧。律宗を伝え東大寺戒壇院を建立。^{とうしやうだいじ}唐招提寺を創建。
- (6) ^{ふじわらのなかまろ}藤原仲麻呂の乱：764年、藤原仲麻呂は孝謙上皇〔後の称徳天皇〕の寵愛を得た僧道鏡を排除しようとしたが、失敗し、近江で敗死した。^{えみのおしかつ}恵美押勝。
- (7) ^{だいじやうだいじん}太政大臣：古代官制の最高官。常置の官ではない。
- (8) 法王：極めて特殊な官職で、天皇に準ずる位と言われている。
- (9) 藤原不比等：父は鎌足。娘光明子は聖武天皇皇后となり、藤原氏繁栄の基礎を築いた。
- (10) 長岡京：造宮使^{ふじわらのたねつぐ}藤原種継の暗殺などで廃止。
- (11) ^{きびのまきび}吉備真備：遣唐留学生として入唐。僧^{げんぼう}玄昉とともに^{たちばなのもろえ}橘諸兄に重用される。藤原仲麻呂の乱平定に貢献。

(3) 奈良時代の政権の推移

藤原不比等：710年 平城京遷都



長屋王：723年 三世一身法



藤原四子：妹の光明子を皇后に立てる。



橘諸兄（ブレン：吉備真備、僧^{げんぼう}玄昉）、^{ふじわらのひろつぐ}藤原広嗣の乱
：743年 聖武天皇の大仏造立^{ぞうりゅう}の詔^{みことり}（^{しがらきのみや}紫香樂宮）
：743年 壱田永年私財法



藤原仲麻呂：752年 大仏開眼供養（孝謙天皇）
：764年 恵美押勝〔藤原仲麻呂〕の乱



称徳・道鏡政権：宇佐八幡宮神託事件



^{ふじわらのももかわ}藤原百川

[2]

(1) 平安時代

- (1) 葉子の変：平城上皇の復位を画策。→ 藤原^{ほっけ}北家の台頭。
- (2) 三筆：嵯峨^{たちばなの}天皇、橘逸勢、空海。(覚え方：嵯峨の橘を食うかい?)
- (3) 菅原道真：宇多・醍醐^{たちばなの}両天皇の信任あつく、藤原氏を抑えるため重用された。
後世天満天神として信仰された。
- (4) 摂政：天皇幼少または病気などの時、代って政務を処理する代行者。
- (5) 関白：天皇を補佐し、政治の多くの重要なことがらに参与する令外の官。
- (6) 令外^{りょうげ}の官：律令時代において令に規定されたもの以外の官職。
- (7) 寄進：一定の年貢を納めて、その保護を受ける。本家、領家、荘官。
- (8) 名田^{みょうでん}：一定規模の田地に、年貢等の納入責任者の名を冠して、その権利を表明したもの。
- (9) 院政：天皇位を譲ったあとに上皇となって、院庁で国務を執行すること。
- (10) 親政：天皇が自ら政治を行うこと。
- (11) 徳政令：中世に行われた債権の破棄を命じる法令。
- (12) 藤原氏による他氏排斥
 - 842 年 承和^{じょうわ}の変により伴健岑^{ともこのこわみね}、橘逸勢が失脚する。
 - 858 年 藤原良房が孫の清和天皇の摂政になる。
 - 866 年 応天門の変により伴善男^{ともこのよしお}が失脚する。
 - 884 年 藤原基経が光孝天皇の実質的な関白になる。
 - 887 年 阿衡^{あこう}の紛議により基経が名実ともに関白になる。
 - 901 年 昌泰^{しょうたい}の変により右大臣菅原道真が大宰府に左遷される。(藤原時平の中傷)
 - 969 年 安和^{あんな}の変により左大臣源高明^{みなもとのかかあきら}が大宰府に左遷される。

[4]

(1) 鎌倉時代 (1192 ~ 1333) 封建時代の始まり

- (1) 封建体制：将軍によって治める土地をあてがわれる御家人は、将軍に対して奉公する義務が生じる。御家人は自分の所領に命を懸ける。→ 一所懸命
- (2) 守護：軍事、警察、司法権を掌握した地方機関。室町時代後期には領主化して守護大名となった。
- (3) 地頭：土地管理、年貢の徴収、治安維持。承久の乱後、鎌倉幕府が没収した朝廷方の土地に新たに補任した地頭は新補地頭と呼ばれる。
- (4) 北条時政 (初代執権)：1203 年の比企能員^{ひきよしかず} (2 代将軍源頼家の義父) の乱後、頼家を伊豆の修禅寺に幽閉。頼家は翌年殺された。

- (5) 北条義時（2代執権）：公暁^{くぎょう}をそそのかして、三代將軍源実朝^{みなもととのさねとも}を父頼家の仇と思い込ませ、彼を暗殺させる。その後、公暁も暗殺された。
- (6) 北条政子（尼將軍）：源頼朝（初代將軍）の未亡人、北条時政の娘。承久の乱では御家人の動揺を抑え、幕府体制の基礎を固めた。→執権政治確立。
- (7) 北条泰時（3代執権）：御成敗式目（最初の武家法）
- (8) 北条時宗（8代執権）：元寇（2度にわたる蒙古軍の侵略）を撃退する。幕府は恩賞としての土地を御家人に与えることができなかった。→御家人の窮乏化。
- (9) 永仁の徳政令：御家人の所領売買、質入を禁じ、地頭、御家人に売却した土地で売却後20年未満のもの、御家人以外の武士や庶民に売却した土地は年限を限らず、すべて無償返却とする。→経済の混乱。徳政令の翌年廃止。→御家人の窮乏改まらず。→御家人間での支配・被支配の形成→有力御家人の出現→幕府滅亡
- (10) 後醍醐天皇：天皇が自ら政治を行うことを理想としていた。→倒幕計画→これを契機に反北条勢力が各地で蜂起→幕府滅亡
- (11) 北条高時^{たかとき}（14代執権）：新田義貞^{にった よしきだ}の鎌倉攻撃の際に自害。

（2）建武の新政（1334～36）

後醍醐天皇による10世紀半ば以来約400年ぶりに復活した天皇親政。公家・寺社を重視、恩賞の不公平→武家の不満→武家の離反

1335年：中先代の乱（北条高時の息子時行の乱）→足利尊氏離反

建武の新政は現実を無視した政治を行い、わずか2年半で崩壊した。

（3）南北朝時代（1336～92）

足利尊氏によって擁立された北朝と、吉野に移った南朝との対立は、地方の武士を巻き込み、南北朝の内乱として60年近く続く。

（4）室町時代（1336～1573）

- (1) 足利尊氏（初代將軍）：光明天皇擁立（持明院統）⇔後醍醐天皇（大覚寺統）
- (2) 足利義満（3代將軍）：明德の乱（山名氏清）、南北朝の合一、日明〔勘合〕貿易、金閣寺（北山文化）
- (3) 足利義教^{よしのり}（6代將軍）：永享^{えいきょう}の乱（鎌倉公方足利持氏^{もちうじ}自殺）、嘉吉の乱（播磨守護赤松満祐により義教暗殺さる）、日親^{にっしん}（鍋冠^{なべかぶ}り上人^{しょうにん}）
- (4) 足利義政（8代將軍）：応仁^{おうにん}の乱（1467～1477）→幕府の権威が失墜→戦国時代に突入。銀閣寺（東山文化）

【5】重要問題（2）の解答・解説

【解答】

【1】

- (1) ウ (2) チ (3) ス (4) オ (5) ナ (6) シ (7) カ (8) キ
(9) ア (10) エ (11) ク (12) セ (13) イ (14) サ (15) ケ

【2】

- (1) 慈照寺銀閣^{じしやうじぎんかく} (C)
(2) 西本願寺書院・唐門^{からもん} (D)
(3) 西芳寺庭園^{さいほうじ} (B)
(4) 竜安寺石庭^{りやうあんじ} (C)
(5) 鹿苑寺金閣^{ろくおんじぎんかく} (B)
(6) 山水長巻^{さんすいちょうかん} (C)
(7) 唐獅子図屏風^{からじし} (D)
(8) 東大寺南大門金剛力士像^{なんだいもん} (A)

【3】（順番に）

9, 10, 4, 7, 5, 1, 11

【4】（順番に）

1600	関ヶ原の戦い	1603	豊臣
大坂冬の陣	大坂夏の陣	武家	参勤交代
禁中並公家諸法度	分地制限令	家光	

【5】

- (1) 寛 (2) 享 (3) 享 (4) 天 (5) 享 (6) 享 (7) 天 (8) 寛
(9) 寛

[6]

- | | | |
|-----------------------------|-----------------------------------|------------|
| (1) 異国船打払令 | (2) 1837 | (3) 1854 |
| (4) 箱館 | (5) ロシア | (6) ハリス |
| (7) 通商条約 | (8) 勅許 <small>ちよっきょ</small> | (9) 水戸 |
| (10) 攘夷 <small>じやうい</small> | (11) 井伊直弼 <small>い い なおすけ</small> | (12) 1858 |
| (13) 神奈川 | (14) 治外法権 <small>ちがい</small> | (15) 関税自主権 |
| (16) 安政の大獄 | (17) 1860 | (18) 桜田門 |

刑死した人物：吉田松陰、橋本左内

【解説】

[3]

(1) 室町時代 (1336 ~ 1573)

足利義政 (8代将軍)：応仁おうにんの乱 (1467 ~ 1477) → 幕府の権威が失墜 → 戦国時代に突入。銀閣寺

(2) 戦国時代 (1467 ~ 1590)：戦国大名が群雄割拠する下剋上の時代。

(1) 柴田勝家かついえ：織田信長の武将。本能寺の変の翌年賤ヶ岳しずがたけの戦いで、秀吉に敗れる。

これによって秀吉の全国制覇の基礎が固まる。

(2) 上杉謙信けんしん：越後、越中、上野を領有。武田信玄との数回の川中島の合戦は有名。

(3) 斉藤道三どうさん：美濃国を支配していた守護土岐氏を追放して、自ら美濃国主となる。

(4) 足利義昭：室町幕府 15 代将軍。策謀家の義昭は、反信長勢力を結集させようとし、信長に従おうとしなかったため、信長によって京都を追われた。

(3) 安土桃山時代 (1573 ~ 1600)

(1) 織田信長：長篠ながしのの戦い (鉄砲の大量使用により武田軍を撃破)、楽市楽座

(2) 豊臣秀吉：天下統一、朝鮮侵略、検地、刀狩 → 兵農分離

[4]

(1) 徳川政権の確立

(1) 1600 年 関ヶ原の戦い 徳川家康 ⇔ 石田三成みつなり

(2) 幕藩体制：幕府のもとに諸藩があり、本百姓を基盤に厳しい身分制度のもとに封建支配を行う体制。

(3) 淀君 [淀殿]、豊臣秀頼：方広寺鐘銘問題「国家安康」こっか あんこう「君臣豊楽」くんしんほうらく

(4) 禁中並公家諸法度：天子諸芸能の事、第一御学問なり。
きんちゅうならびにくげしよはつと

(5) 武家諸法度

一．諸国の居城、修補をなすといへども必ず言上すべし。いはんや新儀の構営かたく停止せしむる事。

一．隣国において新儀をくわだて徒党を結ぶ者これあらば早く言上いたすべき事

一．ひそかに婚姻をむすぶべからざる事。

(6) 慶安の御触書 (1649 年)

一．男ハ作をかせぎ、女房ハおはたをかせぎ、夕なべをつかまつり、夫婦ともにかせぎ申すべし。しかれば、みめかたちよき女房なりとも、夫の事をおろかに存、大茶をのみ物まいり遊山すきする女房を離別すべし。

(7) 田畑永代売買禁止令 (1643 年)：自立農民 (本百姓) の経営を維持し、その没落を防ぎ、年貢徴収を確実にする。

(8) 分地制限令 (1673 年)：分地とは農民が田畑を分割相続すること。分地がさかに行われると、自立農民が零細農民 (水呑百姓) に転落し、年貢徴収に支障をきたすため。当初は名主 20 石、一般百姓 10 石以上の保有者に限り分地を認め、それ以下の分地は認めなかった。

(9) 農民に対する基本政策 (本佐録：本多正信が 2 代将軍徳川秀忠に上申した意見書)：百姓は財の余らぬように不足なきように治めること道なり。

(2) 鎖国

1633 年 奉書船 (南蛮貿易に従事した船。朱印状の他に老中の奉書を必要としたのでこの名がある) 以外の海外渡航を禁じる。

1635 年 海外渡航禁止。在外日本人の帰国禁止。

1637～1638 年 島原の乱→キリスト教禁教が一層厳しくなり鎖国が促進された。

1639 年 ポルトガル人の来航禁止。

1641 年 オランダ商館を平戸から出島に移す。(鎖国の完成)

[5]

(1) 江戸三大改革

(1) 享保の改革：18 世紀前半、将軍徳川吉宗。家康時代への回帰。没落武士を救う。

公事方御定書：幕府の成文法。大岡忠相らの編纂。

一．主殺 二日さらし、一日引廻、鋸挽の上、磔

上げ米：大名から 1 万石につき 100 石の割合で米を上納させる。代償として大名の在府 (江戸滞在) を半年とする。

足高の制：役職の標準石高を定め、それ以下の者が就任する時、在職中だけ不足分を支給する制度。

めやすばこ

目安箱：政治改革の参考にするために江戸城に置かれた箱で、庶民は進言・苦情などを書いて投書した。

- (2)寛政の改革：18世紀後半、老中^{まつだいらさだのぶ}松平定信（田安家出身、白河藩松平家の養子、時の将軍は11代家齊^{いえなり}）。田沼意次^{たぬまおきつぐ}の否定と政治の引き締め。

七分金積み立て：江戸の町入用の節減分の7割を積み立て、低利融資し、その利子で貧民救済にあてた。

棄捐令^{きえんれい}：1789年、旗本・御家人救済のため、札差^{ふださし}（金融業者）への借金を放棄させた。

石川島人足寄場^{にんそくよせば}：無宿者の軽犯罪者を収容、職業技術を授けた。

異学の禁：朱子学を学ばない者は官職に登用しない。この学問統制の目的は朱子学が幕藩体制の正統学であることを明確に打ち出すことであった。

- (3)天保の改革：19世紀前半、老中^{みづのただくに}水野忠邦。内外の問題に対処するための政治刷新。

人返しの法：強制的帰農策。江戸に流入した下層民を帰農させる。

上地（知）令：江戸・大坂周辺の大名、旗本領を直轄地として、経済的、政治的基盤の再建・強化を企画したが、施行されなかった。

株仲間の解散：物価騰貴の原因と見なされた株仲間を解散して自由営業を認めた。

[6]

開国と江戸幕府の終焉

1. 国内の問題：大塩平八郎の乱などの社会不安。

2. 国外の問題：北からのロシアの接近。

3. 思想の問題：国学の発展→日本人としてのアイデンティティ、尊王思想。

1837年、モリソン号事件：漂流民返還と通商交渉のため来航したが撃退された。

1853年、ペリー艦隊来航（幕府は対応に苦慮し老中阿部正弘は諸大名に意見を述べさせる）

1854年、幕府はペリー艦隊の威力に屈して日米和親条約を締結する。

（老中首座堀田正睦^{ほったまさよし}、攘夷論者の孝明天皇に通商条約について伺いをたてる）

1858年、幕府はハリスの要求に屈して日米修好通商条約に調印する。

これ以降攘夷論（外国を撃退することを主張する排外思想）が激しくなる。

1866年、薩摩藩と長州藩は極秘に軍事同盟を結び、倒幕へ動く。（薩長連合）

1866年、幕府の第2次長州征伐が失敗に終わり、幕府の権威は失墜した。

1867年10月、第15代将軍慶喜^{よしのぶ}が大政奉還をする。同日薩長に対して倒幕の密勅が下る。

1867年12月、王政復古の大号令が下る。

1868年、戊辰戦争勃発^{ぼしん}

【6】重要問題（3）の解答・解説

【解答】

【1】

ア) f／元	イ) b／元	ウ) g／化	エ) c／化
オ) a／元	カ) d／化	キ) d／化	ク) h／化
ケ) i／化	コ) e／化		

【2】

ア) j	イ) f	ウ) l	エ) c	オ) k	カ) i
キ) a	ク) e	ケ) d	コ) b	サ) g	

【3】（順番に）

下関	遼東	三国	北清
満州	1904	ポーツマス	

【4】

西郷隆盛（8）	板垣退助（11）	井上馨（7）	陸奥宗光（2）
二葉亭四迷（4）	福沢諭吉（1）	与謝野晶子（12）	小村寿太郎（5）
吉野作造（10）			

【5】（順番に）

^{わいはん} 隈板	伊藤博文	立憲政友会	桂太郎	1918
原敬	加藤高明	治安維持法	犬養毅	5・15

【解説】

[3]

(1) 下関条約 (1895 年、日清講和条約) 日本側全権: 伊藤博文、陸奥宗光 (伊藤博文内閣)

(1) 清国は朝鮮を独立国と認める。

(2) 清国は日本に遼東半島および台湾・澎湖諸島を割譲する。

(3) 清国は日本に賠償金 2 億 両^{テール} (日本円で約 3 億 1,000 万円) を支払う。

(2) 臥薪嘗胆^{がしんしょうたん} 徳富蘇峰 → 平民主義から国家主義へ

(3) 日露戦争

陸軍: 満州軍総司令部総参謀長児玉源太郎: 奉天会戦^{ほうてん}で大勝利

ロシア東洋艦隊基地がある旅順港^{りょじゅん}を閉塞^{へいそく}: 広瀬中佐

203 高地より大砲で旅順攻撃: 乃木希典^{のぎまれすけ}將軍

ロシアバルチック艦隊: 日本海海戦で東郷平八郎率いる連合艦隊により撃滅さる。

当時の予算規模 2 億円に対し、戦費は約 17 億円。日本側の戦死者約 8 万 8 千人。

(4) ポーツマス条約 (日露講和条約) (外務大臣小村寿太郎) (桂太郎内閣)

(1) ロシアは韓国における日本の優位を認める。

(2) ロシアは旅順・大連地区租借権を譲渡する。

だが肝心の賠償金は取れなかった。→日比谷公園焼き討ち事件

[4]

(1) 西郷隆盛

1868 江戸城無血開城 (勝海舟^{かつかいしゅう}との直談判)

1873 征韓論で敗れる 1877 西南戦争 ⇔ 大久保利通 (富国強兵)

1871 年の廃藩置県で士族に藩からの米の支給はなくなり、1876 年の秩禄制全廃で完全に米の支給が打ち切られることになったが、それに同調しない薩摩藩と明治政府との間に緊張が高まった。

薩摩の大久保利通、西郷隆盛、長州の木戸孝允^{きどこういん}は明治維新の三傑。

(2) 板垣退助

1881 自由党結成 (国会開設の詔^{みことのり})

1882 岐阜事件

1884 加波山事件 (栃木県令三島通庸^{みしまみちつね}の暗殺計画) などの激化事件 → 自由党解散

1890 立憲自由党結成 (第 1 回帝国議会)

1898 ^{わいほん}隈板内閣の内務大臣となる。

明治維新の三傑の後に明治政府を牛耳ったのは、長州の伊藤博文、山県有朋、薩摩の黒田清隆であり、伊藤博文らの明治政府に「国会開設」を要求したのが、板垣退助や大隈重信らであった。

(3) 外務大臣井上馨（第1次伊藤博文内閣）

1887 三大建白運動の展開「言論の自由」「地租軽減」「外交失策の挽回」

→ 欧米にこびへつらうような極端な欧化政策（鹿鳴館）

→ 領事裁判権撤回の条件として外国人判事任用を認めた。

⇒ 国家主権の侵害であるとして、国民だけでなく、政府内部でも谷干城^{たにたてき}に批判された。

お雇い外国人ボアソナード

「日本の高官にこれほど愛国心のないのを不思議に思う」と非難する。

(4) ^{ふたばていしめい}二葉亭四迷：浮雲：言文一致体

(5) 小村寿太郎（桂太郎内閣の外務大臣）

1902 年の日英同盟、1905 年のポーツマス条約の交渉にあたる。

1911 年に関税自主権の完全回復を実現。

Cf. 1894 年の日英通商航海条約で領事裁判権廃止に成功したのは、伊藤博文内閣の陸奥宗光。

(6) 大隈重信の2度の失脚

(1) 明治 14 年の政変で、失脚→伊藤博文の薩長を中心とした藩閥政権へ。

開拓使官有物払下げ事件を批判→国民煽動の疑い

国会即時開設派（大隈重信）の敗北。国会開設時期尚早派（伊藤博文）の勝利。

(2) 1889 外務大臣大隈重信（黒田清隆内閣）右足負傷。外国人判事大審院任用問題による。→失脚

[5]

(1) 自由党（板垣退助）＋進歩党（大隈重信）→1898 憲政党（大隈重信）

→隈板内閣崩壊とともに、憲政党（板垣退助）と憲政本党（大隈重信）とに分裂。

憲政党（板垣退助）→1900 立憲政友会（伊藤博文）

憲政本党（大隈重信）→立憲国民党（犬養毅）

→『万朝報』に掲載された幸徳秋水の「自由党を祭る文」

「昔の自由党は良かった。つねに民衆の立場に立って、民衆の味方として戦ってくれた。ところが今の自由党はどうだ。なんと、その時の最大の敵である伊藤の子分になってしまった。昔の自由党は良かった。」

(2)

1900 治安警察法、立憲政友会

1913 大正政変「閥族打破、憲政擁護」

尾崎行雄、犬養毅の第1次護憲運動で桂太郎内閣退陣

1918 米騒動、シベリア出兵（寺内正毅）

本格的な政党内閣の誕生（原敬）

1924 第2次護憲運動（清浦奎吾→加藤高明）

護憲三派：憲政会（加藤高明）、立憲政友会（高橋是清）、革新倶楽部（犬養毅）

1925 治安維持法公布、普通選挙法公布

普通選挙法：満25歳以上の男子は衆議院議員の選挙権が与えられた。

治安維持法：日ソ国交樹立と普通選挙法の制定とによって、今後進出してくるであろう共産主義者の活動を取り締まる目的があった。

(3)

1913 大正政変（第1次護憲運動）

桂太郎→西園寺公望→桂→西園寺→桂

政権のたらいまわしのイメージ。

二個師団増設要求を受け入れてもらわなかった陸軍が軍部大臣現役武官制（陸軍大臣・海軍大臣は現役の大將もしくは中將でないといけない）を利用して、第2次西園寺内閣をつぶした。桂太郎自身が陸軍・長州閥であった。

(4)

1924 第2次護憲運動（吉野作造の民本主義の影響）

清浦内閣（貴族院議員を中心にした超然内閣）→護憲三派（憲政会（加藤高明）、立憲政友会（高橋是清）、革新倶楽部（犬養毅））が第2次護憲運動（普通選挙断行・貴族院改革など）を展開→総選挙→護憲三派の大勝→加藤高明首班の護憲三派内閣成立

(5) 1936 2・26 事件

蔵相高橋是清、内大臣斎藤実死亡。